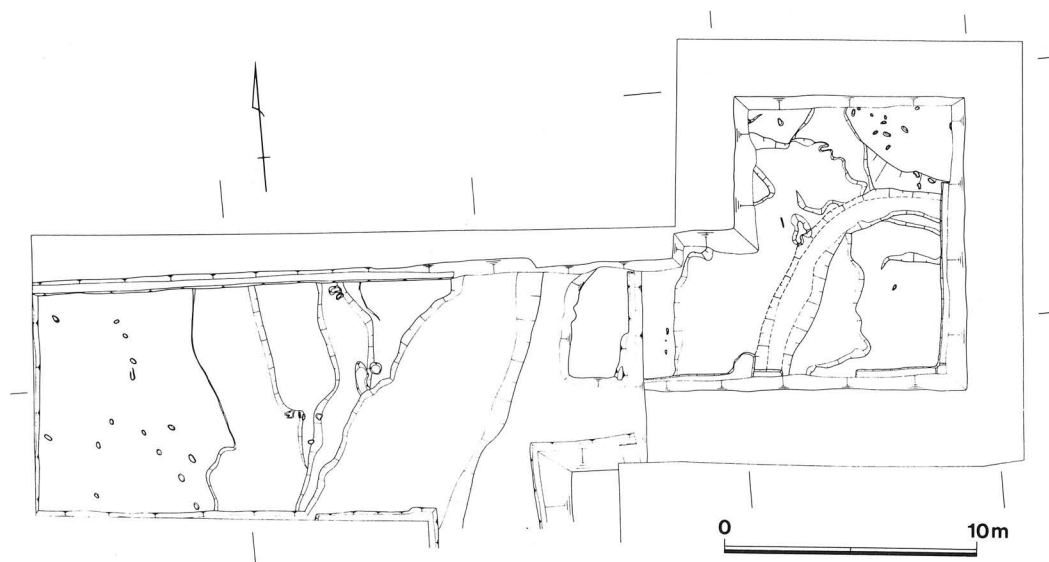


fig. 234  
第3遺構面平面図



### 第3遺構面

縄文時代の洪水層を除去した結果、自然河道が削り残したマウンド状の高まりを調査区の北東部と北西部で検出した。

**火山灰** このマウンド状の高まりの上層に被覆する灰緑色シルト層を取り去ると、厚さ5cm前後の降灰層がT.P. 2.8mで水平堆積していた。調査区の南部では、火山灰の堆積はみられず降灰基盤である淡青灰色シルト層が露頭していて、すべて流出したものと推定される。

**足跡** 足跡は、降灰層が残る北東部と北西部のマウンド状の高まり部分で検出した。調査区の北西部で、南東方向に歩行すると考えられる痕跡を検出したが、他のマウンド状の高まりにおいては、歩行方向は確認できなかった。また、降灰層が検出されなかった調査区南部では、足跡は全く検出されなかった。足跡は長さ30~15cm前後、幅15~10cm前後である。足跡内の埋め土は周縁部

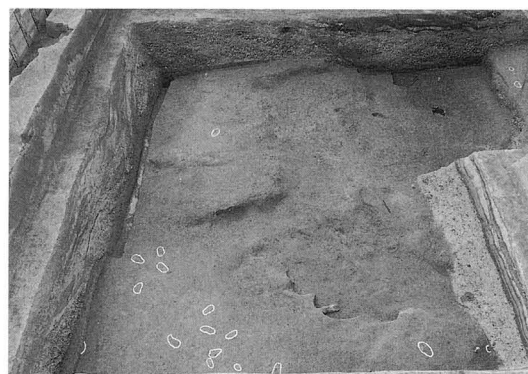


fig. 235 足跡検出状況

と底に灰色砂が埋まり、上部には火山灰に灰色シルトが混入した土が被覆していた。

### 3. まとめ

今回の調査では、中世の水田層の直下で奈良時代の遺物包含層と考えられる土層から多量の須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・製塩土器・タコ壺などが出土した。また、この包含層からは、鞍を作り付けた土馬も出土し、奈良時代後期でも遅くない時期に、これらの遺物が堆積したものと考えられる。したがって、この包含層の下面で検出された掘立柱建物は奈良時代の後期に営造された集落の一部と考えられる。

調査区南部で検出された溝1は削平されながらも、弥生時代中期の導水路もしくは区画溝であると考えられる。また、調査区北東部(B区)で検出された竪穴住居も弥生時代中期のものである可能性があり、今後、垂水・日向遺跡の中で残存状況の良い部分で弥生時代中期の集落の存在が明らかになるとと思われる。

下層の砂礫層~最終遺構面についても、以前の調査結果と同様に古環境を含めた縄文時代の地形復元と環境復元のための貴重な資料を得ることができた。

## 41. 頭高山遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

頭高山遺跡は、昭和53年に西神ニュータウン開発にともなう分布調査によって発見された遺跡である。昭和53、55年度には「大山」山頂を中心とした試掘調査が実施され大規模な弥生時代の高地性集落の存在が明らかにされた。あわせて、山中の一石五輪塔の存在や、試掘調査によって検出された瓦溜まりや礎石などから、中世の瓦葺き建物の存在も想定された。また、昭和57、58年度には、道路建設にともない遺跡の南東部分7,000㎡について発掘調査が実施され、竪穴住居や、段状遺構、土器棺墓などが検出され、磨製石剣をはじめとする石器類や弥生時代中期の土器も多量に出土して遺跡の重要性が再認識された。

この調査をうけて、昭和62年度には遺跡の範囲を確認するため広範囲にわたる試掘調査が行われた。

これら過去の調査成果をふまえて、平成5年には更に密度の高い試掘調査が実施され、弥生集落の西側への広がり、新たに古墳や山岳寺院の存在が確認されるに至った。

今回の調査は、開発局により震災復興事業の一環として行われる、住宅供給を目的とした宅地造成工事にともなう発掘調査である。

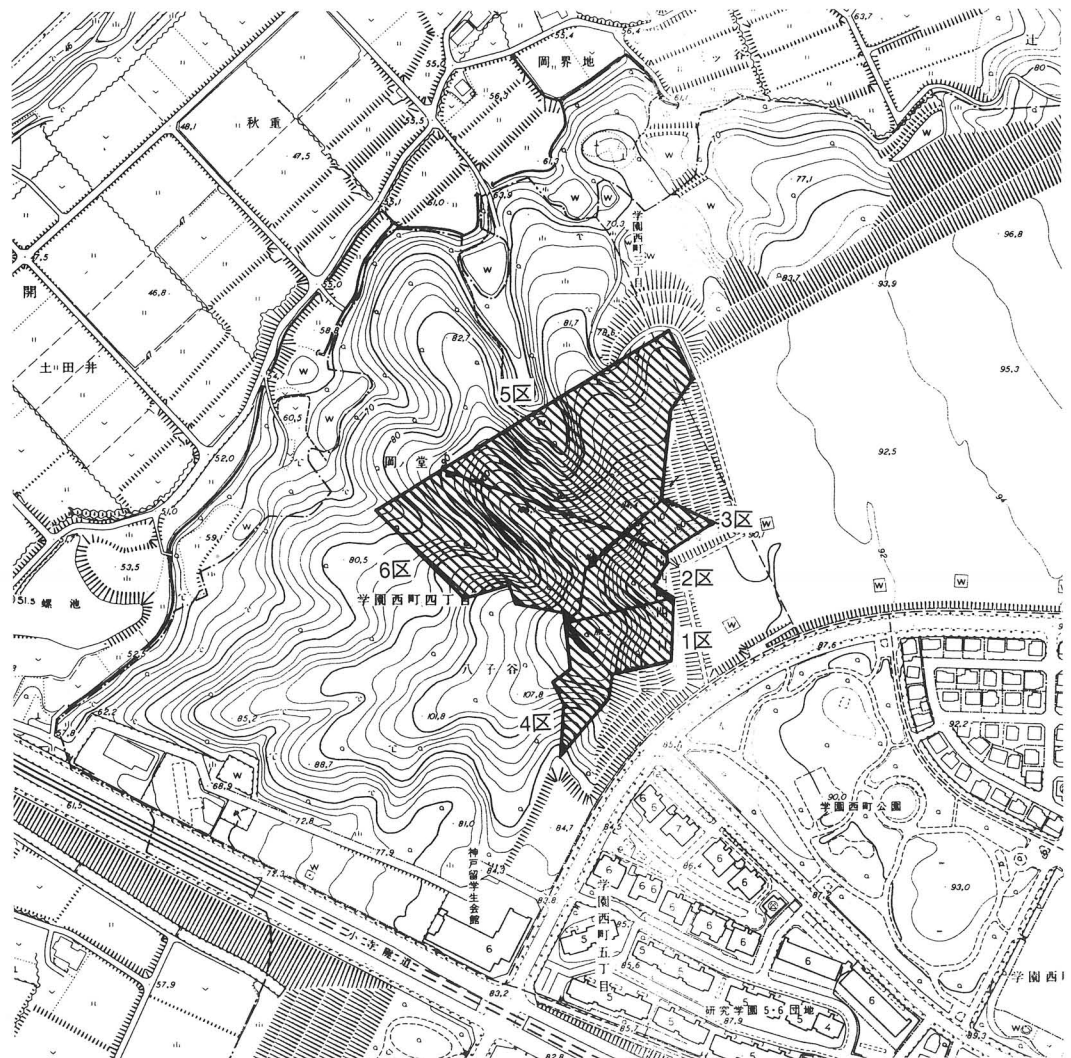


fig. 236  
調査地位置図  
1 : 5,000

2. 調査の概要 調査は、まず山林伐採を行い、伐採材を人力によって平坦地へ集積したのち、表土より人力掘削を行った。

調査に際して、便宜上調査区を丘陵の尾根ごとに設定し、順に1～7区とした。1～7区のうち、1区、2区および6区で、表土直下の層で中世の遺物を含む焼土坑各1基を確認したものの、基本的に調査区全体が腐葉土から成る表土層、淡灰色砂から成る無遺物の間層、遺構面を形成する層の順に、極めて単純な堆積状況を示す。ただし遺構面を形成す

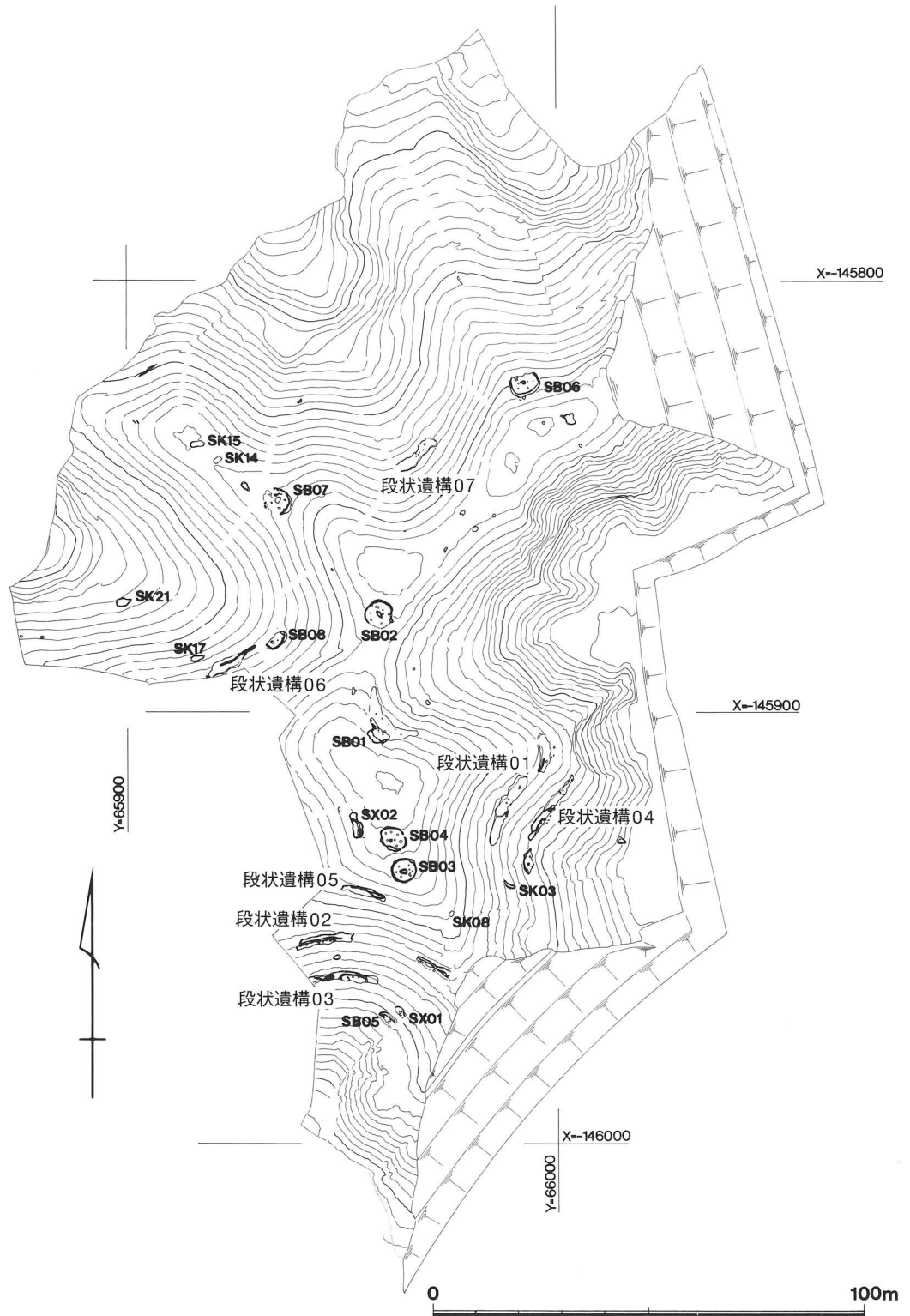


fig. 237  
遺構平面図

るベースとなる層は、淡灰黄色混礫砂、茶褐色土、明黄色粗砂など多様である。これは当遺跡が山地に立地するため、遺構が地山を形成する多様な土層の上に築かれたものであり、土質の違いに関わらず、先述の3基の土坑以外、いずれの遺構からも弥生時代中期後半の時期を示す遺物のみが出土している。以下、各調査区毎の遺構について略述する。なお、遺構には便宜上調査実施順に遺構番号を付した。

1 区 丘陵の最も東側に張り出した地区を1区とした。この調査区の北側部分は第1次調査の調査範囲と隣接するため、今回の調査に際し、4次調査後埋め戻して保存されていた竪穴住居1棟を再度検出したが、今回その住居址の北側斜面に、住居址にとりつく道のようにのびる遺構を検出した。

このような形態の遺構は、過去の多くの高地性集落の調査において、「地山整形遺構」あるいは「段状遺構」などの名称で知られる遺構と広義の意味で同様の形態をとるものである。したがって本調査にあたって、これらの遺構を「段状遺構」と称した。「段状遺構」という名称は、その機能についてはさまざまな説があり定説をみないが、今回の調査で確認された「段状遺構」のうち、1区の「段状遺構」04、6区の「段状遺構」06については、住居址にとりつく道のような状態で検出された。他の同形態の遺構は、積極的に住居址と結び付けて考えられる立地のものではなく、出土した遺物、遺構の形態からも「道」としての機能を科学的に証明することは難しい。

fig. 238 段状遺構 01  
平面・断面図

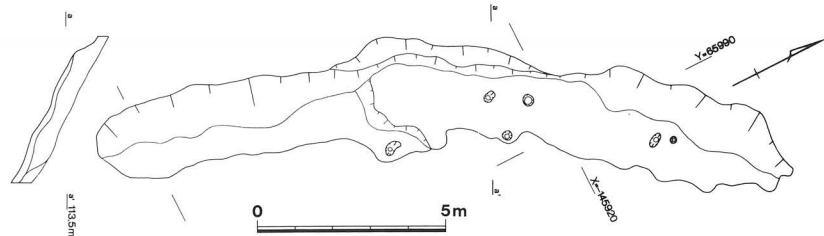


fig. 239 段状遺構 04  
平面・断面図

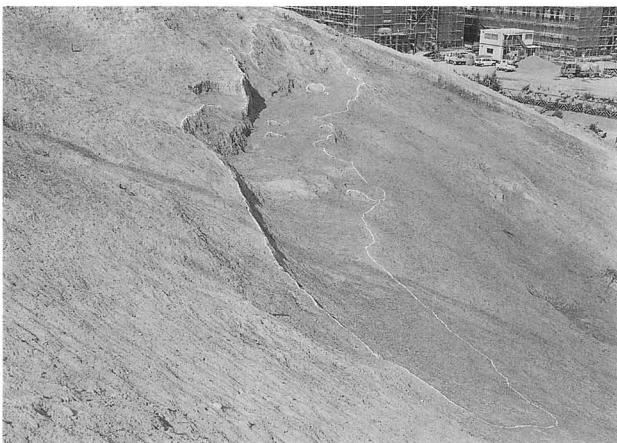
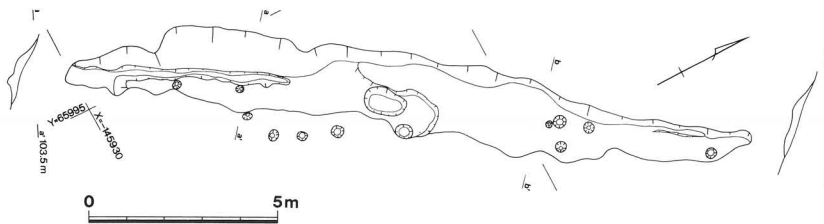


fig. 240 段状遺構 01

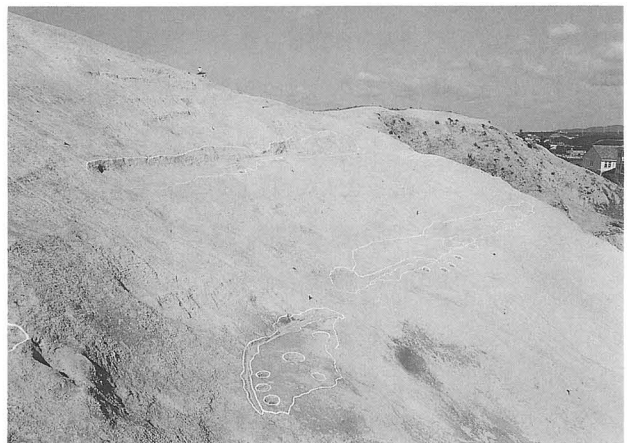


fig. 241 段状遺構 01・段状遺構 04



- 段状遺構01 丘陵の中腹、標高 107.0 m 地点付近で、山の斜面を削って幅 1～3 m、長さ約 19 m の平坦面を形成している。平坦面上で径 20～30 cm のピットを 6 か所検出したが配置は不規則で機能は不明である。また、その北側 4 m 地点で、同じ標高付近を幅 1～1.5 m、長さ約 8 m の平坦面が尾根の先端を回るように検出されたが、これは遺構面の残存状態が悪くとぎれて検出されたものの、本来前述の遺構とひとつづきのものと考えられるため、この 2 か所を総称して段状遺構 01 とする。調査時の所見では、遺構埋土から出土した土器は第 IV 様式である。その他、埋土内から大型蛤刃石斧を転用した台石が出土している。
- 段状遺構04 段状遺構 01 から約 4 m 下った地点で検出された。幅約 1 m、長さ約 18 m の平坦面で中央部分に長径 1 m、短径 70 cm、深さ 25 cm の土坑状の凹みがあり、ピット 12 基が不規則に配置されている。この遺構の南端には幅約 30 cm、長さ約 5.5 m、深さ 10 cm 程度の溝があり、その北端部分は東側すなわち斜面の下る側に向かって直角に曲がっている。また、この遺構の南 1.5 m には、ほぼ同じ標高で 4 次調査時に検出された竪穴住居があり、遺構は住居址にとりつく道の様相を呈するが、ピットや土坑、溝の機能は不明である。段状遺構 01 と同じく第 IV 様式の土器が埋土から出土した。
- SK03 標高 105 m 付近で、上記の二つの遺構を形成する土層の上に流れ込むようにして堆積した層の上面で検出された幅約 80 cm、長さ約 3.2 m の東西に長い土坑である。壁面が焼けて赤く変色し、床面全体に厚さ約 5 cm の炭層が堆積していたことから、この土坑内で火を焚いたと考えられるが、機能、性格などの詳細は不明である。埋土から出土した土器の中に須恵器の小片を含んでいることから、他の遺構より新しい時期のものと考えられる。
- SK08 調査区の南端、4 区と境を接する峰の部分に位置する。長径約 1.4 m、短径約 70 cm、深さ 30 cm 程度の土坑で、埋土は無遺物の焼土である。時期や性格などは不明である。
- 2 区 1 区の南東で、丘陵の谷状に窪む一帯を 2 区とした。竪穴住居 2 棟、土坑 3 基を検出したが、土坑のうち 1 基は中世の遺物を含み、他の遺構より 1 層上面で検出された。
- SB01 標高 115 m 地点付近で、北に向かって下がる斜面を削って平坦面をつくり、住居を築いたと考えられる。北側半分は遺構面が流失しており、現存する床面は東西約 5 m、南北約 2.5 m の半円形である。幅 10～20 cm 程度の周壁溝を有し、柱穴と考えられる径約 30 cm のピット 2 基が南東と北東の角にそれぞれ存在する。そのほか 6 基のピットを床面で検出したが機能は不明である。また、この遺構で特徴的な点は、住居の床が失われた北側の斜面に径約 40 cm のピットが等間隔に 5 基並んで検出されたことである。ピットの深さは、40～60 cm 程度で、埋土は赤く変色している。ピットの検出された面と現存する住居の床面の高低差は 1 m 以上あり、配置からも住居の柱穴とは考えられず、流失した北半分の住居の床面を造るための盛土を支える土留め的な役割の杭跡の可能性はある。
- SB02 調査区北端、3 区と境を接する標高 112 m 地点に位置する、円形の住居址である。SB 01 と対照的に峰上の比較的ひろく平坦な部分を選んで住居を造ったと考えられる。四隅に支柱穴と思われる径約 40 cm のピットと、その他 9 基のピットを床面で検出した。またほぼ中央で土坑を検出したが、その埋土は、わずかに炭を含むのみであった。しかし中央土坑から住居の南東部分にかけての床面は、焼けて赤く変色しており、この土坑と周辺部分が炉跡と灰だめの場所と考えられる。また、北端の床面直上で壺が出土している。

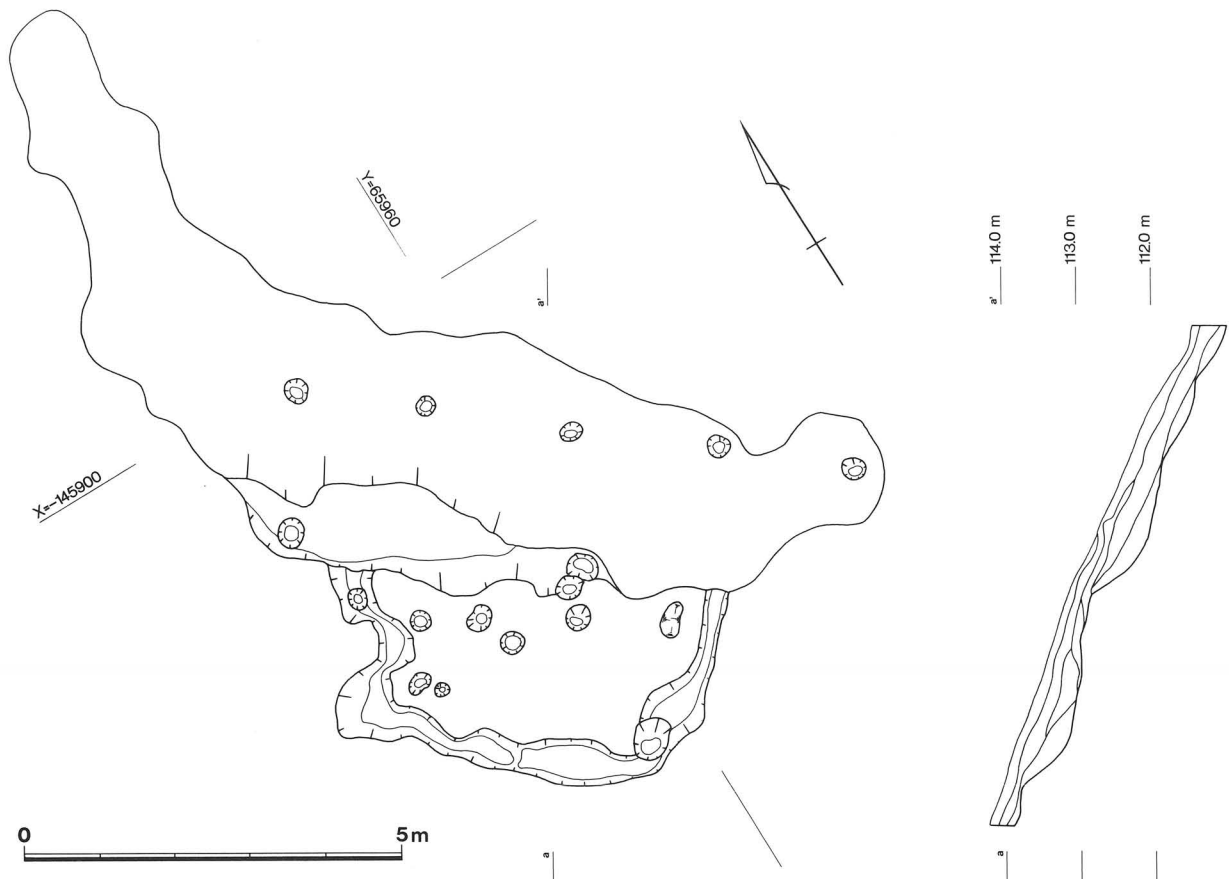


fig. 242 SB01 平面・断面図

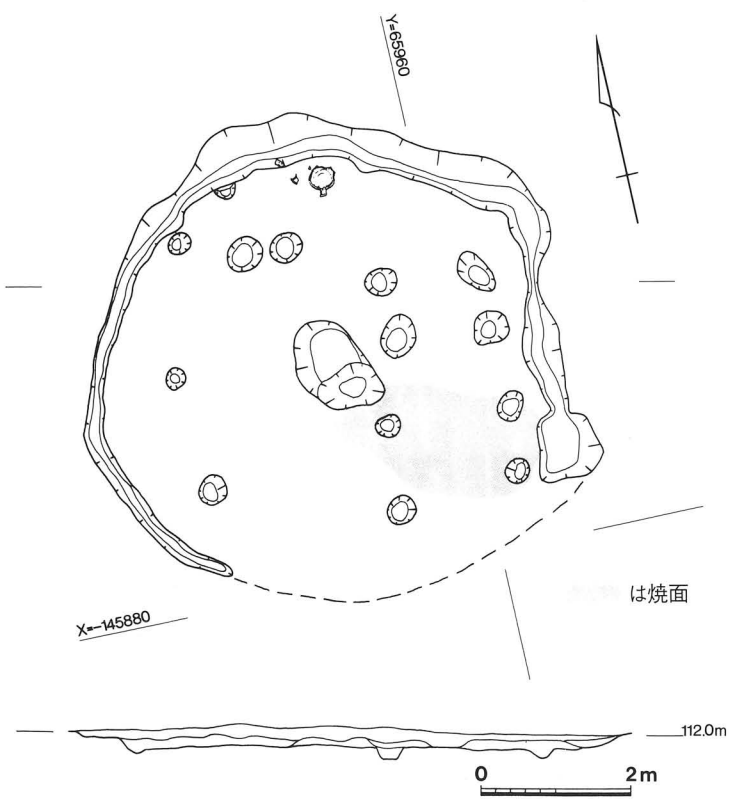


fig. 243 SB02 平面・断面図



fig. 244 SB01

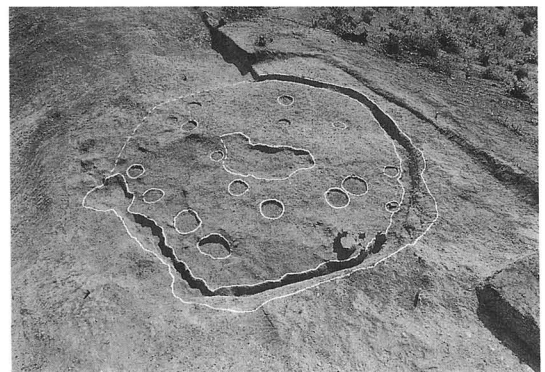


fig. 245 SB02

SK01 調査区中央部の谷部分で、長辺 2.2 m、短辺 1.2 m の長方形の土坑を検出した。北側の短辺は半円形の突出部をもち、埋土は多量の炭を含んでいた。このような形状の土坑は西区伊川谷周辺の中世遺跡で、性格不明の遺構として過去に多く確認されており、それらと同じものと考えられる。この遺構は他の遺構の検出面より一層上層で確認でき、時期的にも弥生時代以降と考えられる。

SK15 長径約 1.1 m、短径約 65 cm の不整形の土坑である。黒色粘土の埋土内から、甕の口縁部が出土した。

3 区 調査地の最も北側の細い尾根部分である。この調査区は、最も遺構密度が低く、峰上に焼土坑 4 基を確認するのみであった。これらの土坑はいずれも径約 30~40 cm の小型で、埋土は赤い焼土で無遺物である。北から順に遺構名を、SK02、10、06、09 とした。

4 区 調査地南端の最も遺構密度が高い地区である。竪穴住居 3 棟、段状遺構 3 基の他、性格の不明な遺構 2 基を確認した。

SB03 丘陵の頂上付近、標高 114~115 m の平坦地に位置する。長径約 6.5 m、短径約 5 m の東西に長い楕円形で、周壁溝はほぼ全周している。ただし南側は遺構面が流失している。北東および北西隅に支柱穴の可能性のあるピット 2 基を確認した他、7 基のピットを検出した。また、床面中央やや西寄りの位置に炉跡の可能性のある土坑を確認した。

SB04 SB03 の北側にならんで検出した。径約 5.5 m の円形で、全周する周壁溝をもつ。四方向に支柱穴と考えられるピット 4 基と、そのほか 7 基のピットを床面で確認した。中央の土坑は、東西に長い楕円形で長径 2 m、短径 1 m と大型である。

SB05 標高 99 m 地点の斜面で検出した。東端が攪乱のため未検出だが、検出できた部分だけで東西の径が約 4.5 m、南側は流失しており現状では半円形を呈する。段状遺構の可能性も残されているが、遺構の東側ごく近くが 4 次調査地であり、4 次調査ではこの遺構の延長と考えられるものは確認されていないことから、4 次調査地と本調査地の間の未調査部分で完結する短い遺構、住居址と考える。検出した平坦面で 6 基のピットを確認し現存する部分では、周溝が全周している。



fig. 246 SB03・04

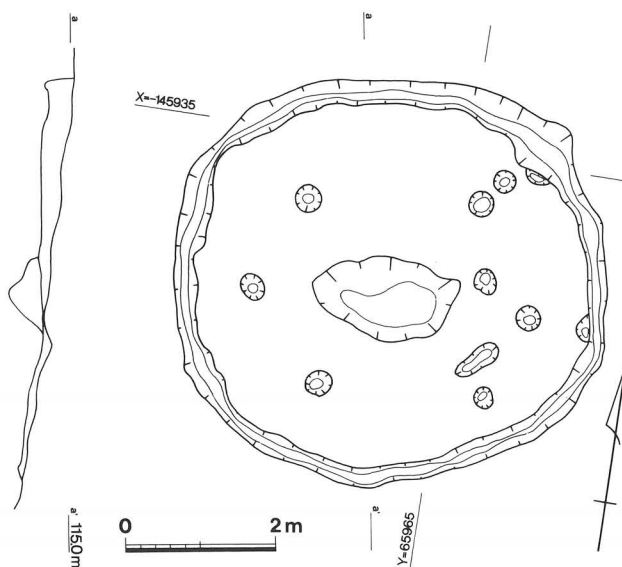


fig. 247 SB03 平面・断面図

**段状遺構02** SB05と同じ南斜面の、標高106.5m地点で検出した。今回調査した遺構のうち、最も残存状態が良好な遺構である。斜面を削り幅約1～2m、長さ約15mにわたる平坦面を造っている。平坦面上に幅30～50cm、深さ5～10cmの溝と、径30cm程度のピット8基が溝の南側に沿って2基ずつ並ぶ。溝の埋土は暗灰色土で炭を含む。また、調査区の東端の同じ標高付近に長さ約9m、幅1m程度の段状遺構が検出された。他の段状遺構と同じように溝、ピットを有し、検出したピットのうちの1基からは弥生時代中期の高坏、甕などの土器片がまとまって出土した。この2か所は、段状遺構01と同様の理由で総称して段状遺構02とする。

**段状遺構03** 段状遺構02から4m下がる地点で、長さ約17mにわたって検出された。基本的な構造は段状遺構02と同じだが、ピットの配列が不規則なこと、溝の形状が不整形であることが異なる。2条にわかれた溝の東側のものは弧を描いており、住居址状を呈するがピットの配列が不規則で、柱穴と確認できないため、現状では段状遺構と考える。西端部分が調査区外にのびるため、現時点では未調査であり、全体の形状は不明だが、段状遺構とそれに連なる住居址とに分かれる可能性もある。

**段状遺構05** 段状遺構02より上側の標高111.5m地点に位置し、長さ約10mと、他に比べてやや短い段状遺構である。基本的な構造は段状遺構02と同様で、溝に沿うピット4基と不規則な位置に2基のピットが検出されたが、うちの1基から水差形土器が、ほぼ完形で出土した。

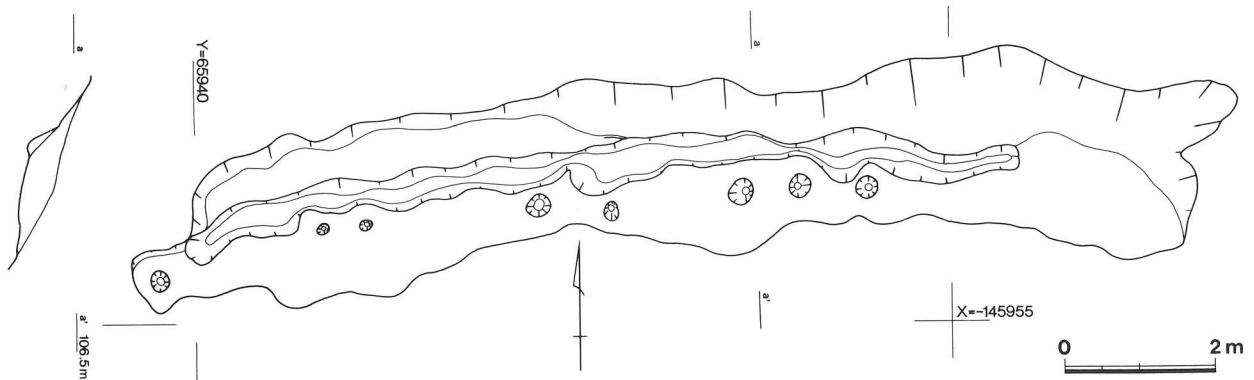


fig. 248 段状遺構02平面・断面図

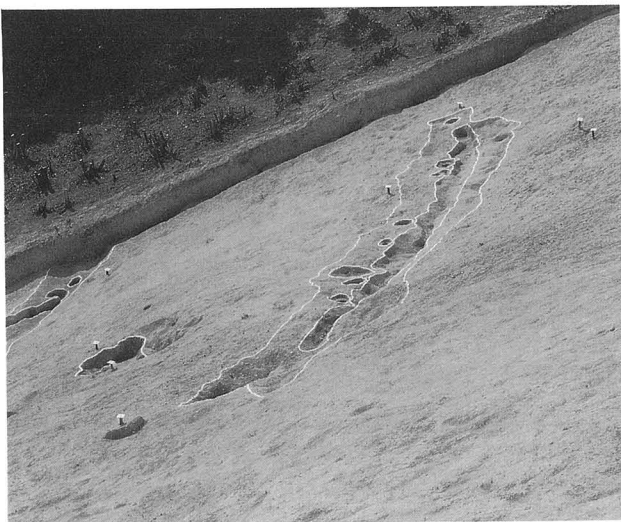


fig. 249 段状遺構02



fig. 250 段状遺構03

SX01 SB05の上側斜面に隣り合って位置する遺構で東端が未調査地である。斜面を削り平坦面を造っているが、ピットの配列や、周溝を持たない点、大きさなどから、段状遺構や住居址ではないと思われる。詳細な性格は不明である。

SX02 丘陵頂上から西側に下がる斜面の、標高114.5 m付近の斜面に位置する。南北に長い不整円形の落ち込みで、長径5.5 m、短径2.5 m深さは40~20cmである。底面上に溝、土坑をもつ段状遺構と似た構造で、あるいは同じ性格のものという可能性もあるが、小型であることと、落ち込む形状であることから段状遺構と区別することとする。

## 5 区

南北にのびる尾根を境に3区の西隣に位置する、西に向かって下がる斜面である。他に比べて遺構が少ない地区で、竪穴住居1棟と段状遺構1基、土坑9基が検出された。土坑は先述のSK08と同様の、無遺物で焼土を埋土とする時期不明の不定形なものが大半である(SK11~13、16、23、24)が、丘陵の最も西側に張り出した尾根上で検出されたSK14・15の2基については、埋土が焼土でなく、弥生時代中期の遺物を含んでいたことから、他の焼土坑と区別すべきと考えられる。

SB06 5区の斜面北端、標高108 m付近で検出した。2区のSB01と同じく斜面を削って造った平坦面に住居を築いている。現存する床面は長径約6.8 m、短径約5 mの楕円形を呈する。周溝の幅は30~50cm程度で、径30~40cmの10基のピットを床面で確認した。西端部分の床面は流失して失われており、支柱穴と推定できるものは3か所である。径約1 mの炉跡と考えられる土坑が床のほぼ中央部で確認された。また、この住居跡は周溝の南東の外側斜面でピット4基と、焼土を埋土とする径約50~70cmの楕円形の土坑1基が検出されており住居に付随する柱等の痕跡である可能性も考えられる。

SB07 6区と境を接する、丘陵の最も西側に張り出した尾根上の平坦部、標高107 m地点で検出された。床面は径約6 m、ほぼ円形で、周溝の幅は80~20cmである。床面には四隅に支柱穴と思われる径40cm程度のピット各1基とそれ以外の機能不明のピット3基の合計7基のピットを有する。炉跡と思われる中央土坑は長径約1.8 m、短径約1.2 mの楕円形で、埋土は焼土である。



fig. 251 SB06



fig. 252 SB06 平面図



段状遺構07 SB06の南側の谷筋に斜面を削って造った、幅約2.5m、長さが現存する部分で約12mの平坦面だが、南端部分は攪乱で失われており、正確な規模は不明である。他の段状遺構と異なり、床面で溝を確認することができず、7基のピットが不規則に点在するのみである。ピットの径はいずれも40cm程度である。

SK14 SB07の位置する尾根上の平坦部の、やや西よりの場所で検出した。短径約1.3m、長径約3.5mの楕円形を呈し、黒灰色粗砂を埋土とする。底面は赤く焼けており、土坑内で火を焚いたと考えられるが、壁面や埋土に焼けた跡はない。埋土内からは弥生時代中期の土器片の他、太型蛤刃石斧が1点出土している。

SK15 SK14の西側、直近で検出した。暗灰茶色シルト質砂を埋土とし、短径約1.2m、長径約1.9mの楕円形である。他の大半の土坑と異なり、火を焚いた痕跡はなく、埋土に弥生時代中期の土器片を含む。

6 区 SB07のある尾根から南の大きな谷部分を6区とした。この地区の大半が、谷を形成する傾斜角60度におよぶ急斜面で、土坑6基(SK17~21、25)と竪穴住居1棟、段状遺構1基を検出したが、いずれも比較的斜面の緩い部分か、谷地形の底部分に集って存在する。土坑6基のうちSK21は、弥生時代の遺構面を埋めるように谷に堆積する層の上面で検出され、他の遺構より新しい時期のものと考えられるが、埋土は無遺物で炭だけが多量に含まれていた。また、SK17からは弥生土器が大量に出土した。

SB08 標高105m、丘陵の頂上から西に向かう谷筋のはじまる場所に位置する。確認できた部分で長径約5.5mの半円形を呈し、幅50~20cmの周壁溝を有する。床面で径40cm程度のピット2基と、径約80cmの土坑1基を検出したが、西半分は流失しており埋土も谷に流れ込む流土と考えられ、本来の遺構面は損なわれている可能性が大きい。そのため詳細な規模等は不明である。

段状遺構06 SB08の西側に、同じ標高で住居址に続くように東西にのびる遺構を検出した。溝、ピットをもち他の段状遺構と基本的に同じ構造を持つと考えられるが、ピットの位置は不規則で、4基と少ない。幅は最大2.5m、長さ15mにわたるが、SB08同様、谷底への流土の影響で、遺構面の残存状態は悪い。

SK17 長径6.3m、短径2.5mの楕円形で、段状遺構06の北側、斜面の下側に位置する。暗灰黄色砂層と黒灰茶色砂層の2層の埋土内から多量の弥生土器が出土した。土器の廃棄場所と考えられるが、詳細な性格は不明である。

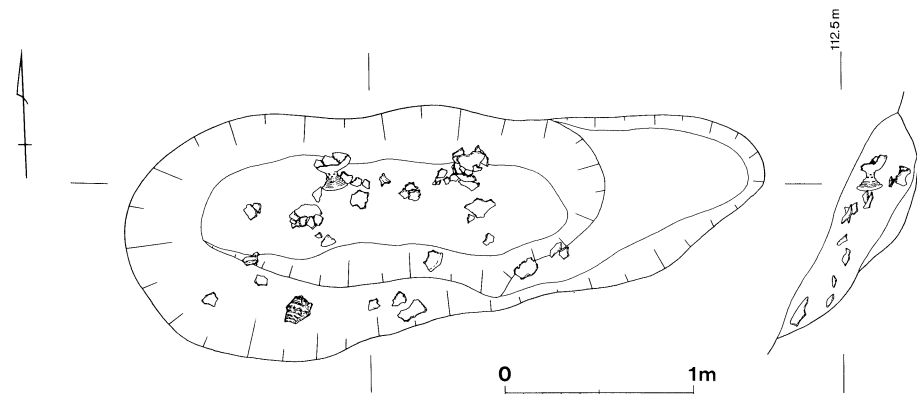


fig. 253  
SK17 遺物出土状況  
平面・断面立面図

SK21 6区の中央を貫く西向きの谷の底、標高95m地点、谷の流土上層で検出した。この遺構のベースとなる層は、弥生時代の遺物を含む流土層の上層で、遺構の造られた時代も弥生時代以降と考えられるが、明確な時期を示す遺物は出土しなかった。形状は2区のSK01に似ている。

7区 平成5年度の試掘調査により、中世山岳寺院である大谷寺の存在が明らかとなったが、この中心伽藍部分および参道に比定される部分である。今年度は、本格的な調査に先立ってあらたに伐採面積を広げたうえで、かなり厚く積もっている落ち葉、腐葉土層の除去をおこない、現況地形の観察・測量などを実施した。

調査区内の各所において石材の一部と思われる花崗岩片が散見され、作業中には多くの瓦片が表採された。また、参道（推定）の途中には、五輪塔の一部が転落している。

調査の結果、試掘調査により指摘されていた基壇状の高まりや、建物跡とされている区画以外にも、谷を構成する尾根の斜面上にもいくつかの小区画が存在することが確認された。また、この谷筋部分については斜面は一定の勾配をもたせた法面状を、底部は幅2m前後に平坦に加工された「道」状を呈し、立地的にみても旧大谷寺の参道と考えてよいようである。

出土遺物 現在、既済の調査地から出土した遺物の総数は弥生土器が28ℓコンテナに約70箱、弥生時代の石器約35点、土玉1点である。石器の内訳は、石斧類が5点、特に大型の環状石斧と考えられる石器片や大型蛤刃石斧を台石に転用したものなどが出土しており興味深い。石鏃は8点で、高地性集落としては少ない。その他たたき石やすり石、石刃なども出土している。

3. まとめ 今年度の調査において確認された遺構は、竪穴住居8棟、土坑25基、および段状遺構7基である。これらは土坑3基を除き、いずれも弥生時代中期の遺構と考えられ、調査時の所見では弥生時代Ⅳ期に限定される。これは従前の調査により指摘されていたことを追認する結果だが、現時点で検出された遺構の分布状態から集落の中心部分は丘陵南東側、昭和57・58年度の調査対象部分側であり、今回の調査範囲は集落の広がり、比較的末端部分に近い場所であったことはこれまでの予測と異なる結果となった。

今回の調査では特に「段状遺構」と呼ぶ遺構が多く検出され、特徴的である。先述のとおり、本調査における「段状遺構」とは、考古学上定義された広義の「地山整形遺構」あるいは「段状遺構」と同質の遺構という意味で「段状遺構」と称したものである。本調査区で確認した「段状遺構」は全て、① 斜面を削り細長い平坦面をつくる ② 平坦面の端に沿って溝を有する ③ 溝に沿ってピットが並列する という構造を基本とする。このことから今回検出した「段状遺構」は、ある一定の機能、目的を持ち造られたものであると考えられる。周辺地の類例として、三田市の奈カリ与遺跡の段状遺構があげられ、両者は規模、構造共にほぼ同質である。奈カリ与遺跡の段状遺構については、住居へ土砂が流入するのを防ぐための土留めの機能をもった施設として報告されているが、この構造では十分な効果を期待できないとの意見もある。本遺跡の段状遺構についても奈カリ与遺跡同様の機能、あるいは住居に至るための「道」的な要素を持つものなど、いくつかの可能性はある。いずれも科学的根拠にとぼしく推測の域を出ない。

じょうがたに  
42. 城ヶ谷遺跡 第1次調査

1. はじめに

城ヶ谷遺跡は、明石川の支流である櫛谷川の左岸丘陵上に立地し、標高約100mほどの尾根上から70mほどの斜面にかけて広がっている。

これまで、付近で弥生土器を採集したとの記録があることから、弥生時代の高地性集落の存在が推定されていた。また、「城ヶ谷」の地名から中世の山城の存在も考えられた。

西神南ニュータウンの造成地の計画が当該地にも及ぶため、平成6年度に試掘調査を実施した。その結果、弥生時代中期から後期にかけての大規模な高地性集落が確認され、古墳時代から飛鳥・奈良時代にかけての遺物も多く発見され、当遺跡の重要性が確認された。

この試掘調査の結果に基づき、開発予定地内で遺跡が存在する範囲について平成7年度より発掘調査を実施した。

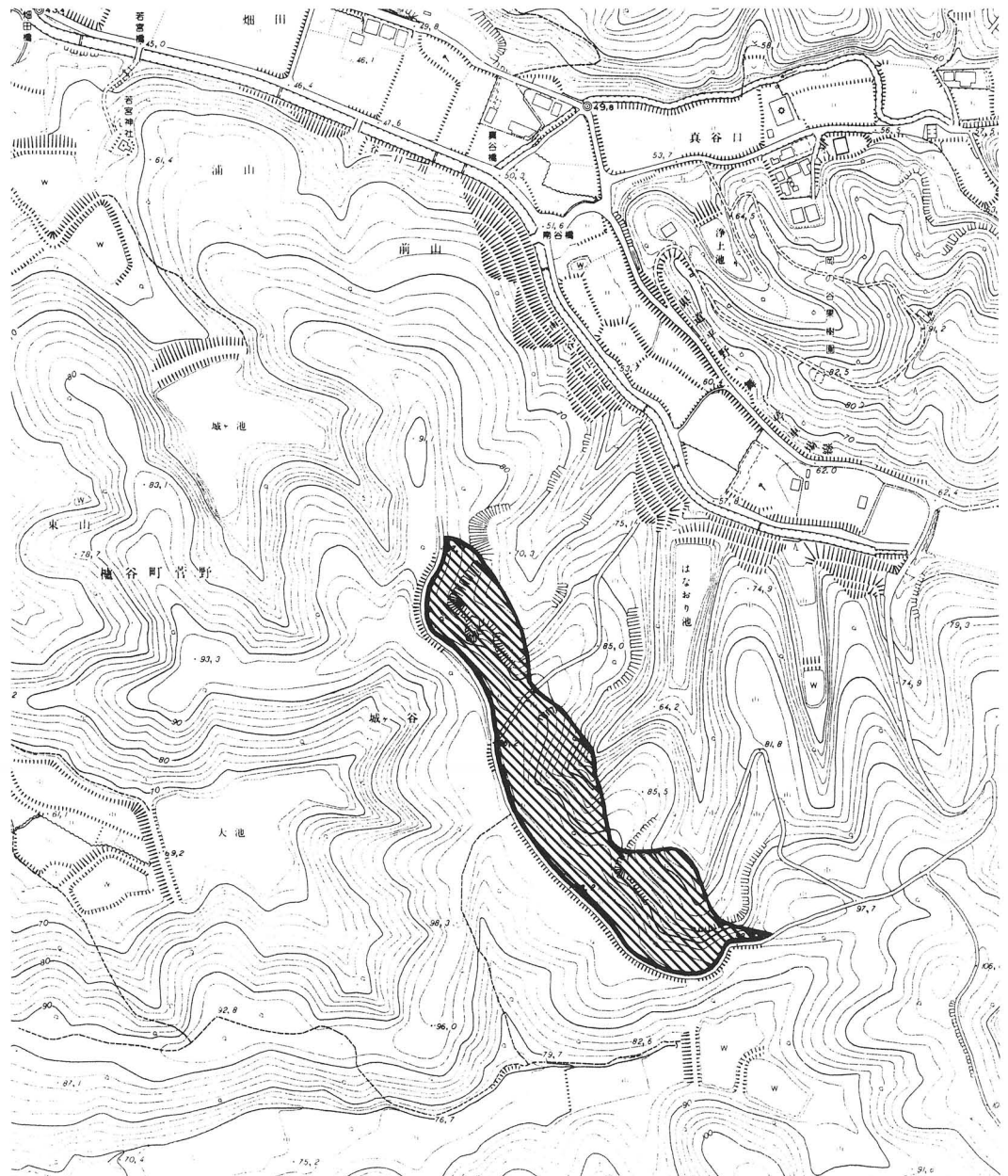


fig. 254  
調査地位置図  
1 : 5,000

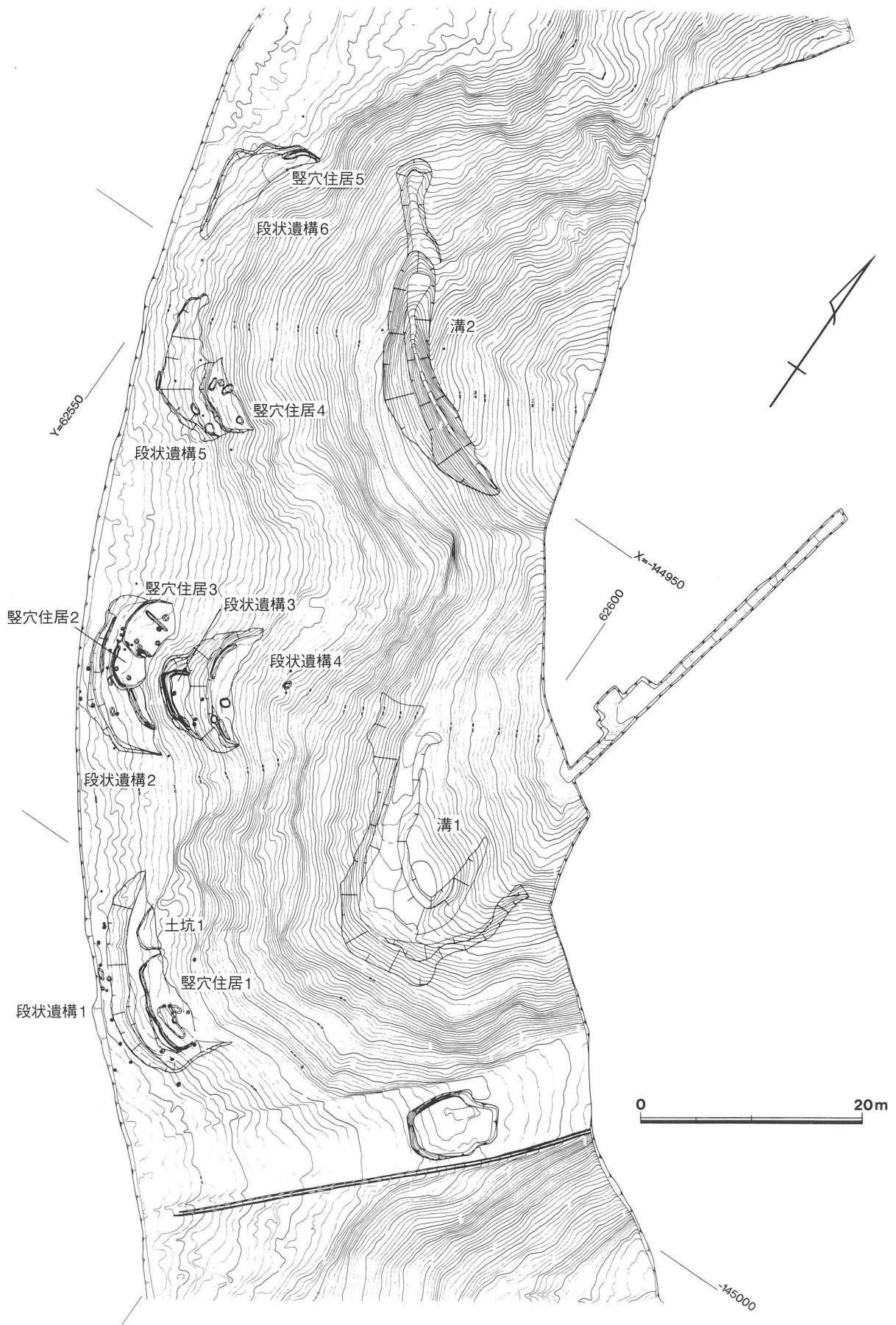


fig. 255 2区遺構平面図

2. 調査の概要 便宜上調査対象地を10区に分けて、今回は1区～3区について調査を実施した。調査地は、南東から北西にかけてのびる尾根より派生した4本の支尾根とその間の谷部分である。

1 区 2本の支尾根に囲まれた、北側に広がる谷の斜面部分である。苗圃の造成が大規模に実施されており、部分的に盛土が厚く堆積している。1区では弥生土器と須恵器が少量出土したが、遺構は検出できなかった。

2 区 2本の支尾根に囲まれた、北東に広がる谷の斜面部分である。2区では上方の緩傾斜面で、段状遺構6か所と、竪穴住居5棟を検出した。また、斜面の下方から南北方向にのびる溝を2条検出した。

段状遺構 1 2区の南端で検出したもので、斜面を造成して平坦面を造っている。東側斜面が崩落しており、現況では東西約10.6m、南北約20.2m、深さ約1.2mを測る。また、遺構の上方で柱穴列を確認した。柱穴は径約20cmであり、約1.9～2.6m間隔で検出している。平坦面には竪穴住居1と土坑1が造られている。

竪穴住居 1 北東側は崩落しているが、現況では東西約3.8m、南北約8.6m、深さ約30cmの方形の竪穴住居である。壁面には幅約30cm、深さ約10cmの周壁溝が存在する。柱穴は確認したが、北東側の崩落により柱数は不明である。また、炭を含む土坑や底部に焼土や炭の堆積する浅い不定形の落ち込みを確認した。出土した土器から弥生時代後期初頭と考えられる。

土坑 1 北東側は崩落しているが、現況では南北4.6m×東西3.5m、深さ20～30cmの土坑である。埋土より、弥生時代後期の土器片が出土している。



fig. 256 段状遺構 1



fig. 257 竪穴住居 1

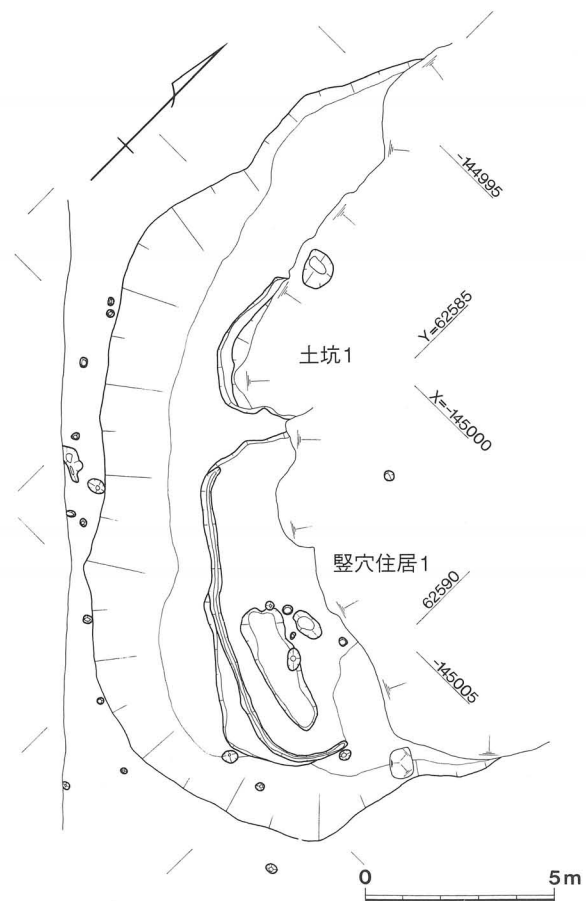


fig. 258 段状遺構 1 平面図



段状遺構 2 2区の中央で検出した遺構で、斜面を造成し平坦面を造っている。北東側斜面が崩落しており、現況では東西約5.0 m、南北約14.2 m、深さ約0.8 mを測る。平坦面には竪穴住居2・3が造られている。なお、竪穴住居2は竪穴住居3に一部を削平されている。また、段状遺構の壁面底部に沿って幅約30cm、深さ4 cmの小溝を確認した。

竪穴住居 2 東側は崩落し北側は竪穴住居3に削平されているが、現況では東西約4.0 m、南北約4.2 m、深さ25cmを測る方形の竪穴住居である。南北方向に並ぶ2本柱の竪穴住居であり、柱穴は径約30cm、深さ約20cmを測る。西側壁面に小溝が存在し周壁溝にも見えるが、南側壁面では確認されず不明である。また、住居址の西側外にも柱穴列が並ぶ。

竪穴住居 3 東側は崩落しているが現況では東西3.5 m、南北5.6 mを測る方形の竪穴住居である。南北方向に並ぶ2本柱であり、柱穴は径約40cm、深さ約30cmを測る。また、東西方向にのびる小溝を2条検出している。

段状遺構 3 段状遺構2に接した東側で検出した。現況では東西3.2 m、南北8.9 mの範囲を造成している。平坦面からの立ち上がり部分で小溝を1条検出した。

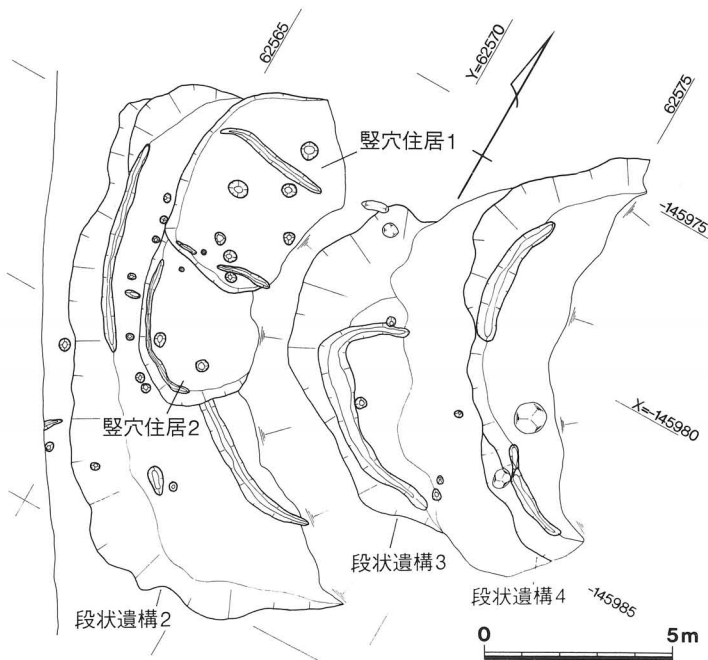


fig. 259 段状遺構2・3・4 平面図

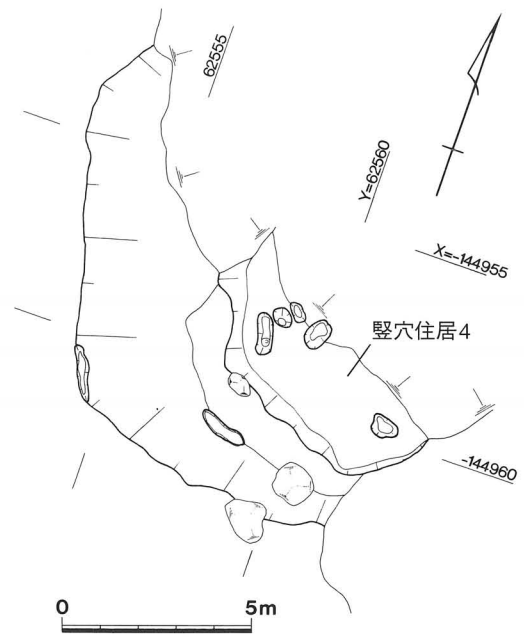


fig. 260 段状遺構5 平面図



fig. 261 段状遺構2・3・4



fig. 262 竪穴住居4 (段状遺構5)

- 段状遺構 4 段状遺構 3 に接した東側で検出した。現況では東西 3.1 m、南北 11.0 m の範囲を造成している。平坦面からの立ち上がり部分で小溝を 1 条検出した。
- 段状遺構 5 大きく削平されている。平坦面からの立ち上がりが残り、現況では東西 6.0 m、南北 13.4 m を測る。平坦面から竪穴住居を 1 棟検出した。また段状遺構の上部で一部から小溝を検出している。
- 竪穴住居 4 北側は崩落しているが、現況では東西約 7.2 m、南北約 2.4 m、深さ約 40 cm を測る竪穴住居である。南北方向に支柱穴が 2 基確認されている。柱穴間は約 4.0 m であり、柱穴は径約 60 cm、深さ約 40 cm を測る。
- 段状遺構 6 大部分が削平されている。僅かに遺構の平坦面からの立ち上がりが認められ、現況では東西 4.2 m、南北 12.7 m、深さ約 35 cm を測る。平坦面から竪穴住居を 1 棟検出した。
- 竪穴住居 5 削平等を受けており北西部分以外は検出できなかったが、現況では東西 3.8 m、南北 2.2 m、深さ約 35 cm を測る竪穴住居である。周壁溝は確認されたが東側が大きく崩落しており、柱穴は確認できなかった。

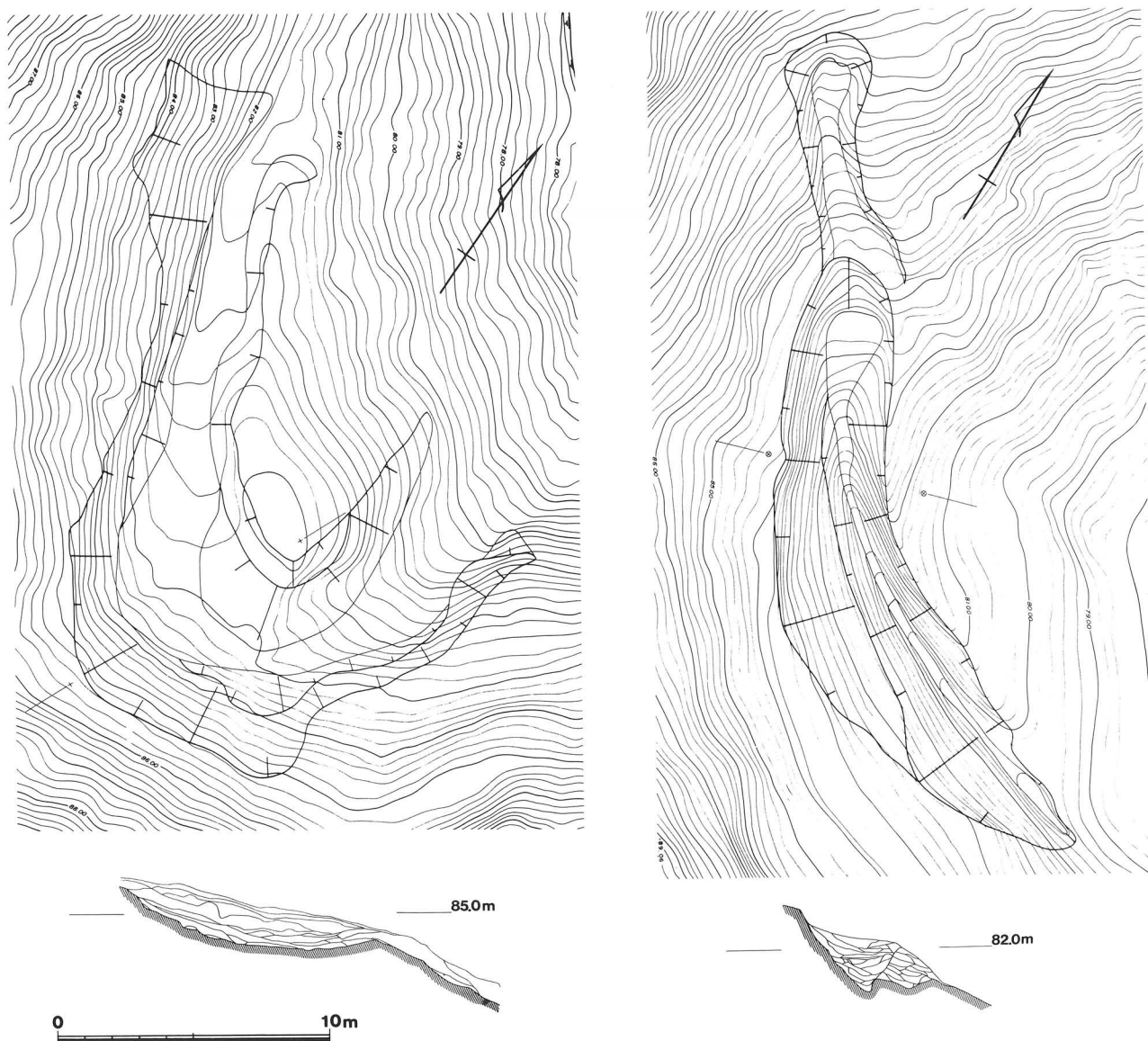


fig. 263 溝 1 (左)・溝 2 (右) 平面・断面図



fig. 264 溝1



fig. 265 溝2

溝1 段状遺構1より約12m下方の標高84m付近で検出した。幅約4～8m、深さ約1.5～2mを測る溝である。谷沿いの南北方向にのびており、位置的にも上方で営まれた集落を防御する役割を持つと考えられる。

溝2 段状遺構5・6より約10m下方の標高84m付近で検出した。幅約4m、深さ約2～3mを測る溝である。溝の掘削土を谷側に盛土しているが、あらかじめ浅い溝を掘り、盛土が流出しないように基礎を固めてから少量ずつ盛土を行っている。溝は谷に沿って南北方向に延びており、位置的にも上方で営まれた集落を防御する役割を持っていたと考えられる。

3 区 2本の支尾根に囲まれた、北東側に広がる谷の斜面部分で、苗圃の造成が大規模に実施されている。弥生土器が少量出土したが、遺構は検出できなかった。

3. まとめ 当初1区～3区については遺構・遺物の希薄な場所と考えていたが、2区より、主な遺構として段状遺構6か所と、竪穴住居5棟を検出した。調査区内での住居址は、すべて谷の緩斜面に造られており、尾根の斜面には造られていない。また、竪穴住居より標高にして10m下方には防御用の溝が掘られているが、尾根を切断して巡っているわけではなく、谷部分のみの掘削である。

城ヶ谷遺跡は弥生時代後期初頭の高地性集落であり、防御用の溝がめぐる例は市内で最初の発見である。今後の集落の中心部分の調査が待たれる。



fig. 266 調査地遠景（北から）

## 43. 白水遺跡 第4次調査

1. はじめに 白水遺跡は、明石川の支流である伊川と永井谷川の合流する地点からやや下流の右岸域に立地する。遺跡は、伊川の形成した自然堤防上と北からのびる丘陵端を中心に広がる。
- これまで白水遺跡では、平成5年度から継続的に埋蔵文化財の発掘調査が実施されてきており、弥生時代後期後半、古墳時代中期・後期、平安時代～鎌倉時代の集落址の実態が徐々に明らかとなってきている。
- 当遺跡の周辺では、東北東方向約500mに弥生時代から中世の複合遺跡である北別府遺跡、南東方向に接して弥生時代後期後半～平安時代後半の潤和遺跡、南西方向約1kmに弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡である新方遺跡、伊川をはさんだ対岸には南別府遺跡などの遺跡が知られている。また、白水遺跡の背後の丘陵上には、天王山古墳群、白水瓢塚古墳、延命寺古墳、大塚古墳群などの存在が知られている。
2. 調査の概要 今回の調査は、白水特定土地区画整理事業に伴うもので、いずれも区画街路部分にあたる。調査地点は小字垣ノ内に位置する7トレンチと、小字北端、延命寺に位置する8・9トレンチとに分けられる、標高約16～18mの地点である。

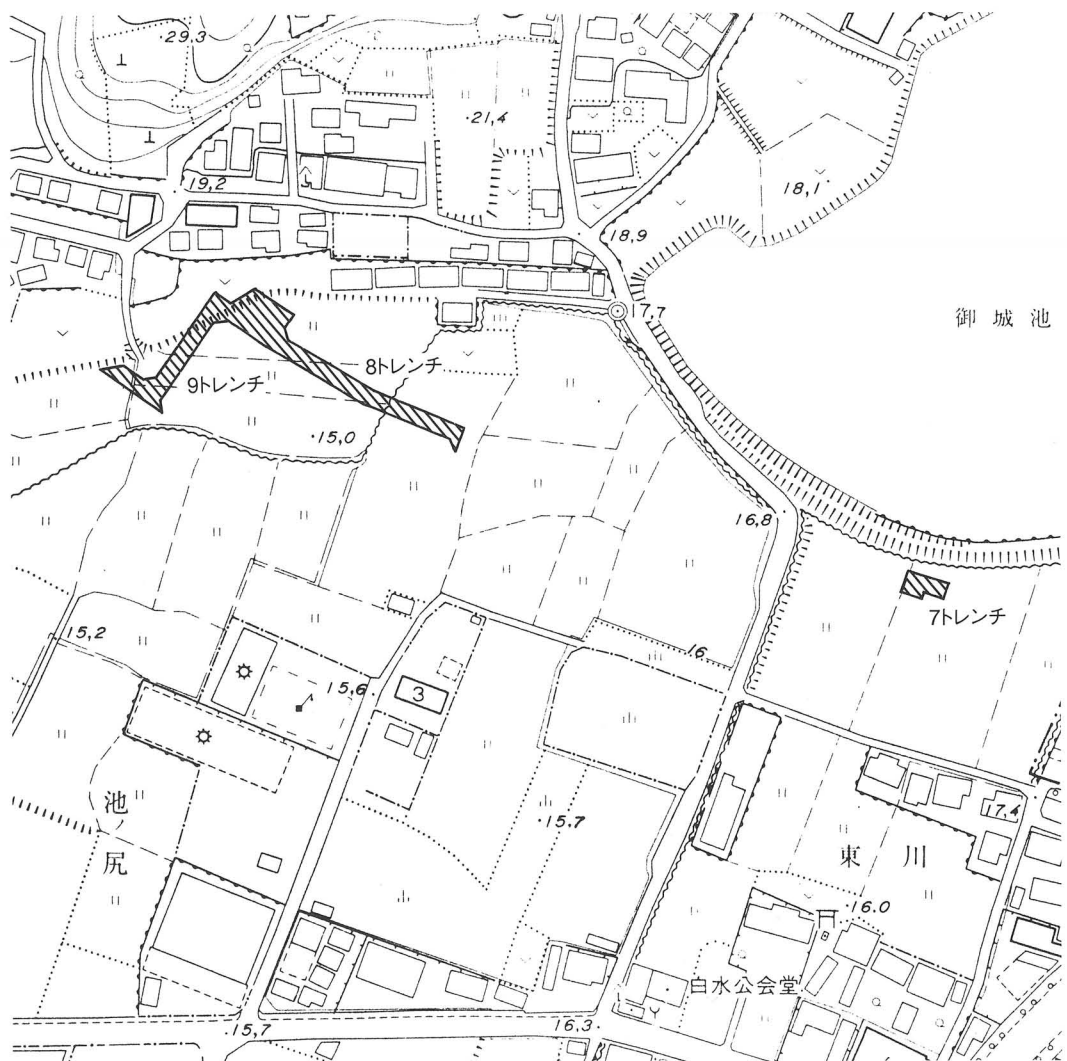


fig. 267  
調査地位置図  
1 : 2,500

7 トレンチ 昨年度発掘調査を実施した6トレンチの西側に続く区画街路と排水路の予定部分で、小字垣ノ内に位置する。長さ約15m、幅6～8mの調査区である。

確認できた遺構には、東西方向に延びる溝状遺構（SD01）1条がある。

SD01 最大幅1.03m、最大深さ18cmの溝状遺構で、埋土は灰色系のシルトである。溝底東半部で須恵器壺が1点出土している。

なお、基盤層と考えられる黒灰色シルトの上面に堆積する黄灰色細砂～細礫からは古墳時代後期の須恵器片・土師器片と磨滅した弥生土器片が少量出土している。

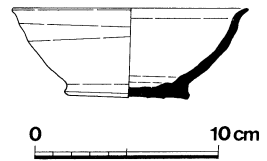
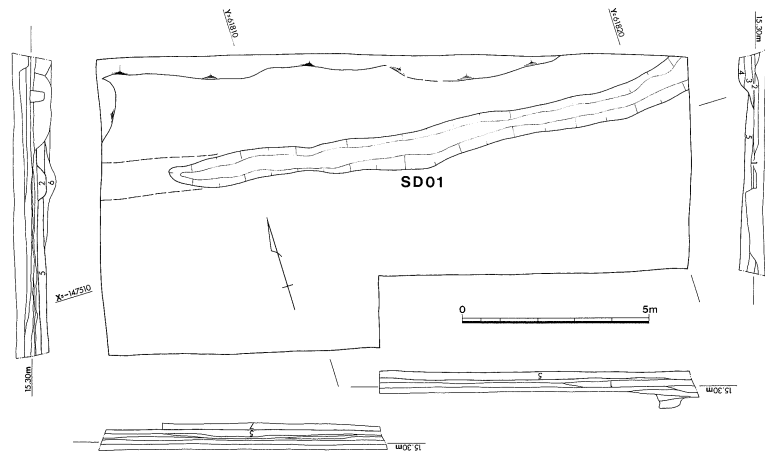


fig. 268 7トレンチ出土須恵器実測図

fig. 269 7トレンチ平面図  
土層断面図

1. 乳褐灰色極細砂～中砂
2. 灰色極細砂質シルト
3. 灰色シルト
4. 灰色シルト質極細砂
5. 明灰色極細砂混じりシルト
6. 黄灰色細砂～細礫
7. 淡黒灰色シルト



8・9トレンチ 幅6m、総延長約140mの調査区で、便宜的に8トレンチは東西方向の長い調査区を、9トレンチは南北方向の短い逆L字形のトレンチを指す。なお、後述するように8トレンチでは梵鐘鑄造遺構が確認され、周辺での関連遺構の存在を確認するため、北側へ約125㎡拡張して調査を実施している。

両調査区が接する部分が丘陵末端部にあたる小字延命寺に位置し、現在の圃場面で標高が約18mと最も高く、それぞれトレンチの端に向かってその標高を徐々に減じている。

8トレンチで確認された主な遺構には、梵鐘鑄造遺構1基、建物址1棟、ピット、柵列、溝状遺構7条、落ち込み、谷状地形、流路などがあり、9トレンチでは不整形な落ち込み、ピット、流路などが確認されている。

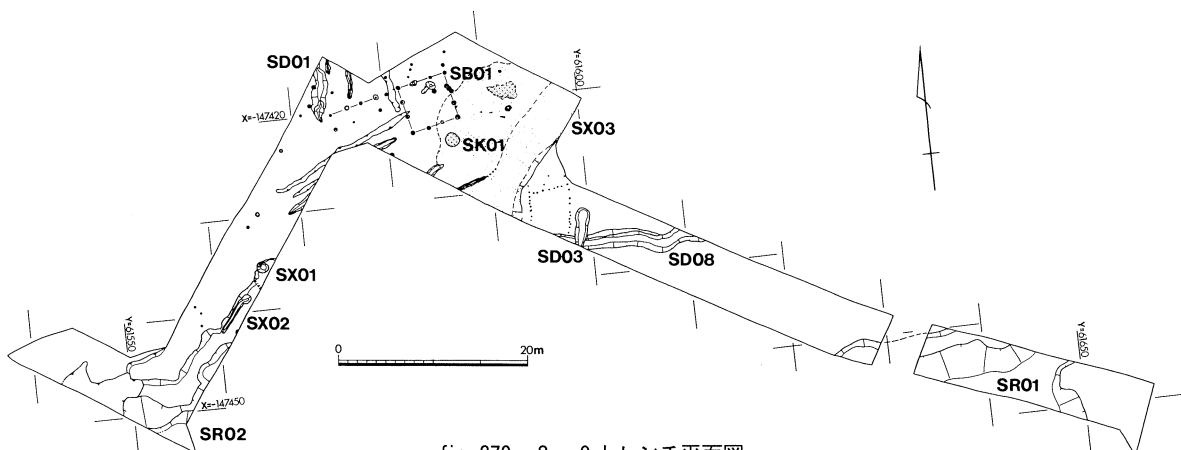


fig. 270 8・9トレンチ平面図



SK01 梵鐘鑄造遺構で、丘陵裾部に位置し、遺構の東側から南側は遺物を多く含む緩やかな谷状地形（SX03）となっている。

梵鐘鑄造遺構は、直径1.5m、深さ50cmの円形土坑の中央やや北寄りに定盤（梵鐘の鑄型を据えつけるための台）が据えられている。定盤は淡緑灰色粘土でドーナツ形に作られており、その規模は直径65cm、高さ20cmである。鑄上がった梵鐘を取り上げる際に無理な力がかかったようで、南側へ傾斜した上、割れてやや歪んでしまっている。定盤下部には約45cm間隔で平行して据えられた長さ約50cmの掛木が遺存しているが、北側で坑底から約15cm浮いていることから、南側へ傾けて製品を定盤より取り上げたかと推定できる。定盤の上面には、細かい精良な砂が残っており、鑄型が据えられていた痕跡が明瞭に残っている。この痕跡から復元できる梵鐘の口径は約60cmとなる。定盤内からは平瓦片2点と須恵器片・土師器片が出土しているが、定盤内の断ち割り調査の結果、本来は空洞であったことが明らかとなっている。また、土坑の底面全面には、土坑内の防湿効果を期待したためか、3～5cmの厚さでワラ状の均質な細かい炭が敷き詰められている。

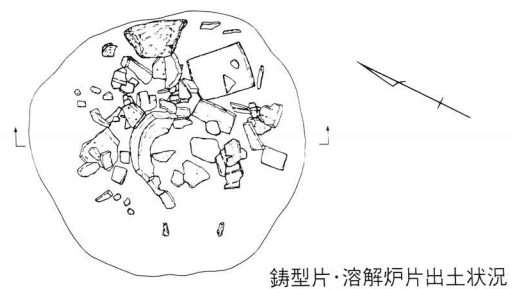
SK01からの出土遺物には、梵鐘鑄型（銘文あり）・熔解炉壁・銅滓・銅片があり、土師器壺1点、平瓦1点のほか須恵器・土師器の小片も出土している。当遺構は、出土した遺物と、層序からみて後述するSX03下層上面から切り込まれており、SX03下層からの出土遺物の時期からみて、9世紀前半～11世紀前半のものとは考えられるが、詳細な時期については現段階では言及できない。今後さらに検討を加えていきたい。



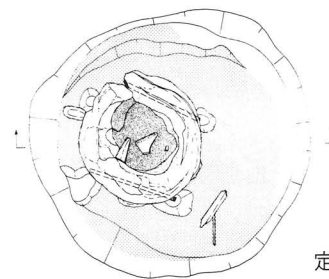
fig. 271 SK01（梵鐘鑄造遺構）鑄型等出土状況



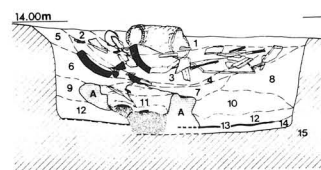
fig. 272 SK01 完掘状況（炭層上面）



鑄型片・溶解炉片出土状況



定盤検出状況



断面図



fig. 273 SK01 平面・断面図

SB01 SK01の北側に接して確認された南北3間(5.0m)×東西3間(5.0m)の建物である。柱間距離は1.6~1.8mである。柱には礎盤(礎石?)のみられるものが含まれている。出土遺物が少なく詳細な時期について明らかにできないが、層序からSX03・SK01よりさらに新しい遺構で、12~13世紀のものと考えている。

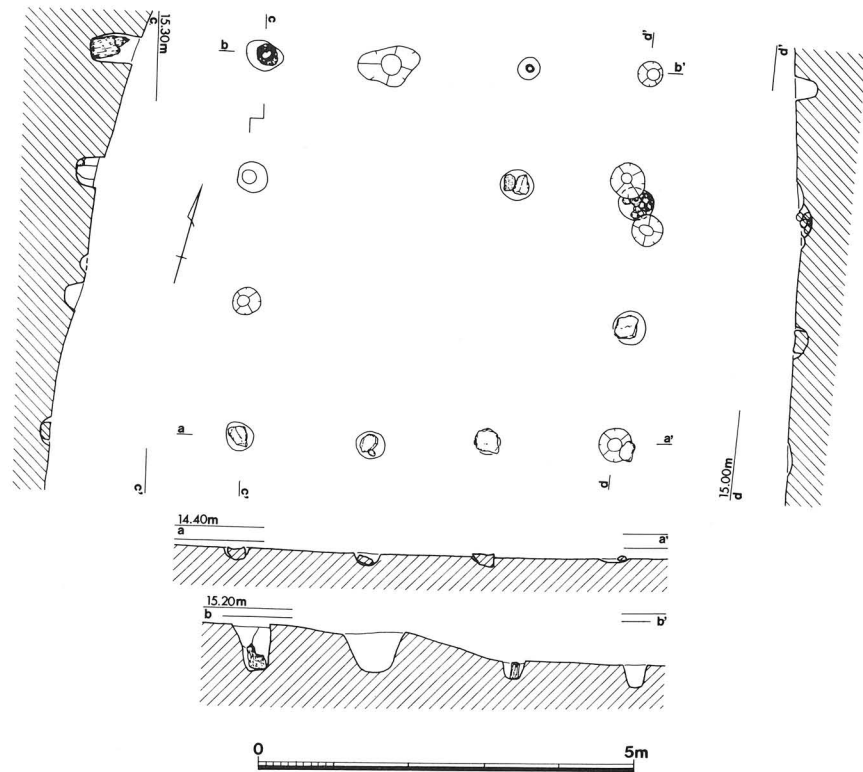


fig. 274  
SB01 平面・断面図

SX03 小さな谷状地形と考えられる落ち込みである。埋土は下層が暗緑灰色細砂混じりシルトで8世紀後半~9世紀初めの遺物を、上層の暗灰褐色シルト質極細砂では10世紀後半~11世紀前半の遺物を含んでいる。上層では、削り屑様の木材が集中して確認された部分もある。また、下層上面では、SP42のような礎石状の加工された石材や、東西方向に約1.5m間隔でほぼ一列に木斜めに打ち込まれた木杭も確認されており、何らかの施設があった可能性がある。



fig. 275 SB01



fig. 276 SX03 遺物出土状況

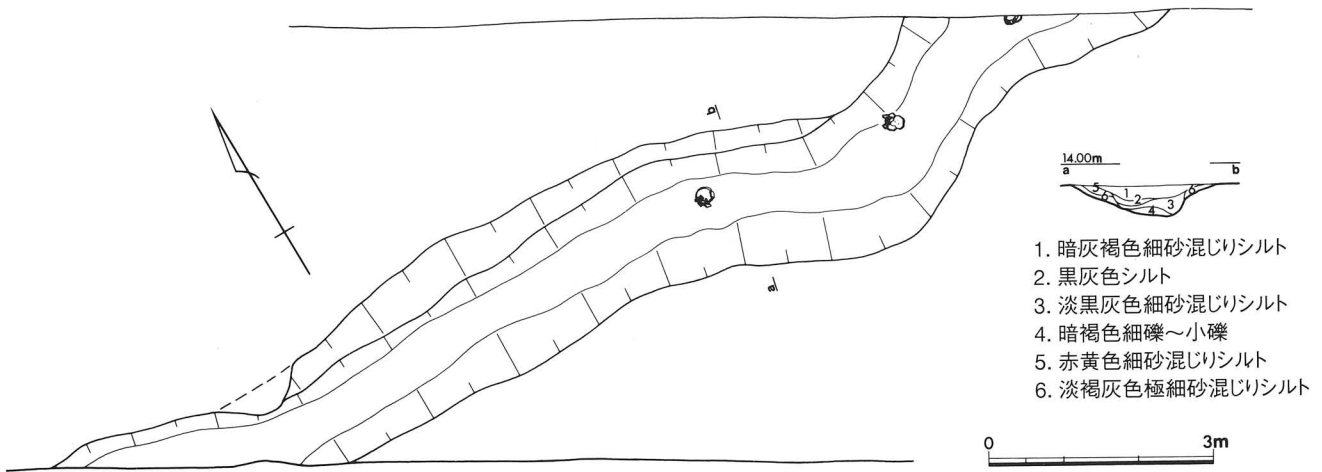


fig. 277 SD08 平面図・土層断面図



fig. 278 杭列



fig. 279 SD08

**杭列** 杭列は、直径5～10cmの杭が25～90cm間隔で打ち込まれたもので、一部が調査区外にのびるため全容は明らかにできていないが、東西4m、南北5mの方形の区画を意図したものと考えられる。SD03（最大幅1.55m、最大深さ35cm）はこれらの杭列の東側に接しており、杭列に付随する遺構と考えられる。

**SD08** 調査区内を蛇行して東西にのびる溝状遺構で、最大幅2.1m、最大深さ38cmである。出土遺物は東半の埋土上層から土師器壺・甕が出土しており、古墳時代初頭のものと考えられる。

なお、SD08より東側の調査区では、淡褐色シルト質細砂の基盤層上面で遺構は全く確認できていないが、土層断面の観察の結果、畦畔状高まりがSD08の約4～5m東側に確認できたため、生活域ではなかったと推定される。

**流路** 流路は、8トレンチ東端と9トレンチ南端で確認されている。8トレンチ東端でのSR01の検出長は約34m、最大深さは1.2m、埋土は淡褐灰色系のシルトが中心で、出土遺物には鎌倉時代頃の須恵器・土師器がある。9トレンチ南端でのSR02の検出長は約12m、最大深さは1.5mである。埋土は乳褐色系のシルトを中心にして黒灰色シルトなども含まれている。出土遺物には11世紀代の須恵器・土師器・瓦などがあり、須恵器風字硯も含まれている。

SX01 長径 3.8 m、短径 1.5 m 以上、最大深さ 20cm で、西肩部に直径 125 cm、深さ 33cm の土坑がある。出土遺物には平安時代後期の須恵器・土師器のほか平瓦がある。

SX02 SX01 に切られた落ち込みで、前述の流路 (SR02) の肩部にあたるのかもしれない。最大幅 2 m、最大深さ 30cm で、埋土は下層が乳褐色極細砂～細砂で、完形に近い 9 世紀の須恵器などを含み、上層は暗緑灰色シルト質細砂で、平安時代後期の遺物を含む。

### 3. まとめ

今年度の調査成果のうちでは、特に梵鐘鑄造遺構の発見と瓦類が多量に出土したことが注目される。

今回発見された梵鐘鑄造遺構 (SK01) は、神戸市内では初めて発掘調査によって発見された例であり、神戸市内では須磨区明神町で昭和 38 年に発見されたものに次いで 2 例目、兵庫県下では 7 例目の発見例となる。

SK01 は、土坑内に梵鐘の鑄型を据えた定盤が良好に残存している鑄造遺構そのものと、これに伴う鑄型・熔解炉・銅片などの梵鐘を鑄造した関連資料がほとんど一式揃っている。さらに、出土した梵鐘の鑄型には上帯・乳の間・池の間・縦帯～中帯などの破片がある。これらの中には、「之」、「井」、「七」などの銘文の一部が認められる破片があるが、現在調査継続中で梵鐘そのものの復元までには到っていない。なお、現在日本で知られている梵鐘 (釣鐘) の中には、この鑄型から製作されたものは存在していない。

これまでの研究成果からみると、梵鐘鑄造遺構の土坑が円形のもは時期的に新しい要素であり、定盤の内側が空洞のものは古い要素とされてきている。今回の検出例は両要素を兼ね備えており、今後遺構の時期を検討していく上で注意を要する。

また、鑄造遺構内から平瓦が伴出していることや、周辺からも瓦類が多数出土していることなどから、今回の調査地区の至近距離に古代～中世の寺院が存在していたと考えられる。この寺院址は羽柴秀吉の三木城攻めの際に焼失したと『明石市史料』に記述のみえる「延命寺」(現在字名として残っている) がそれにあたるものと考えられる。白水地区の中でも丘陵裾部分の調査がさらに進めば、寺院址の存在が発見できる可能性が高い。

一方、今回多量に出土した軒瓦は、これまで一般の集落遺跡の調査ではその出土が想定できない性格の遺物である。まず、今回 1 点出土した播磨国府系瓦の「古大内式」と呼ばれる単弁十三葉蓮華文軒丸瓦は古代山陽道に沿った駅家の推定地で確認され、8 世紀末の時期が与えられてきたものである。神戸市内では「明石郡衙」の有力推定地である吉田南遺跡で出土している。次に、これまで出土例の少ないへら描きで文様を刻む軒丸瓦・軒平瓦は、古代山陽道の「明石駅家」の推定地のひとつである明石市太寺廃寺で若干例確認されており、今年度調査が実施された寒鳳遺跡でも初めて軒平瓦が確認されている。それぞれの遺跡間の距離はさほど遠くなく、何らかの関連をもつ遺跡であったとも考えられる。「古大内式」瓦とへら描き瓦の出土は、その供給先 (生産地) の追求とともに遺跡の性格を考えていく上で示唆に富む資料と言える。

また、複弁八葉蓮華文軒丸瓦は西区神出町の万壘池 1 号窯の灰原で出土した製品と同範であることから、神出古窯址群から運ばれたものであることが判る。また、時期的に併行すると考えられる軒平瓦はその類例が明確ではないが、11 世紀代の瓦の流通を考えていく上で重要な資料であろう。

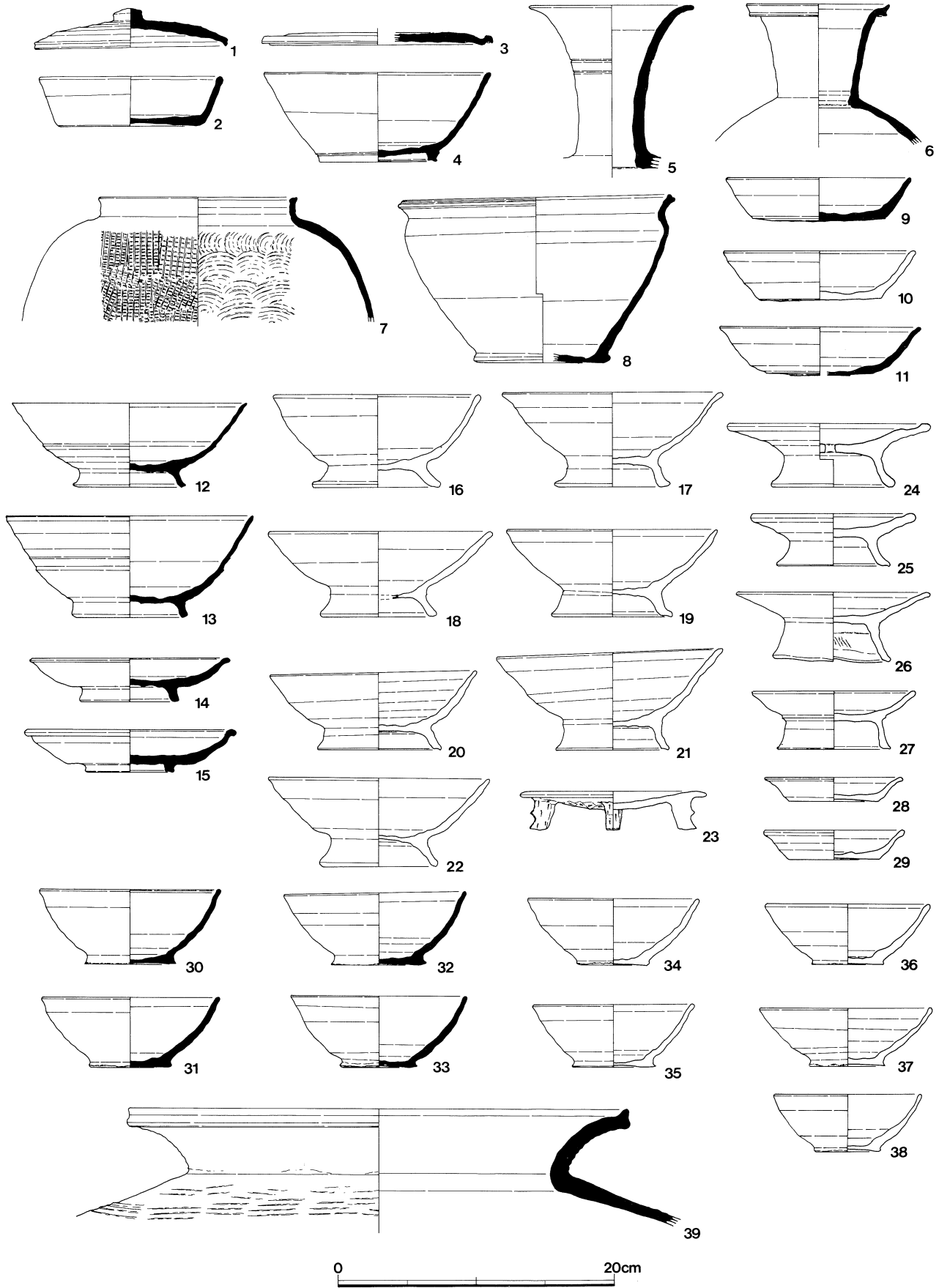


fig. 280 8・9トレンチ出土土器実測図（1～9・11～15・30～33・39：須恵器 その他：土師器）



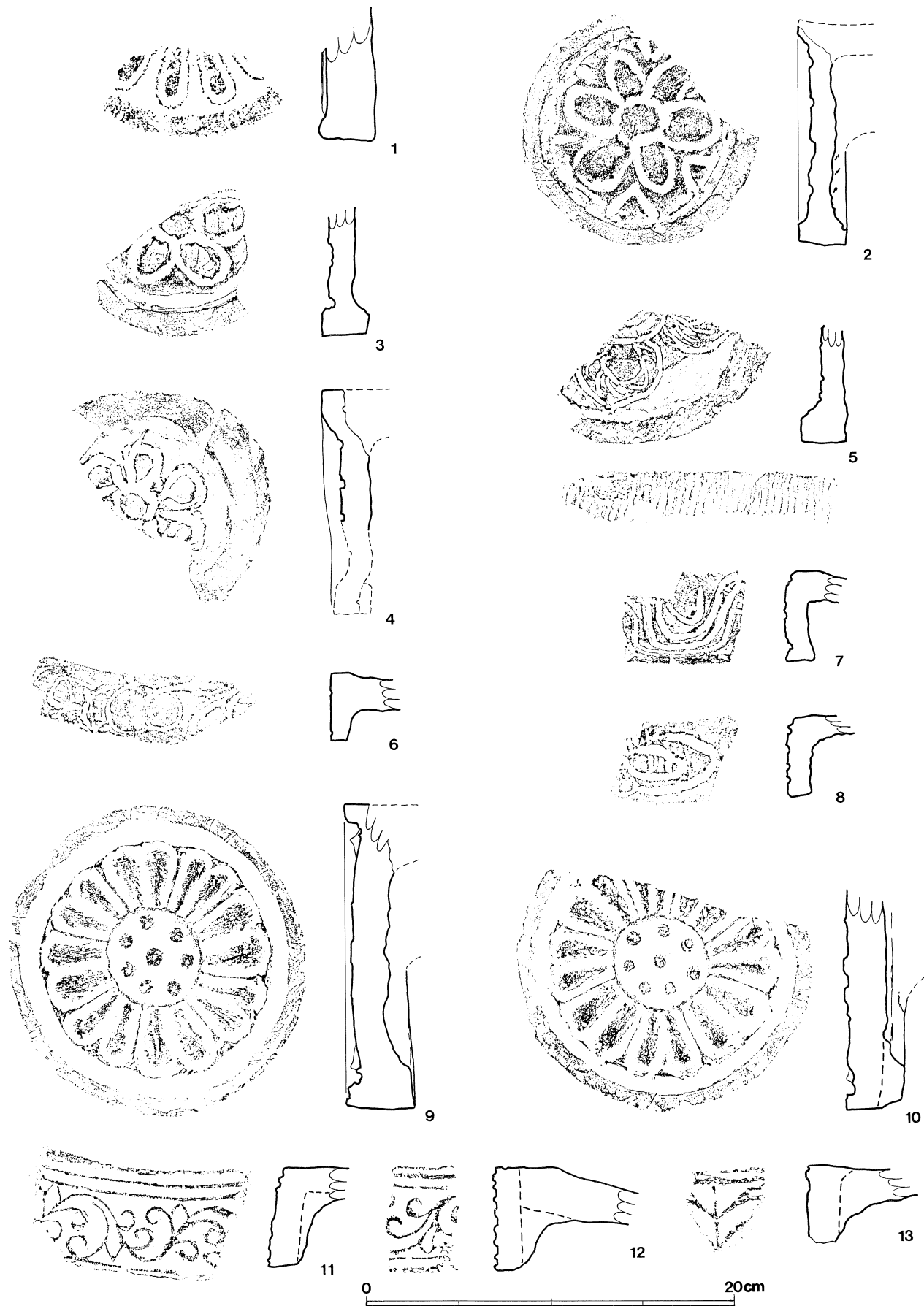


fig. 281 8・9トレンチ出土瓦

## 44. 寒鳳遺跡 第1次調査

### 1. はじめに

調査地は神戸市西区伊川谷町潤和字イガミ畑に所在する。伊川と明石川の合流点東側、伊川に面する台地西辺の標高19m付近の地点に位置する。周辺は赤羽遺跡や大明石町遺跡などの遺物散布地として知られていたが発掘調査は行われておらず、遺跡の性格については明らかでなかった。今回共同住宅建設が計画され、遺跡地に隣接することから平成7年10月に試掘調査を行った結果、遺構が確認された。そこで住宅建設により遺構に影響を及ぼす部分、約1,000㎡について発掘調査を実施することとなった。遺跡の名称は当該地の周辺の字名を冠して寒鳳遺跡と命名された。調査地は現在は畑地であり、台地上から谷に向かう傾斜地にあたり、台地を刻む小さな谷の最奥部、南向きの斜面地に立地する。

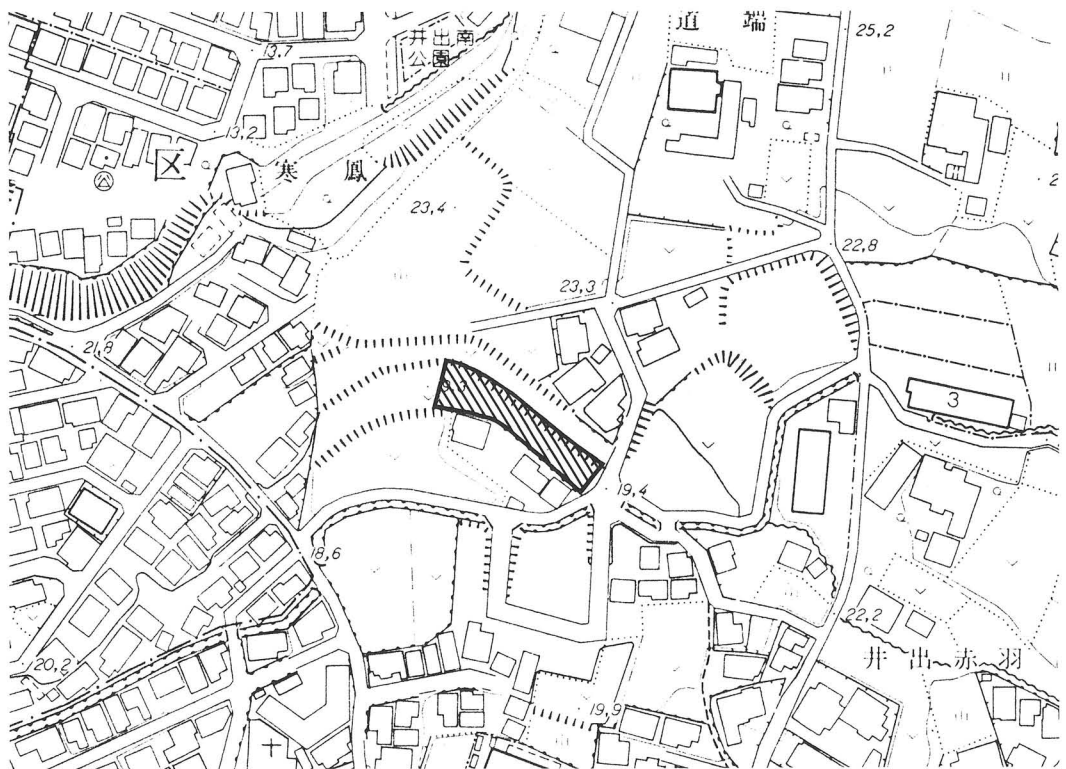


fig. 282  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査区には台地上からの土砂の流れ込みや谷川の氾濫などによるものと考えられる礫混じりの土が厚く堆積している。調査は表土、盛土、洪水層を重機により除去した後、人力により遺構確認調査を行った。

調査区の東半分では表土以下、洪水による堆積層を除去すると黄褐色礫混じり砂質土の地山となる。西側は谷に向かい傾斜する部分に湿地状の堆積土である粘質土、シルトおよび砂質土が互層をなしている。

#### 東地区

黄褐色礫混じり砂質土の地山面で掘立柱建物3棟が検出された。

#### SB01

東西5間×南北2間以上の建物である。柱穴径約60cm、東西の柱間は50cm～1mの範囲で一定せず、南北の柱間は2mと東西の列に比べて広い。埋土は茶褐色の砂性粘質土で、古墳時代の土師器がわずかに出土した。西側では南北の柱列が確認できず、調査ではL字状に柱列が検出された。

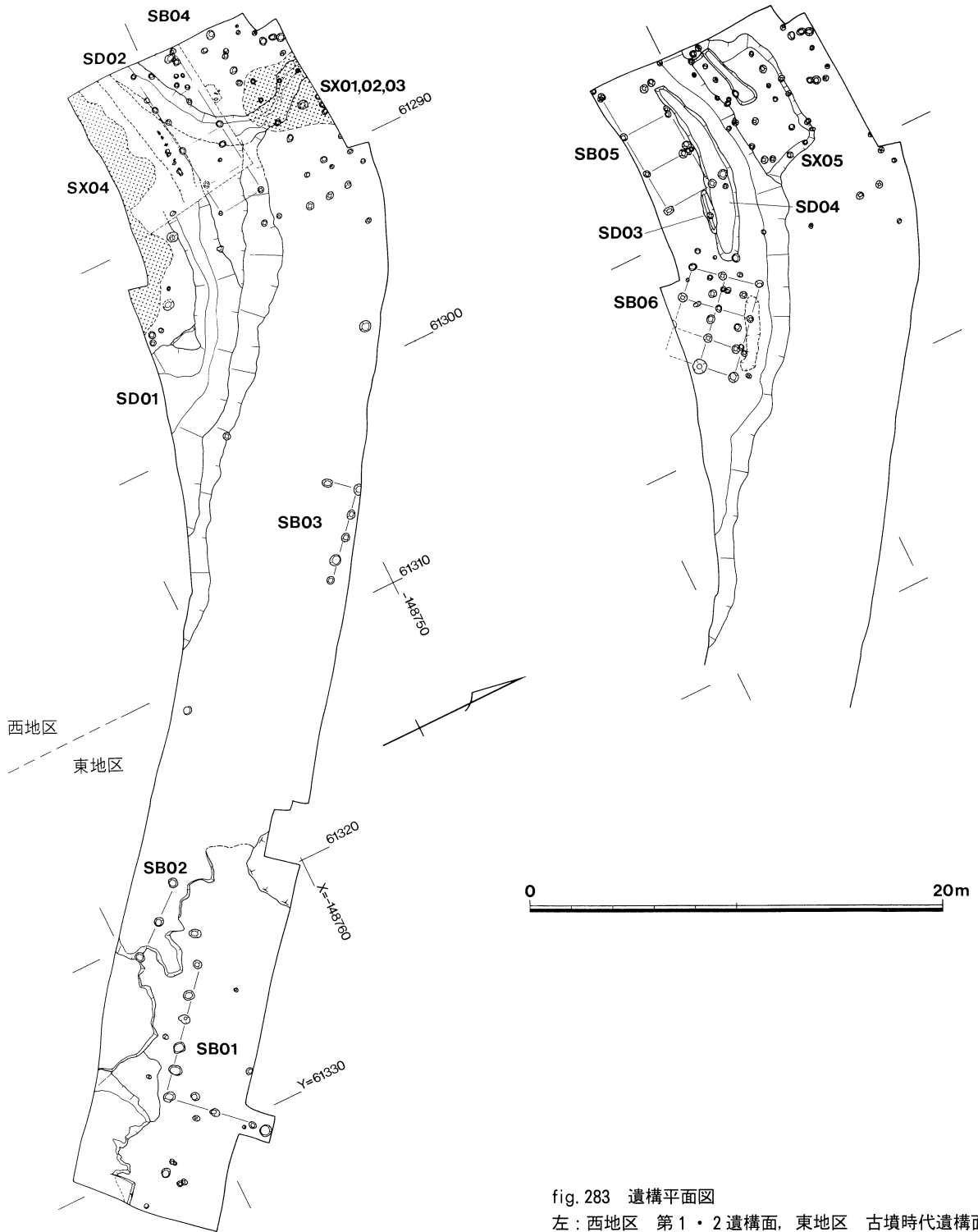


fig. 283 遺構平面図

左：西地区 第1・2遺構面, 東地区 古墳時代遺構面

右：西地区 第3遺構面

SB02 東西2間分が検出されたのみで規模や内容は不明である。検出された柱穴の径50cm、柱間は約2mである。

SB03 東西4間×南北1間分が検出された。柱穴径50cm、柱間は約1mである。土師器の小片がわずかに出土した。

検出された柱穴は洪水層の影響もあり、良好な遺存状況とはいえ、掘立柱建物として扱うにはやや問題のある点が指摘される。柵列などの可能性も含むものとしておく。

## 西地区

西地区は東地区に比べて南に向かう傾斜が顕著である。北側の台地上に近い部分では表土、盛土、灰色砂質土の下で黄褐色砂質土の地山となる。南半では傾斜する部分に湿地状の堆積土である粘質土～シルトおよび砂質土が互層をなしている。黒褐色粘質土上面（第1遺構面）、灰褐色砂質土上面（第2遺構面）、黄褐色礫混じり砂質土地山面（第3遺構面）の3面の遺構面が確認できた。時期は平安時代後期、10世紀後半から11世紀前半の範疇であると考えられる。

**第1遺構面** 第1遺構面の北半は地山直上層の灰色砂質土上面、南半が谷堆積の黒褐色粘質土により形成される。土器溜まり（SX01～03）が検出された。

**SX01～03** 遺物の集中する部分から3箇所ほどの単位に分けられるようである。それぞれの規模は、SX01が南北5m×東西2m、SX02南北4m×東西1m、SX03南北1m×東西2mである。落ち込み状のプランなどは確認できなかった。須恵器・土師器・青磁・白磁・瓦がまとまって出土しているが、上面の状況などが判らないため性格は不明である。

**第2遺構面** 溝2条、掘立柱建物1棟、土器溜まり1基が確認された。また第2遺構面を覆う黒褐色粘質土には多量の遺物が含まれており、中でも蓮弁を微細に表現した青磁の容器蓋の出土は特筆される。

**SD01** 台地斜面の平坦面から下方の湿地部との境で検出された溝である。幅3～5m、深さ40cmを測る。須恵器、土師器、瓦が出土している。この溝の中央部から10cm～30cm角の礫を並べた石列が検出されており、調査では12個確認できた。直線に並ぶものの、高低にばらつきがある。石垣状の施設の残存部と考えられる。石の周囲から瓦片が多く出土している。湿地部との区画をなすものと考えられる。

**SD02** 調査区内では円弧を描く状況で検出されたが、全体の規模、形状は不明である。検出幅約1m、深さ約20cmで中から須恵器、土師器、瓦片が出土しており、埋土中や周辺に炭の分布が認められた。溝底のレベルは谷に向かい深くなる。

**SB04** 東西4間×南北3間以上の掘立柱建物と推定されるが所々で柱が検出されなかったためどのような構造となるかについては不明な部分が多い。柱間は2m、柱穴径40cmを測る。

**SX04** 東西13mにわたり南の谷部へ下がる地形が検出された。遺物溜まりの様相を呈しており、中から須恵器、土師器、緑釉・灰釉陶器、青磁、白磁が出土、おそらくSD01の石列に伴うであろう石が数個出土した。

また第2遺構面の灰色砂性粘質土上面、SD02の円弧状の内側で一部被熱部分と焼壁、焼石が確認され、付近には炭の広がりも認められた。焼壁は高さが30cmほどあり、焼壁間の窪みに焼石、二次焼成を受けた瓦片が据えられている。おそらく鍛冶炉の炊き口の痕跡であると考えられ、炭の分布などからSD02と関連するものと考えられる。

**第3遺構面** 掘立柱建物2棟、溝2条、段状遺構1基、柱穴30基が検出された。

**SB05** 東西3間以上×南北1間以上で、柱穴径50cm、柱間2mを測る。埋土は黒褐色粘質土で一部炭を含む。柱穴SP506では瓦を投棄した痕跡が検出された。

**SB06** 東西3間×南北2間以上の総柱建物である。柱穴は谷側のものほど深く掘られている。柱穴径50cm、柱間2mを測る。遺物は土器の小片がわずかに出土したのみである。

**SD03** 幅40cm、深さ10cm、長さ約2.5mの溝である。中から須恵器・瓦が出土した。

SD04 幅1.2 m、深さ10cmで長さ約5 mである。中から須恵器・土師器・瓦が出土した。調査区土層断面の観察から前述したSD01の下層に相当するものとも考えられる。

SX05 地山を削り込んだ東西6 m、南北3 mの段状遺構である。西隅に幅60cm、長さ2 mの溝状の落ちがある。須恵器、土師器が出土している。

#### 遺物

今回の調査では古墳時代中期～後期、平安時代後期の遺物が28 l コンテナで約80箱出土した。古墳時代の遺物では須恵器、土師器の他、袋状鉄斧が1点出土した。平安時代の遺物には須恵器、土師器、青磁、白磁、緑釉・灰釉陶器、瓦、鋸などの鉄製品、石帯と考えられる石製品がある。中でも通常の集落址出土遺物とやや性格が異なると思える陶硯、石帯、青磁容器蓋の存在は特異である。瓦は大半が平瓦で、丸瓦は僅かに出土したのみである。双方とも明らかに軒瓦になるものは現時点では確認されていない。ただし瓦当にあたる部分にヘラ描きにより蓮弁を表現した瓦が1点出土しており、板状の粘土を折り曲げ、顎部裏面に粘土の補強を行い瓦様に仕上げてあり、側面はヘラ状の工具による面取りが施されている。瓦が出土遺物中で占める割合は高く、遺跡の性格を考える上では興味深い。



fig. 284 第1遺構面 SX01 遺物出土状況



fig. 285 SP506 遺物出土状況

### 3. まとめ

今回の調査で、多量の遺物が大半は谷状の地形に堆積したという形ではあるが出土したことは意義のあることと考えられる。復元できた建物の規模に卓越した要素はないものの出土遺物における量、内容などから付近に有力階級層の邸宅、あるいは官衙の施設が存在したのではないかと想定が可能であるとする。寺院の可能性については日用雑器の数が多い点が気になるが、可能性としては施設の一部と捉えられなくもない。おそらく遺跡の中心は今回の調査区の北側の台地上に展開したものと考えられる。

第3遺構面で検出したSB05の柱穴には瓦が投棄されており、当初から瓦葺きの建物が存在したことを示すものと思われる。また第2遺構面の建物に関しても、わずかに認められた黄色粘土の貼り土状の堆積層から、整地を行い、前面に石垣を設けて建物を構築した状況が推定されよう。調査区内が洪水層の堆積、あるいは後世の畑地耕作により改変されたことで不明確な部分が多いが30cm角の平石も数個確認されたことからやや飛躍的ではあるが礎石建物の存在も想定されうるといえる。

神戸市西区では最近平安時代後期の遺跡の検出例が増えており、周辺の白水遺跡、上池遺跡、新方遺跡、吉田南遺跡などの明石川、伊川流域の同時期の遺跡の拡がり、当時の環境を解明する上で重要であると思われる。なかでも寒鳳遺跡、上池遺跡、新方遺跡、吉田南遺跡などがほぼ一直線上において存在することは興味深い内容といえる。

## 45. 新方遺跡 西方地区 第1次調査

### 1. はじめに

新方遺跡は、明石川下流域左岸の沖積地上に立地する遺跡である。山陽新幹線の建設に伴って第1回目の発掘調査が実施され、弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が出土した。その後現在まで、国庫補助金による範囲確認調査や、民間の小規模開発、道路拡幅・区画整理等に伴う調査が続けられ、弥生時代から鎌倉時代の大規模な複合遺跡であることが明らかとなっている。とりわけ大日地点第1次調査では、古墳時代後期の玉作り工房が確認されている。

今回の調査は上池土地区画整理事業に伴うもので、平成5年12月16日・24両日に実施した試掘調査によって埋蔵文化財の存在が確認された。試掘結果を受け、区画整理事業での街路が計画されている部分のうち、埋設管の工事によって遺構面が影響を受ける路線に関し、発掘調査を実施する運びとなった。調査の範囲は逆「コ」字形をしており、南側の東西方向の調査区を1トレンチ、南北方向の調査区を2トレンチ、北側の東西方向の調査区を3トレンチと呼称した。調査の方法は重機で遺構面上まで掘削した後、人力で細部の精査を行った。

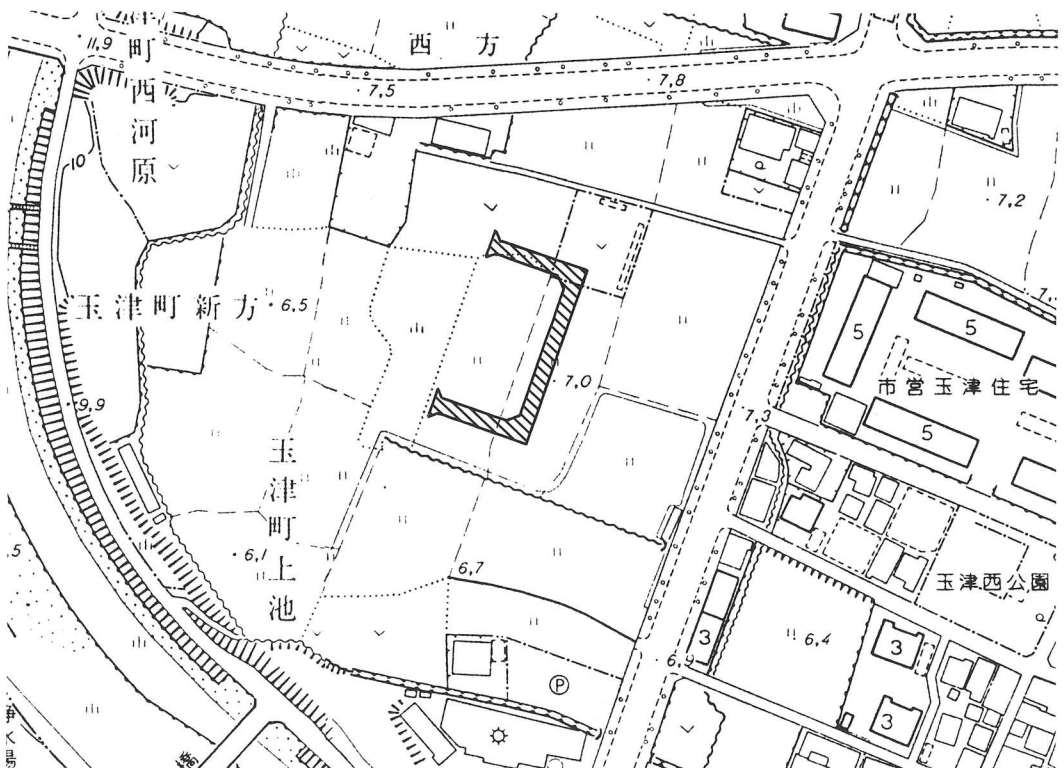


fig. 286  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要 層序

現耕作土・床土より下は中世頃の旧耕作土である淡灰褐色砂混じりシルト・淡灰黄色砂混じりシルト・淡黄褐色シルトを確認し、さらには下は遺物包含層である灰白色粘土・淡灰色粘土と続き、茶褐色粘土の地山となるが、地山上には部分的に淡褐灰色粘土が分布していた。第1遺構面は淡灰褐色砂混じりシルトの上面で江戸時代頃、第2遺構面は灰白色粘土の上面で鎌倉時代頃、第3遺構面は地山あるいは淡褐灰色粘土の上面で平安時代頃であるが、第1遺構面の遺構は第2遺構面上で検出した。



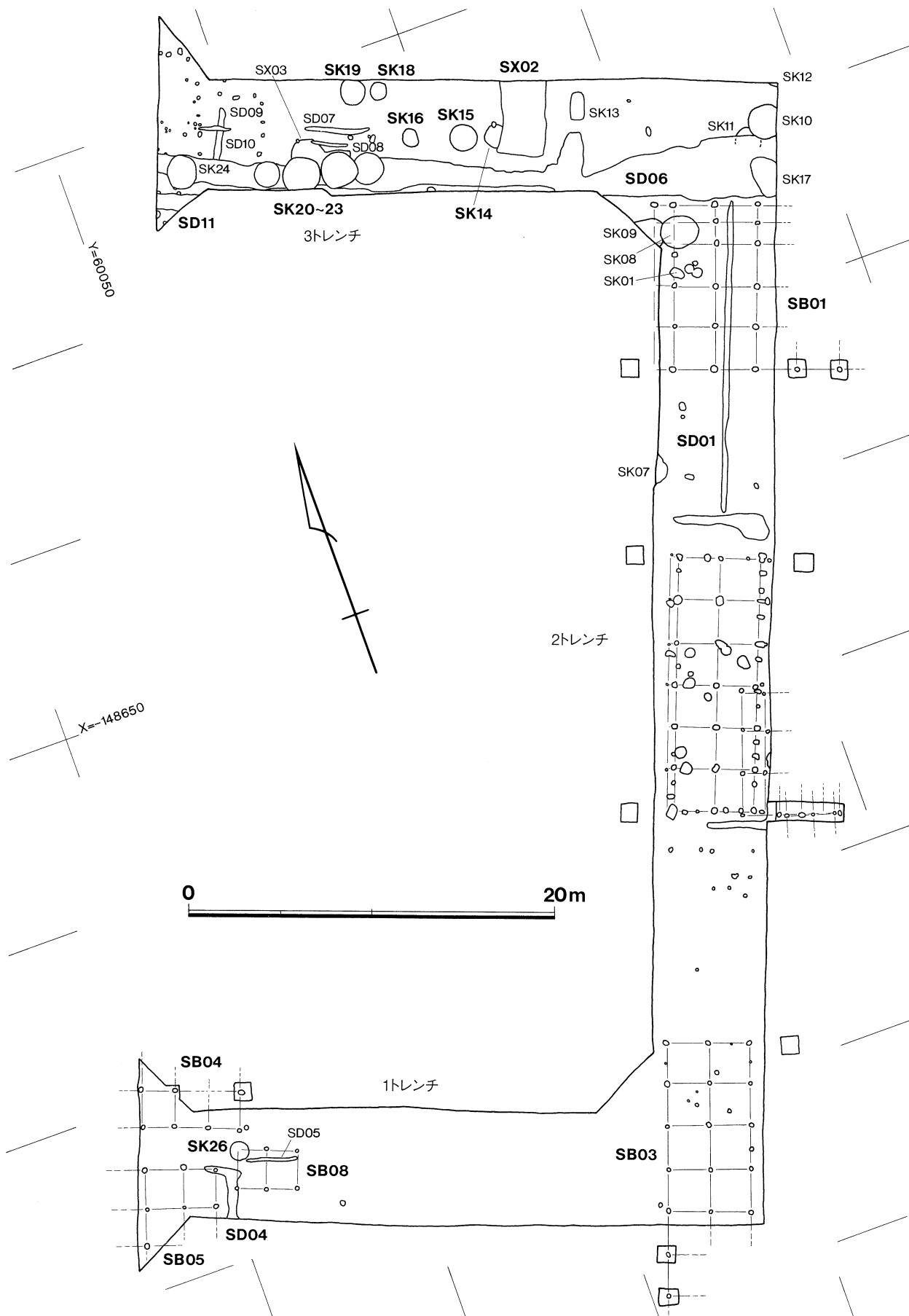


fig. 287 第1遺構面・第2遺構面平面図

第1遺構面

2トレンチ北端と、3トレンチでのみ遺構を検出した。内訳は溝が5条、土坑が17基、性格不明の遺構が2基である。切り合っている遺構もいくつかあるが、出土遺物からは明確な時期差は認めがたい。ここでは主なものについて触れ、他の遺構の概要は文末の一覧表を参照されたい。

- SD06 3トレンチを貫く状態で検出した溝である。検出面での幅0.8～3.2 m、深さ0.4 m、長さは34.0 m以上で、調査区を越えてさらに東西へ続いている。中央やや東寄りの位置で、北側に2.2 m張り出す部分がある。埋土は部分によって若干変化するが、主として上から淡褐灰色砂・褐色粘土の混成土、褐灰色砂質土、灰色粘土と続く。混成土は溝を埋め立てた時の土の可能性がある。遺物は主に江戸時代頃の陶磁器片・備前焼・瓦片の他、鎌倉時代頃の土師器片・須恵器片が出土した。また弥生土器片も何点か含まれていた。
- SD11 SD06の南側で平行する状態で検出した溝であるが、2トレンチ北端の部分では壁面でのみ確認した。検出面での幅0.8～0.9 m、深さ0.4 m、長さは34.0 m以上で、調査区を越えてさらに東西へ続いている。埋土は上から淡褐灰色砂混じりシルト、灰色礫混じり砂、淡灰色粘土と続く。淡灰色粘土の上面には薄く炭が分布していた。遺物は江戸時代頃の瓦片の他、鎌倉時代頃の土師器片・須恵器片・青磁片が出土した。
- SK14 3トレンチの中央で検出した円形の土坑で、東半はSX02で壊されている。直径1.1 m、深さ0.4 mである。ほとんど腐食していたが、埋土の観察から桶を据えていたことが見出せる。遺物は土師器片が出土した。
- SK15 SK14の西隣で検出した円形の土坑で、直径1.5 m、深さ0.2 mである。断面の形状は浅い逆台形で、底は平坦である。埋土は粘土・シルトの粒子が混在したもので、埋め立てられた可能性がある。遺物は江戸時代頃の瓦片の他、土師器片・弥生土器片が出土した。
- SK16 SK15の西側、SD06の北側で検出した円形の土坑で、直径0.9 m、深さ0.2 mである。断面の形状は浅い「V」字形で、埋土は上が茶褐色粘土、下が褐色砂混じり粘土である。遺物は須恵器片・弥生土器片が出土した。
- SK18 3トレンチの北辺で検出した円形の土坑で、直径0.9 m、深さ0.1 mである。断面の形状は浅い皿状で、埋土は灰褐色砂混じり粘土である。遺物は須恵器片が出土した。
- SK19 SK18の西隣で検出した円形の土坑で、直径1.4 m、深さ0.6 mである。断面の形状は斜面がかなり急な逆台形で、埋土は上から灰褐色砂、灰色粗砂、灰黄色粘土と続く。遺物は主に江戸時代頃の磁器片・瓦片の他、土師器片・須恵器片が出土した。

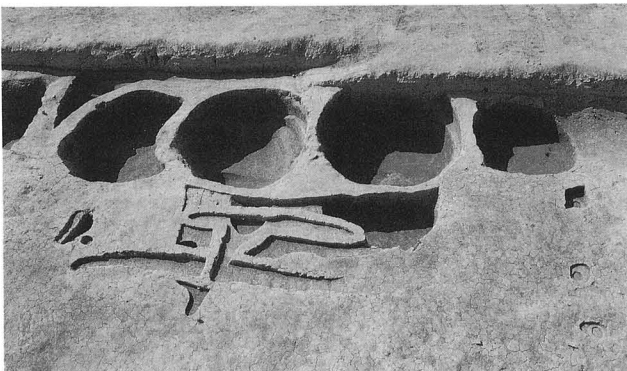


fig. 288 SK20～23

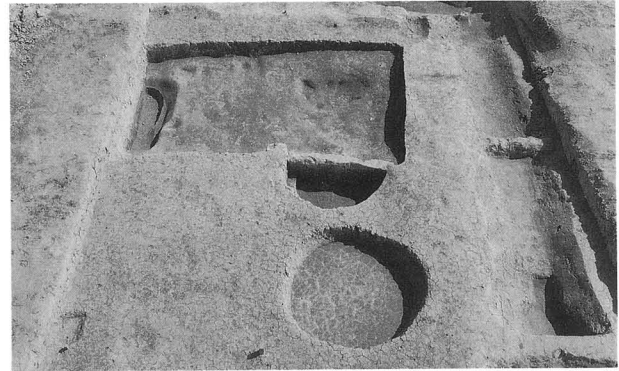


fig. 289 SK14・15, SX02

SK20～23 SD06 が埋まった後で、4基並んで掘られた円形の土坑である。直径1.5～2.1 m、深さ0.6～0.8 mである。断面の形状はいずれも逆台形で、埋土は概ね4基とも上から灰色砂、淡灰褐色砂、灰色砂質土、灰色粘土と続く。遺物は主に江戸時代頃の陶磁器片・備前焼・瓦片のほか、鎌倉時代頃の土師器片・須恵器片・青磁片が出土した。また弥生土器片も何点か含まれていた。SK20とSK21が切り合っており、SK20の方が古いことが判るが、他の土坑の前後関係は不明である。しかし、位置関係と近似した規模から、連続して掘削される必要性があったと思われる。

SX02 3トレンチの中央で検出した大きな方形の遺構である。検出面での幅2.4～2.5 m、長さ4.1 m以上で、調査区を越えてさらに北へ続いている。断面の形状は皿状で、深さは0.4 mであるが、北端はさらに一段深くっており、深さは0.7 mになる。埋土は上が黄褐色粘土・暗茶色粘土・褐灰黄色粘土の混成土、下が灰色シルトである。混成土は遺構を埋め立てた時の土の可能性がある。遺物は主に江戸時代頃の磁器片・備前焼・瓦片の他、土師器片が出土した。

第2遺構面 掘立柱建物を、1トレンチの西端で3棟、1トレンチと2トレンチの交差部で1棟、2トレンチで4棟検出し、トレンチの各所から合計溝を5条、土坑を9基、性格不明の遺構を1基、ピットを約50基検出した。掘立柱建物の柱筋の方向は、調査地点周辺の条里地割りの方向と概ね一致している。ここは主な遺構に関して触れ、他の遺構の概要は一覧表を参照されたい。



fig. 290 第2遺構面2トレンチ



fig. 291 第2遺構面3トレンチ

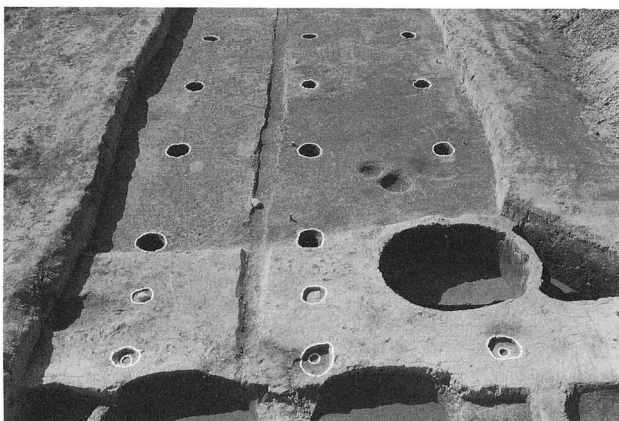


fig. 292 SB01



fig. 293 SB03

- SB01 2トレンチの北端で検出した掘立柱建物である。東西方向は5間以上、南北方向は5間分を確認した。柱間の規模は2.3mを基本とするが、北側2間分と、西側1間はその半分となっており、この部分は縁束であると思われる。したがって建物本体は桁行4間以上×梁間3間の、東西棟の建物になると思われる。柱の深さは、縁束は浅くて20~30cm、建物本体は縁束より幾分深くて40~50cmである。柱穴のほとんどに礎板が敷かれており、中には柱根の残っているものもあった。柱根や柱痕跡から、柱の直径は13cm前後と推定される。
- SB02 2トレンチ中央で検出した掘立柱建物である。建物本体は桁行6間×梁間2間の南北棟で、西側には小規模な縁と思われる杭列が付属する。建物の南北には雨落ち溝と思われるSD02・03を伴っており、廂の出の長さは北側が2.1m、南側が0.7mと推定できる。柱間の規模は2.3mを基本とするが、建物本体の外側となる柱列には柱間を3等分する位置に、主柱穴とほぼ同じ深さか、幾分浅い間柱を持つ部分が多い。縁の杭列と西側の柱列との間隔は30~40cmである。柱の深さは40~60cmで、柱穴の中には礎板や柱根の残っているものもあった。柱根や柱痕跡から、柱の直径は10~15cmと推定される。中央の柱列の北から3番目の柱穴は、掘る位置を間違えて柱掘形を掘り直している。
- SB03 桁行6間以上×梁間2間の南北棟の掘立柱建物である。柱間の規模は2.3mを基本とするが、建物本体の外側となる柱列には柱間を2等分する位置に、主柱穴より規模の小さい間柱を持つ部分がある。柱の深さは、主柱穴で約40cm、間柱で約20cmである。柱穴の中には柱根の残っているものもあった。柱根や柱痕跡から、柱の直径は12cm前後と推定される。



fig. 294 SB02・06

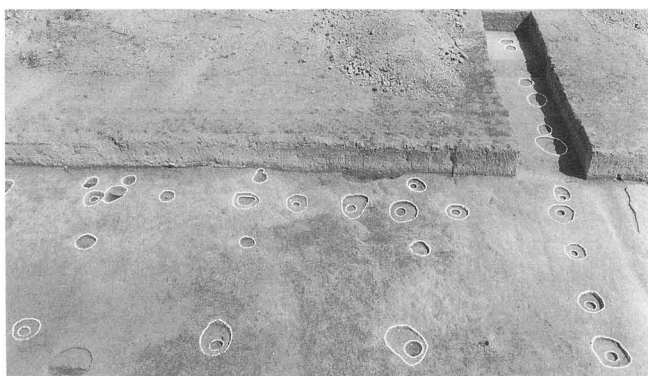


fig. 295 SB06・07

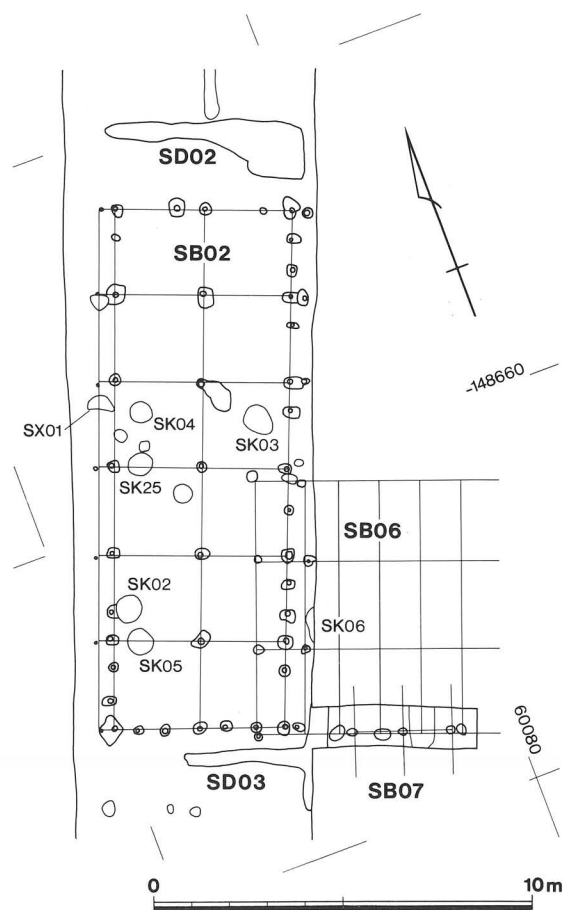


fig. 296 2トレンチ中央遺構平面図

- SB04 1 トレンチの西端で検出した掘立柱建物である。柱間の数は、東西方向は3間分、南北方向は1間分を確認したが、調査区を越えてさらに北西へ続いており、建物の棟通り方向は不明である。柱間の規模は1.7～2.0 mと不揃いである。柱の深さは約50～60cmである。柱痕跡から柱の直径は12cm前後と推定される。
- SB05 SB04の南側で検出した掘立柱建物である。柱間の数は、東西方向・南北方向ともに2間分を確認したが、調査区を越えてさらに南西へ続いており、建物の棟通り方向は不明である。柱間の規模は1.7～2.1 mと不揃いである。柱の深さは約30～40cmである。柱痕跡から柱の直径は12cm前後と推定される。
- SB06 SB02と一部重なる位置で検出した掘立柱建物で、桁行5間以上×梁間3間の東西棟である。柱間の規模は桁行が1.3 m、梁間が2.3 mである。柱の深さは約30～40cmである。柱痕跡から柱の直径は約10cm前後と推定される。SB02との前後関係は、柱掘形に切り合いが確認できなかったため不明である。
- SB07 SB06南端に重なる位置で検出した掘立柱建物である。柱間を2間分確認したのみで、建物の規模や棟通り方向は不明である。SB06との前後関係も、柱掘形に切り合いが確認できなかったため不明である。
- SB08 SB05の東側で検出した小規模な掘立柱建物で、桁行2間以上×梁間1間の東西棟である。北西角の柱穴はSK26で壊されている。柱間の規模は桁行が1.6～1.7 m、梁間が2.0～2.2 mと不揃いである。柱の深さは約30～40cmである。柱痕跡から柱の直径は約10 cmと推定される。
- SD01 2 トレンチの北半で検出した溝で、幅は20～40cm、深さ10cm、長さは17.1 mである。埋土は淡灰色シルトで、北端では炭化物の小片が大量に含まれていた。遺物は土師器片が出土したが、炭化物が含まれる部分では特に集中して出土した。
- SD02 SB02の北面廂の雨落ち溝である。東西で幅が異なり、東は1.5 m、西は0.4～0.5 mで、深さは40cm、長さは5.3 mである。埋土は淡灰色シルトで、東半では炭化物の小片が含まれていた。遺物は土師器片・須恵器片・弥生土器片が出土した。
- SD03 SB02の南面廂の雨落ち溝である。東端でSB02の東に屈曲し、東面の雨落ち溝となっていく。幅30～50cm、深さ10cm、長さは4.9 mまで確認したが、調査区を越えてさらに北へ続いていく。埋土は淡灰色シルトで、遺物は土師器片・須恵器片が出土した。
- SD04 1 トレンチの西端で検出した「L」字形に屈曲する溝で、掘立柱建物SB05・SB08が廃絶した後で掘られている。幅は40～80cm、深さ10cm、長さは3.9 mまで確認したが、調査区を越えてさらに南へ続いていく。埋土は淡灰色粘土で、遺物は土師器片・須恵器片が出土した。
- SK26 1 トレンチの西端で検出した円形の土坑である。直径1.1 m、深さ0.7 mである。断面の形状は逆台形で、埋土は上から淡灰色シルト・灰白色シルトの混成土、淡灰色シルト、灰色粘土、淡茶褐色粘土、灰色粘土と続く。遺物は土師器片・須恵器片・瓦器片・白磁片が出土した。

### 第3 遺構面

2 トレンチから溝を3条、杭列を1条検出したほか、1・2 トレンチから耕作溝群と、トレンチの各所からピットを約30基検出した。

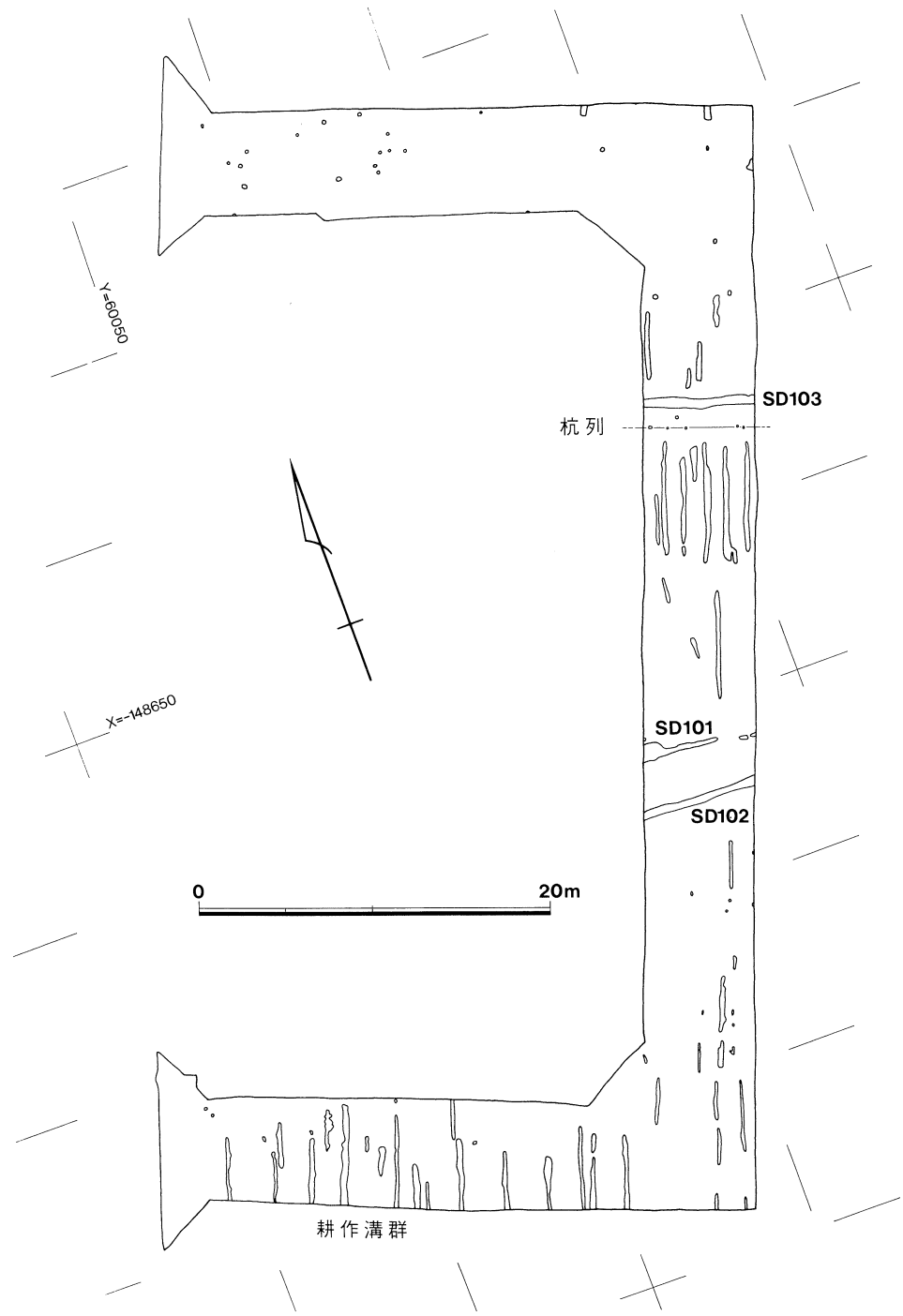


fig. 297  
第3遺構面平面図

- SD101 2トレンチの中央で検出した溝で、ほぼ東西方向を向いている。幅、深さともに一定しておらず、検出した東半の部分では二度途切れる。最大幅は0.9 m、最大深さは0.2 mである。埋土は淡灰色シルトで、遺物は須恵器片・弥生土器片が出土した。
- SD102 SD101の南側で検出した溝で、これもほぼ東西方向を向いている。幅0.4～0.5 m、深さ0.4 mである。埋土は上が暗灰色シルト、下が淡灰色シルトで、土師器片が出土した。
- SD103 2トレンチの北寄りで検出した溝である。幅40～60cm、深さ10cmである。埋土は淡灰色シルトで、遺物は出土しなかった。耕作溝群が、本溝と後述する杭列の南北両側に分布し、特に南側の溝の端の位置が揃っているため、当時の耕作地を区画する溝であったと推定される。



杭 列 SD103 の南側で平行する状態で検出した。杭の間隔は 0.4 ～ 2.9 m と不揃いである。SD103 と同様、当時の耕作地を区画する溝であったと推定されるが、SD103 と同時期のものかどうかは不明である。

耕作溝群 1・2 トレンチの各所から検出したが、3 トレンチではその可能性のあるものが、トレンチの端で約 0.8 m 検出されたのみである。当時、耕作地の利用に違いがあった可能性がある。各溝の方向は、調査地点周辺の条里地割りの方向と概ね一致している。

遺 構 一 覧 表

遺 構	帰属遺構面	形 状	規 模	出 土 遺 物
SD05	第 2 遺構面	ほぼ直線	長さ 3.1 m ・ 深さ 0.1 m	なし
SD07	第 1 遺構面	ほぼ直線	長さ 3.6 m ・ 深さ 0.1 m	土師
SD08	第 1 遺構面	ほぼ直線	長さ 1.9 m ・ 深さ 0.1 m	土師
SD09	第 1 遺構面	ほぼ直線	長さ 1.8 m ・ 深さ 0.1 m	なし
SD10	第 2 遺構面	直線	長さ 4.5 m ・ 深さ 0.1 m	土師
SK01	第 2 遺構面	平面楕円形	長軸 0.9 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵
SK02	第 2 遺構面	平面楕円形・断面皿状	長軸 0.8 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵
SK03	第 2 遺構面	平面卵形・断面碗状	差し渡し 0.9 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵・弥生
SK04	第 2 遺構面	平面円形・断面碗状	直径 0.6 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵
SK05	第 2 遺構面	平面楕円形・断面浅い V 字	長軸 0.7 m ・ 深さ 0.2 m	土師・弥生
SK06	第 2 遺構面	平面不整形	差し渡し 0.9 m ・ 深さ 0.1 m	土師
SK07	第 2 遺構面	平面円形	直径 2.1 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵・青磁
SK08	第 1 遺構面	平面楕円形・断面逆台形	長軸 2.1 m ・ 深さ 0.8 m	陶磁器・土師・瓦片
SK09	第 1 遺構面	平面楕円形・断面逆台形	長軸 2 m ・ 深さ 0.7 m	染付・陶器・土師
SK10	第 1 遺構面	平面円形・断面逆台形	直径 1.8 m ・ 深さ 0.6 m	染付・土師・須恵
SK11	第 1 遺構面	平面円形・断面碗状	直径 1.4 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵
SK12	第 1 遺構面	平面円形	差し渡し 0.5 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵
SK13	第 1 遺構面	平面隅丸方形・断面五角形	直辺 1.4 m ・ 深さ 0.2 m	土師・須恵
SK17	第 1 遺構面	平面卵形・断面逆台形	差し渡し 2.4 m ・ 深さ 0.4 m	陶器・丹波・土師
SK24	第 1 遺構面	平面楕円形・断面逆台形	直径 1.9 m ・ 深さ 0.7 m	陶磁器・瓦片他
SK25	第 2 遺構面	平面円形・断面逆台形	直径 0.6 m ・ 深さ 0.2 m	土師
SX01	第 2 遺構面	平面不整形	差し渡し 0.7 m ・ 深さ 0.1 m	土師・須恵
SX03	第 1 遺構面	平面楕円形	差し渡し 2.0 m ・ 深さ 0.4 m	磁器・瓦片・土師他

3. まとめ 今回の調査地点は新方遺跡の南端付近に位置している。また西方約 200 m の位置には明石川が流れており、調査開始前にはあまり遺跡の遺存状況が良くないと思われていた。しかし今回の発掘調査で掘立柱建物を 8 棟検出し、遺跡の南端にも集落が存在していたことが明らかとなった。遺跡範囲もさらに広がる可能性も考えられよう。

江戸時代頃の遺構は検出した範囲に限られている。当時の生活を直接証明する遺構は確認できなかったが、瓦片が大量に出土しており、近くに建物が存在したと推定できる。

鎌倉時代頃の遺構では、掘立柱建物の柱筋の方向が調査地点周辺の条里方向と一致している。下層の平安時代頃の耕作溝群の方向も条里方向と一致していることから、これらの掘立柱建物は、周辺一帯に条里地割りが施行された後に建てられたと考えられる。当時の明石川の流路は明確ではないものの、西方至近地に川が流れているような場所にまで集落を営むようになっていたのであろう。

平安時代頃は、調査地点一帯は耕作地であったと考えられる。出土遺物の量も極めて少量で、近くでは人々は居住していなかったことを示唆している。また SD101・102 は条里の方向と一致していないため、条里施行以前の遺構であると思われる。

## 46. 新方遺跡 西方地区 第2次調査

1. はじめに 今回の調査は区画整理事業に伴うもので、工事により文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を実施した。

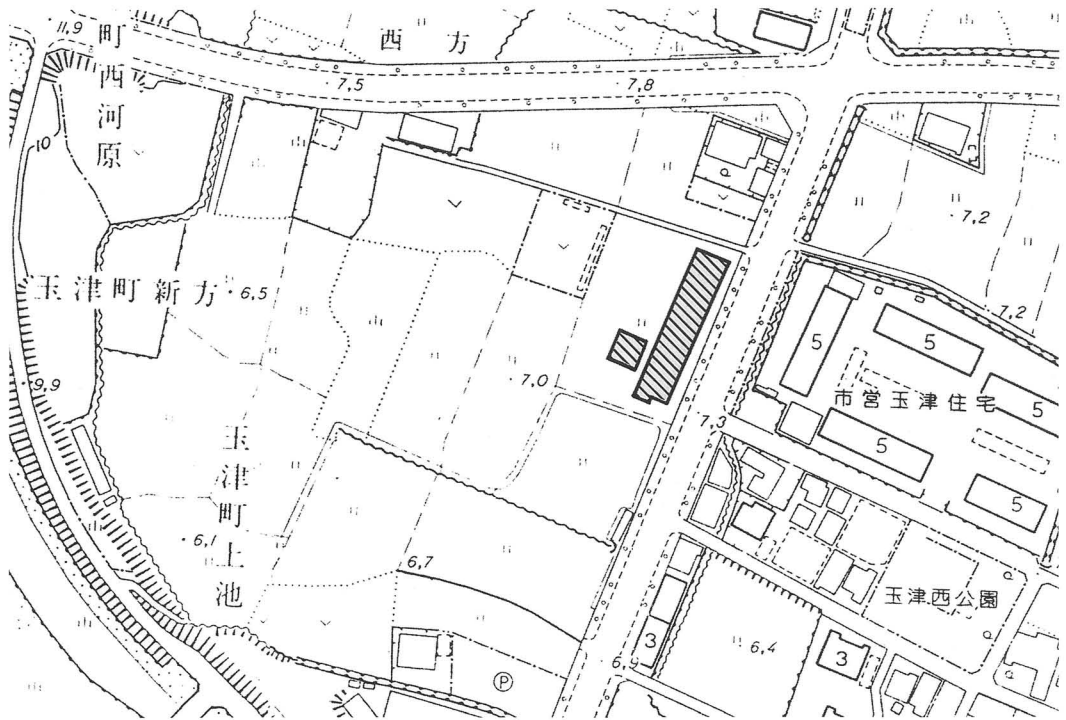


fig. 298  
調査地位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 調査地は、明石川の左岸の氾濫原に位置し、標高は約6mである。  
調査地の基本土層は、1 耕土、2 床土、3 黄灰色砂質土（旧耕土）、4 黄灰色砂質土（旧耕土）、5 暗灰色砂質シルト（旧耕土）、6 灰茶色シルトである。  
このうち5層の旧耕土層に遺物が含まれており、6層上面で遺構を検出した。  
調査は、耕土、旧耕土を重機で除去した後、人力で掘削を行い、遺構検出に努めた。  
発掘調査の結果、掘立柱建物1棟、溝4条を検出した。
- 掘立柱建物 南北6間×東西2間以上の掘立柱建物である。柱穴の規模は直径30~50cm、深さ30~50cm程度で、柱間の距離は約2.1mである。



fig. 299 I区掘立柱建物・ピット

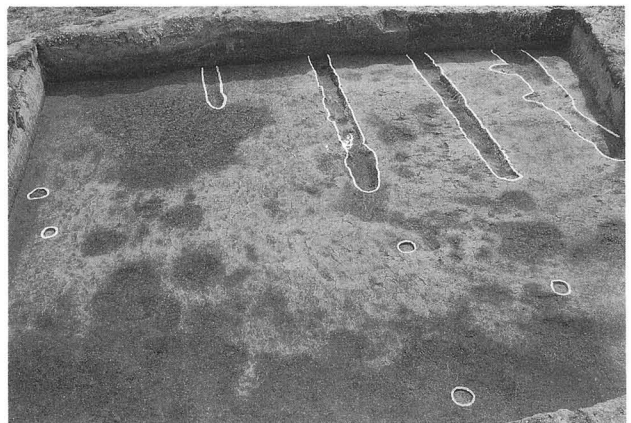


fig. 300 II区全景

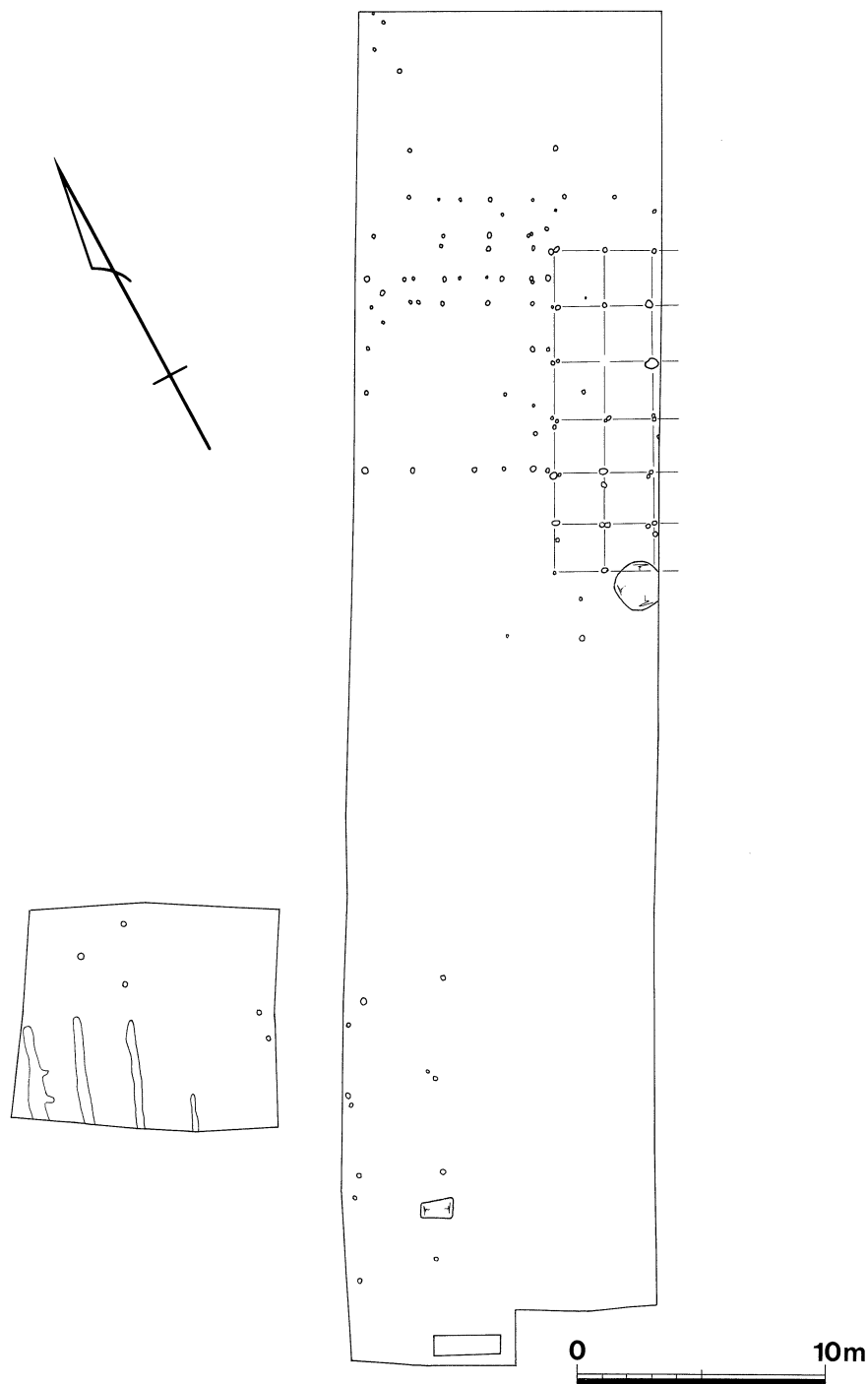


fig. 301 遺構平面図

**ピット** 建物としてまとまらないピットが約90基ある。いずれも直径約20~40cm、深さ10~50cm程度で、底に柱を据えるための根石や、礎板が遺存しているものもある。

**溝** 幅約30~60cm、深さ10cm程度の溝である。

**出土遺物** 遺物は、ピットの埋土から須恵器、土師器の小破片が出土している。なお、ピットの底から、柱を据えるために転用した平瓦片が出土している。

**3. まとめ** 今回の調査では、遺物が少量でほとんどが小破片であるが、掘立柱建物の時期は中世であると考えられる。前回の調査でも、掘立柱建物が検出されており、ここには中世の集落が存在していたものと思われる。

## おおつか 47. 大塚遺跡 第1次調査

1. はじめに 白水地区特定土地区画整理事業に伴い、事業地区内の埋蔵文化財の有無を調べるため、平成7年4月に試掘調査を行った。調査の結果古墳1基と遺物包含層の存在する丘陵が確認された。事業局側との協議を行い、平成7年10月から調査を開始した。

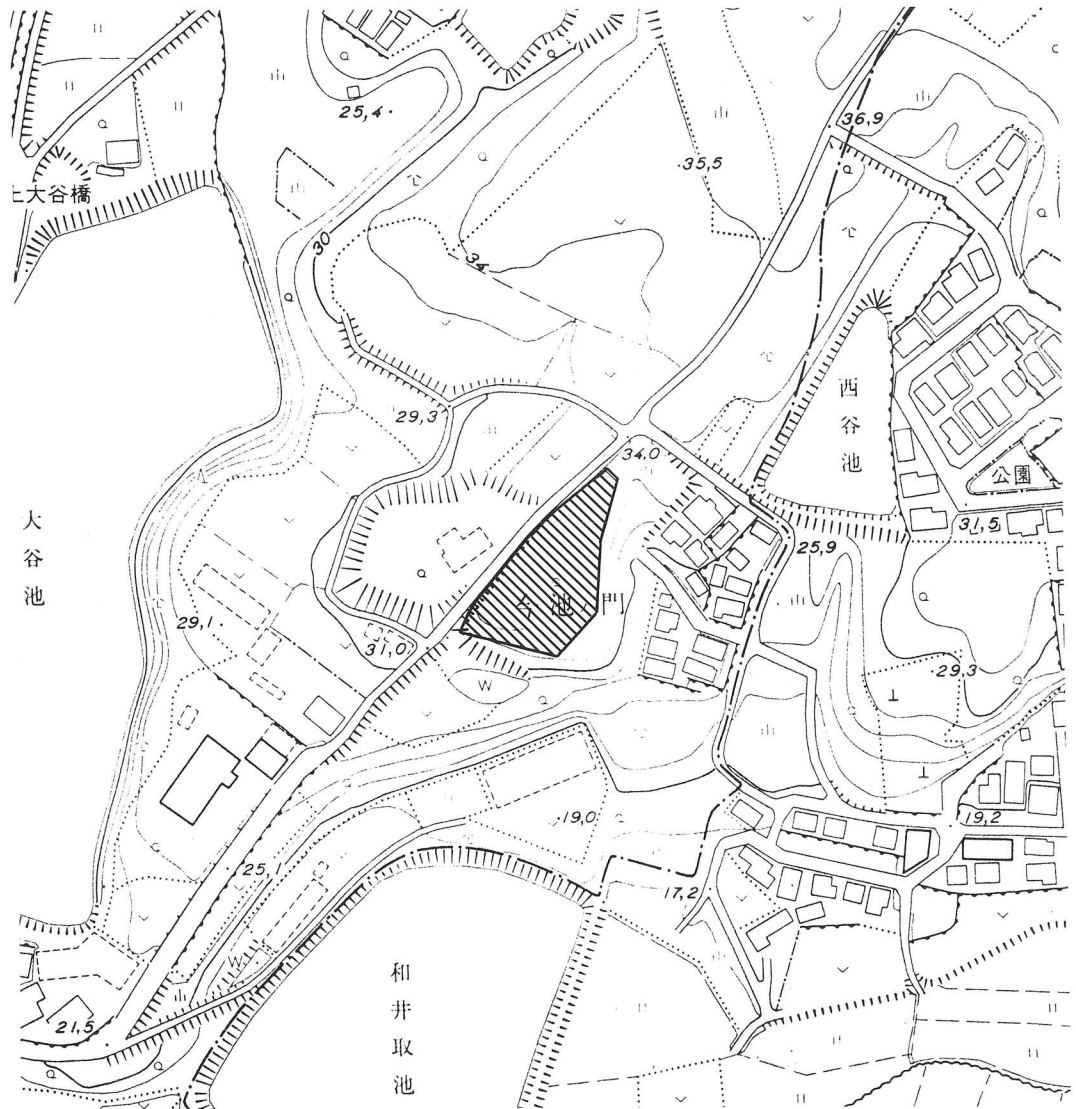


fig. 302  
調査地位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 調査区は、標高30m前後の丘陵で、北西から東南に下がる斜面地である。調査区西端部で約1～2mの段差の崖状地となる。

**基本層序** 層序は、表土層・黄灰色泥砂（間層）・黄色砂泥（西側斜面部のみ）・黄褐色砂泥（地山）となる。基本的には地山面が遺構面となる。G-5～8区の一部は、間層の上面で遺構が検出された。

**古墳時代の遺構・遺物** 間層には近現代と古墳時代の遺物が交じりあう。調査区の東部の斜面には、間層と地山間に流土層が存在する。この流土層からH-5区東端部で、碧玉製管玉が6点出土した。長さ3.1cm・直径1.0cmのものである。またH-5区では砂岩系の砥石、H-4区では人物埴輪の右肩から腕にかけての破片、家形埴輪片が出土している。

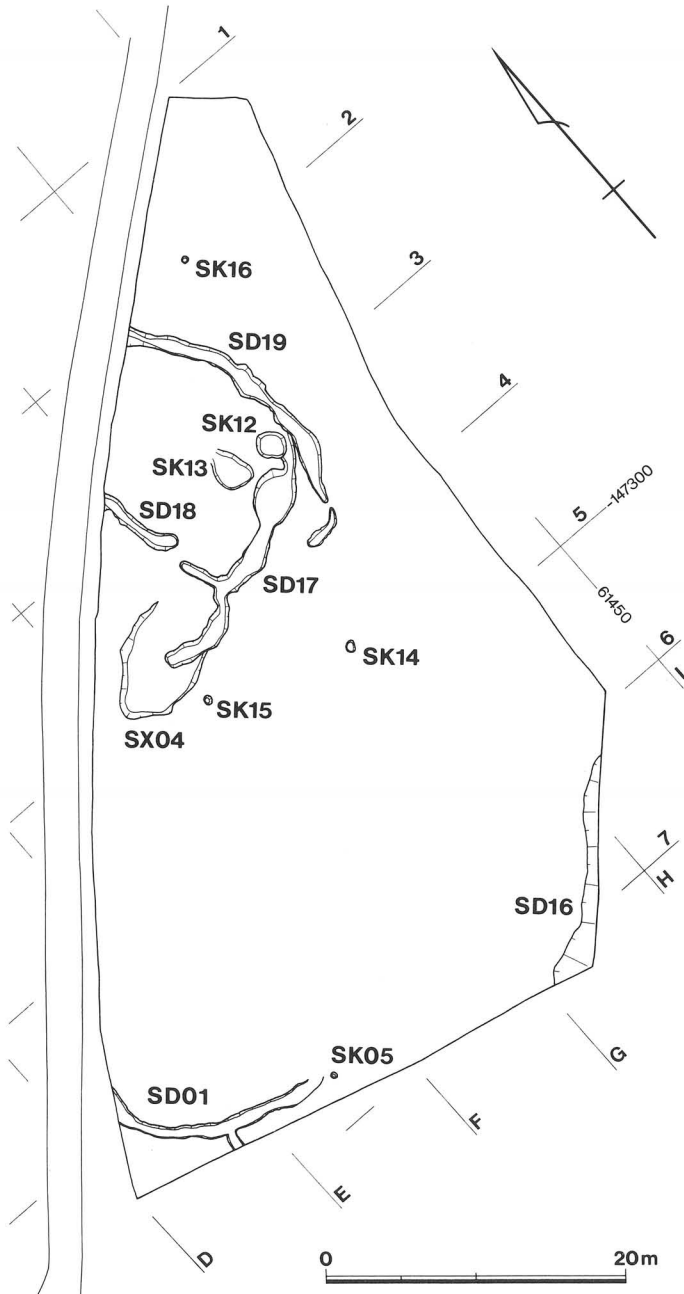


fig. 303 遺構平面図



fig. 304 調査地全景 (北から)

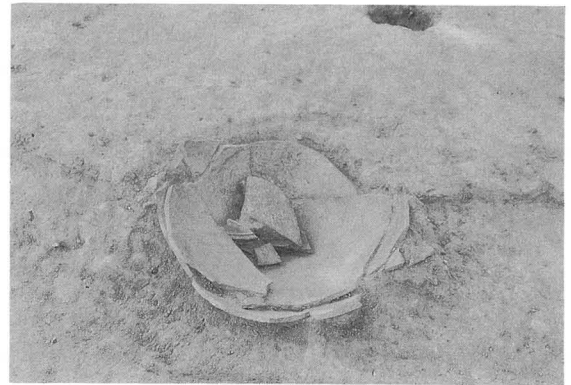


fig. 305 SK05 須恵器甕出土状況



fig. 306 SD16 埴輪出土状況

SD01 D・E-7区で検出された幅1.2m・深さ0.1mの溝状遺構で、ほぼ溝内側で半径約14mの円弧を描く。後世に削平を受けた古墳の周溝である可能性が考えられる。溝より少量の須恵器片が出土した。

SK05 円弧を描くSD01から外側約1mの近接した個所で検出された、須恵器甕が入った土坑である。直径0.5mで、深さ0.2m程度残存していた。甕は正立せず南方向に傾いて検出された。甕は肩部から口縁部は無く胴部の一部と底部が残存していた。残存した胴部の一部は磨耗しており後世の削平時にその一部が表面に露出していたものと考えられる。甕内から同一個体の口縁部片などが少量出土した。掘形内から遺物などは出土しなかった。

SD16 調査区東南隅で検出された溝状遺構である。東部の斜面の途中から検出され、東側の肩は調査区外である。図上復元では幅約3.0m・深さ約1.0mの規模を持つ比較的大きな溝

である。溝状遺構は南北方向にのびると推定され、SD16の東側に存在する高まりが古墳であれば、当調査区と古墳を画するものであろう。

遺構から28ℓ入りコンテナに1箱分の埴輪片が出土した。現在詳細については不明であるが、丸い透かしを持つ円筒埴輪片がその大部分を占めるようである。また土師質のものと須恵質のものがあり、その多くは土師質である。

- SX04 F-4区で検出された南北約6.0m、東西約8.0m、深さ0.2mの落ち込み状遺構である。SX04の掘削過程で、SD17が屈曲しながら東へのびることが判明した。
- SD17 幅1.2m、深さ0.2mの規模で、途中SD18と直角に合流しさらに東へのびるが、溝の形状は崩れSK13の付近では、幅2.8m、深さ0.3mの土坑状の遺構となって、やがて浅くSD19と合流して終わる。SX04・SD17から28ℓ入りコンテナに1箱分の須恵器片と僅かの土師器片が出土した。遺物の大半は、SX04・SD17が深くなる西側の周辺に集中して出土した。須恵器甕が多く壺・坏・高坏などの器種がある。
- SD18 SD17と直角に合流する溝状遺構で、南半部は幅0.8m、深さ0.2mの規模である。北半部は幅0.8mと推定されるが、東側の肩が後世の削平を受けている。SD17との切り合い関係はなく同時期の遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。
- SD19 幅0.8～1.5m、深さ0.05～0.2mの溝状遺構で、緩やかな逆C字形に検出された。東側斜面でSD17を切る。しかし斜面での切り合いであるためSD17の堆積土がSD19の部分を覆うところもあり、仮にSD19がSD17を切る関係とする。須恵器壺・甕・坏片が出土した。
- SK12・13 G-4区で検出された土坑である。SK12は、直径2.0m、深さ0.4mの不整円形、SK13は、長径2.9m、短径2.1m、深さ0.2mの卵形である。SK12から須恵器が1片出土した。SK13からの出土遺物はなかった。
- SK14 G-5区で検出された、長径1.6m、短径1.3m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。須恵器坏身・坏蓋は半分ほどの破片である。坏身が上、坏蓋が下となって重なるように検出された。坏身の底には、朱が付着していた。坏身蓋は、直径・時期が異なり、セットとはならない。本来の位置を保たない遺構であろうか。
- SK15 F-5区で検出された、長径60cm、短径30cm、深さ5cmの卵形の土坑である。須恵器坏片が出土した。
- SK16 H-2区で検出された、直径50cm、深さ5cmの円形の浅い土坑である。出土遺物はなかった。

### 3. まとめ

当調査地の遺跡の時期は、概ね6世紀を相前後する頃と考えられる。古墳時代の遺構は、調査面積に比べ密度は低いといえる。しかしながらSD01とSK05の検出は、後世に削平を受けたとはいえ古墳の存在した可能性を示す。またSD17・18・19の溝状遺構も方形の古墳の平面形を示しているものかもしれない。状況だけからの判断であるが、H-5区の碧玉製管玉の出土は、いつの時期かは不明であるが、古墳が破壊されたことを物語るようである。

SD01とSD17・18・19とに区画された古墳がそれぞれ1基ずつ、当調査区西側の大塚古墳1基、SD16の東側（未調査）に1基と数えれば、計4基からなる古墳群が当調査区



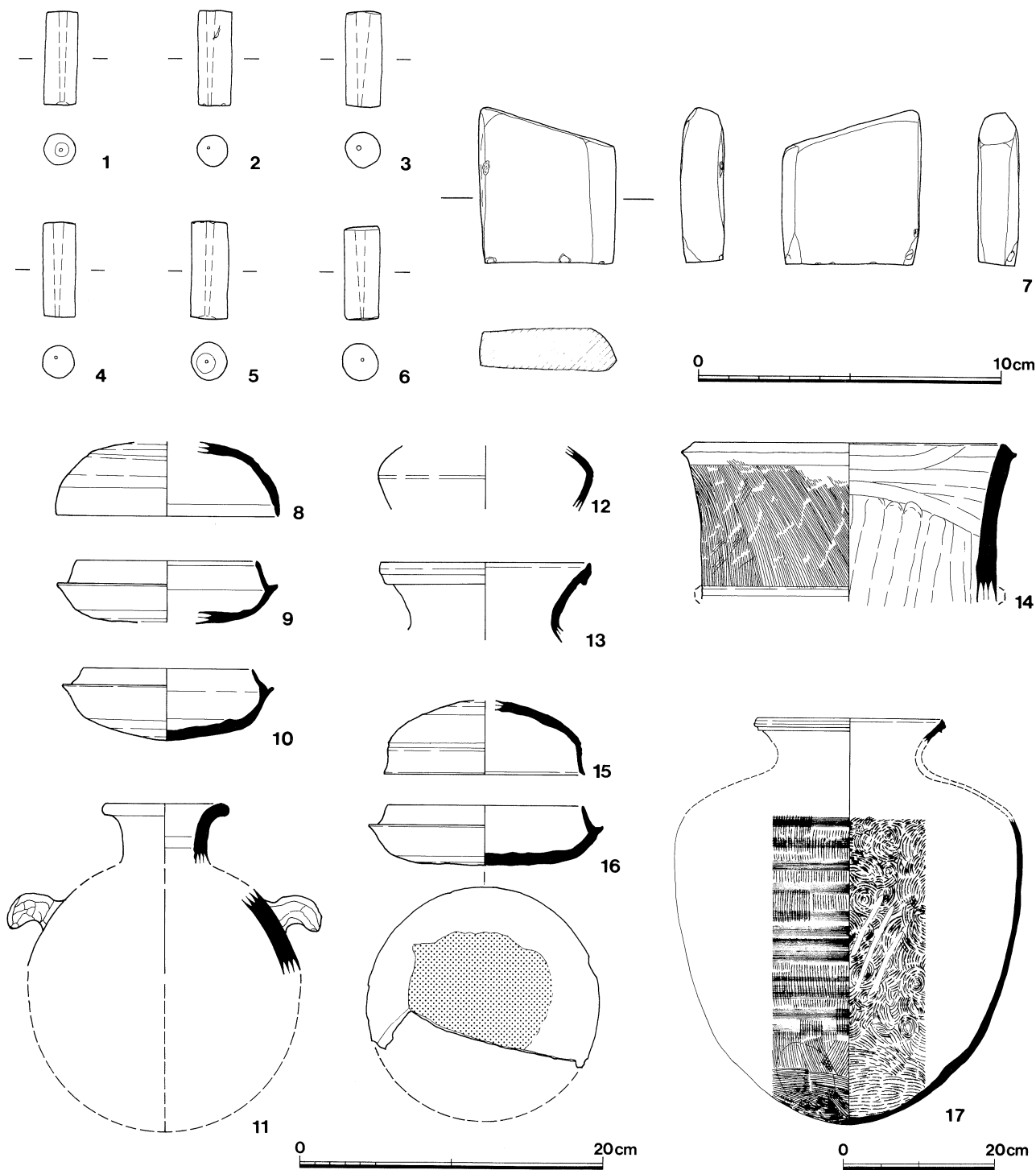


fig. 307 出土遺物実測図

(1~14: 包含層 15・16: SK12 17: SK05 1~6: 碧玉製管玉 7: 砥石 14: 埴輪 他は須恵器)

周辺に存在する、もしくは存在したこととなる。

当調査区東約 200 m の延命寺古墳、さらに瓢塚古墳・天王山古墳群へ約 1 km の範囲に 15 基前後の古墳が連なる。古墳が連なる丘陵からは、伊川・永井谷川が形成した段丘地を見下ろす事ができ、単純化すれば谷奥から順次当地域の権力者が古墳を築造していったと言えよう。詳細な検討は今後委ねるが、以上のことから今回の調査は重要な意義をもつと言えよう。

## 48. 水谷遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

水谷遺跡は、樋谷川と伊川に挟まれた標高約40mの南北に延びる段丘上に位置する。周辺には弥生時代中期の集落遺跡である今津遺跡、弥生時代後期から平安時代末期の複合集落遺跡である高津橋・岡遺跡、平安時代末期の掘立柱建物が見つかった二ツ屋遺跡、弥生時代後期から古墳時代初頭の大集落遺跡である小山遺跡などが知られる。

これまでに水谷遺跡では平成3年度に区画整理に伴う第1次調査が行われ、その後民間の宅地開発に伴う調査が平成5年度と6年度に第2次、第3次調査として行われてきた。今回の調査は水谷中央地区の区画整理事業に伴うもので、遺跡範囲内における計画街路部分についての調査を行った。

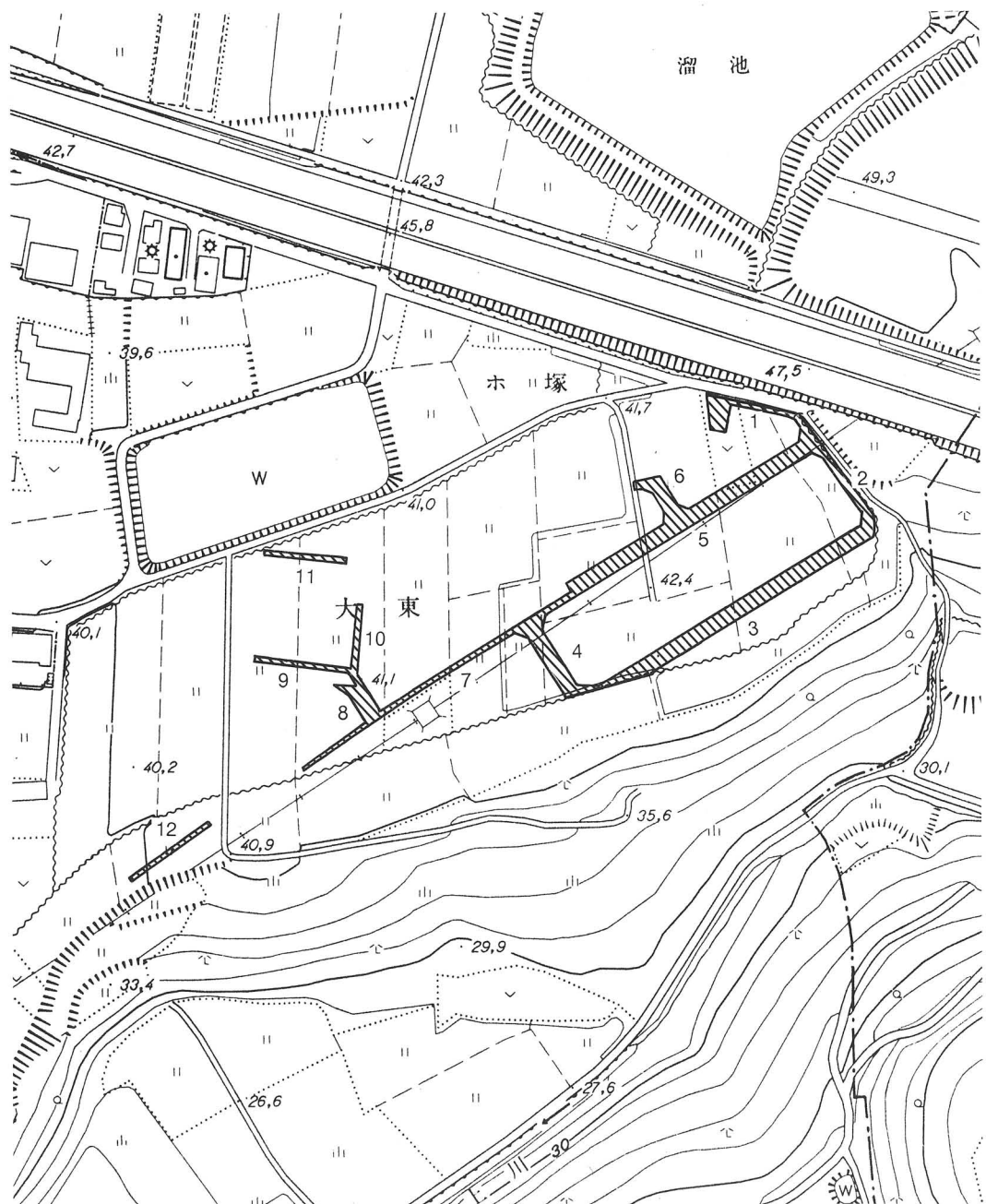


fig. 308  
調査地位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 第1トレンチの西端部で畦状の高まりを検出した。調査予定範囲のトレンチ調査ではその性格を明らかにできないため、一部調査範囲を拡張した。

水田 その結果畦状の高まりは80cm～1.1 mの間隔を空けてほぼ東西方向に平行に並び、小区画を形作ることが判明した。畦畔の幅は広いもので1 m、狭いもので30cmで、高さは3～10cmである。畦畔を覆う埋土は黄灰褐色砂質シルト～極細砂で、水田土層の茶褐色砂質シルトをブロック状に混入している。水田覆土は土層観察から一気に人工的に埋められたと思われる埋土からは6世紀の須恵器が出土し、畦畔上に須恵器の坏蓋、坏身がセットとなって3セット出土した。この須恵器が水田遺構の機能していた時期か、廃絶時期に伴うものなのか、後世に水田を埋める時に周辺から動かされたものなのかは明らかでは無い。

SK06 水田土層には弥生時代の遺物が包含され、黄褐色シルト質極細砂層の遺構面からはSK06を検出した。この土坑は長径43cm、短径34cmの楕円形で弥生土器の壺底が出土した。

この遺構の他には、第1トレンチの東側では旧耕土層を除去すると、黄褐色シルト質極細砂層の遺構面になり、土坑5基を検出した。SK02からのみ弥生土器の小片が出土した。



fig. 309 第1トレンチ水田遺構

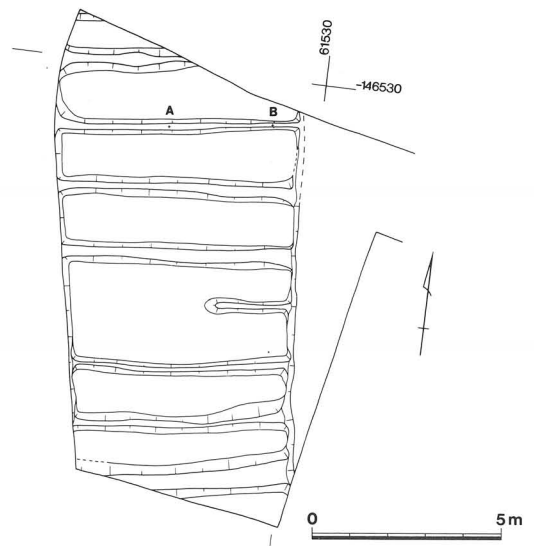


fig. 310 第1トレンチ水田遺構平面図



fig. 311 第1トレンチ水田畦畔遺物出土状況

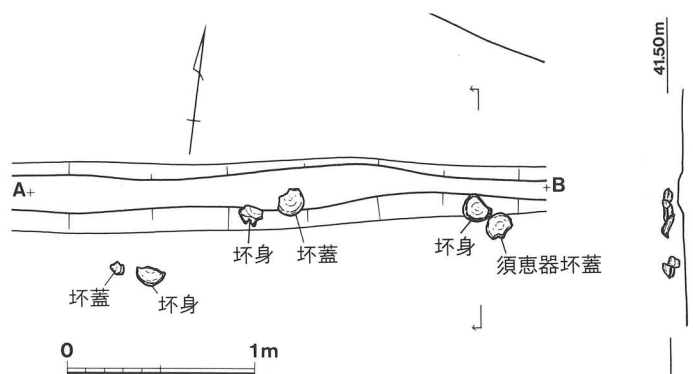


fig. 312 第1トレンチ水田畦畔遺物出土状況平面・断面図

第2トレンチ 第2トレンチは、今回の調査区では最高部の標高約43mに位置する。後世の削平のためか、遺構は存在しなかった。

第3トレンチ 第3トレンチでは土坑11基、溝2条、落ち込み1基を検出した。

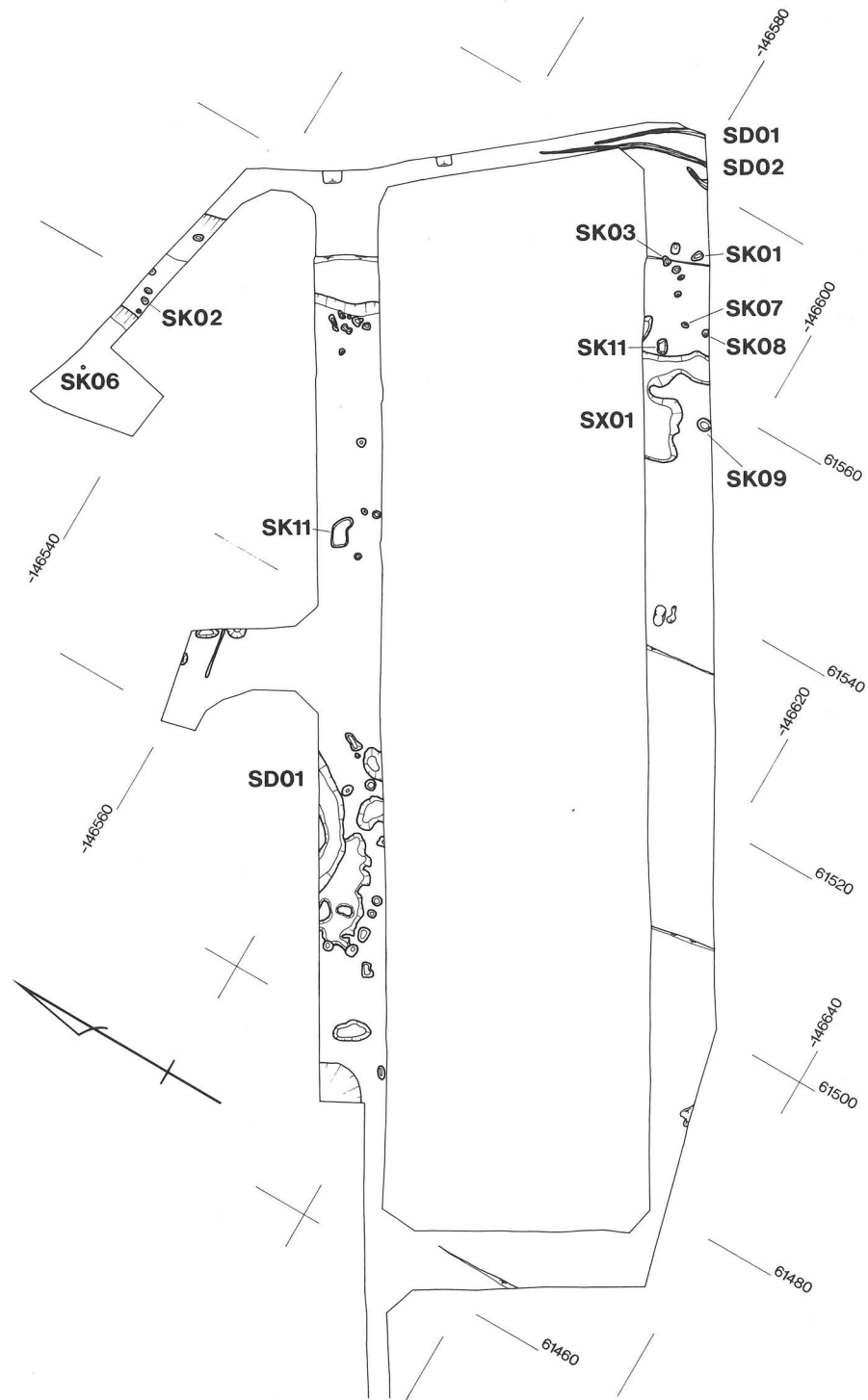


fig. 313  
第1～6トレンチ  
遺構平面図

土坑 SK03は長径1.1m、短径97cmの不定形な土坑で、弥生土器の壺の底部が出土した。その他の土坑ではSK01、07～09、11からも弥生土器の小片を出土している。土坑埋土は第1トレンチで検出した土坑と類似した灰褐色砂質シルトを基本とする。

溝 SD01、02は第2トレンチから第3トレンチに向けて南北方向に流れる、幅60cm、深さ10cmの溝で、弥生土器片が出土している。

SX01 SX01は浅い落ち込みで、弥生土器を出土した。

第4トレンチ 第4トレンチでは須恵器、弥生土器の出土する包含層を検出したが、遺構は存在しなかった。

第5トレンチ 第5トレンチでは、第1トレンチで検出された水田土層が一部に拡がっていたが、小区画を形成する水田畦畔は存在しなかった。

水田土層の除去後、第2遺構面からは土坑27基、溝1条、落ち込み1基を検出した。

SK11 長径3.8 m、短径1.8 m、深さ8 cmの不定形の土坑で、弥生時代後期と考えられる土器を出土した。

SK17 調査区外へ延びるために全体の規模を捉えることは出来ないが、長径3.3 m、短径2.5 m、深さ38 cmの不定形の土坑で、最深部に炭化物、焼土が堆積していた。古墳時代の須恵器が出土している。

SK19 長径1 m、短径80 cm、深さ12 cmの楕円形の土坑で、古墳時代の土師器の壺の口縁が出土している。

SD01 幅2.4 m、深さ33 cmの溝で、円弧を描く溝の一部がトレンチにかかって検出されている。溝からは古墳時代の須恵器甕が出している。

SX01 浅く緩やかに傾斜して行き、SD01の肩部に続く落ち込みである。

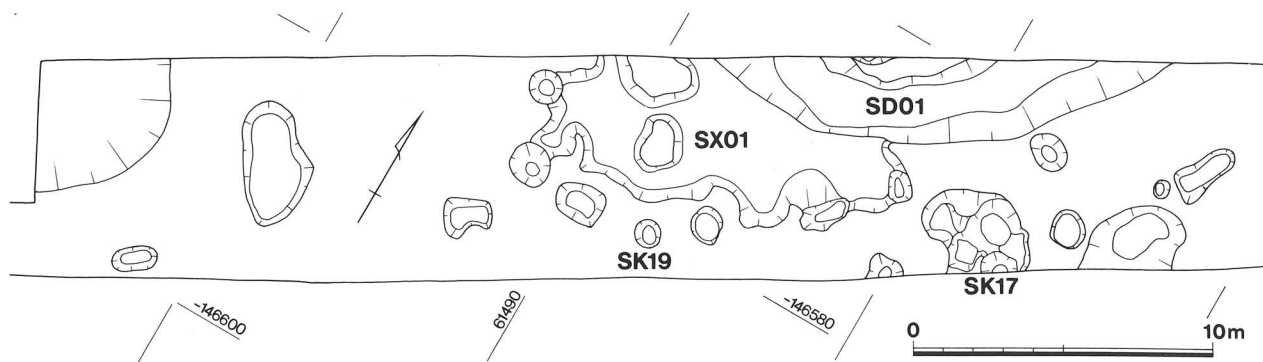


fig. 314 第5トレンチ西半遺構平面図



fig. 315 第5トレンチ全景



fig. 316 第5トレンチ東半 (SK11 周辺)

第6トレンチ 第5トレンチの北側に続く調査区で、北端部で小区画を形成する畦畔を検出した。その水田埋土や畦畔の出土状況は第1トレンチ西端で検出されたそれに類似している。畦畔の規模は幅30cm、高さ5cm前後、畦畔の間隔は50~60cmで東西方向に並ぶ。水田土層を掘削後、土坑3基、溝1条、ピット2基を検出した。土坑から遺物が出土しなかったために時期は不明であるが、埋土の状況は第5トレンチで検出された古墳時代の土坑に類似する。

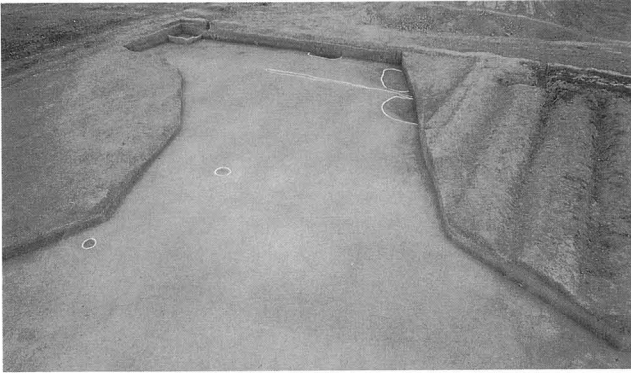


fig. 317 第6トレンチ全景

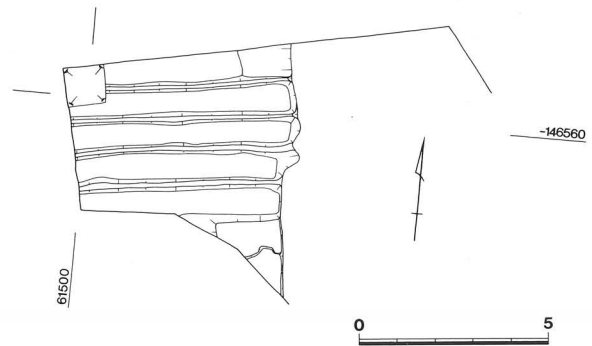


fig. 318 第6トレンチ水田遺構平面図

第7トレンチ 第5トレンチから西に続くトレンチで、第3トレンチの西側から第4トレンチで遺構が存在しなかったことから、幅2mの試掘調査トレンチを先行させて、埋蔵文化財が存在するか確認をした。その結果、第7トレンチでは遺構が存在しないことが判明した。

第8トレンチ 第7トレンチの北側で、幅2mの試掘調査トレンチを設定して調査したところ、弥生土器がまとめて出土したため、調査区を道路幅に拡げて全面調査を実施した。その結果、第1・5・6トレンチで検出された水田土層と同じ土層がトレンチの中央部から北側に広がっていることが確認された。しかし、畦畔は無かった。水田土層掘削後、第2遺構面からはトレンチの北端で土坑を1基検出した。しかし、そのほとんどが調査区外にのびるために全体の規模は不明である。弥生土器片が数点出土している。



fig. 319 第9トレンチ全景



fig. 320 第10トレンチ古墳検出状況



第9トレンチ 第8トレンチの北側に設定した、幅2mの東西方向の試掘トレンチで、調査の結果、円筒埴輪片数十点を含む包含層を確認した。包含層を掘削したところ水田土層が拡がり、トレンチの中央部で、第1・6トレンチで検出したのと同様の東西方向の畦畔を検出した。

第10トレンチ 第9トレンチの北側に設定した、幅2mの南北方向の試掘トレンチで、水田土層の拡がりを確認し、東西方向の畦畔を検出した。水田覆土からは円筒埴輪片数十点が出土した。覆土は第1トレンチと同様、人工的に一気に埋められたことが伺える。

また、トレンチの北端で古墳の墳丘、墳丘裾の周溝を確認することができた。水田土層の覆土は古墳の墳丘まで存在し、水田土層は周溝までで無くなっている。

第11トレンチ 第10トレンチの北側に設定した、幅2mの東西方向の試掘トレンチで、遺物の出土は無く、遺構も確認出来なかった。

第12トレンチ 第7トレンチの西側に設定した、幅2mの東西方向の試掘トレンチで、水谷遺跡の所在する段丘が、南側の谷に向かう傾斜変換点を確認できたが、遺構は存在しなかった。



fig. 321 調査地遠景

### 3. まとめ

今回の水谷遺跡の調査では、水田遺構を検出することができた。この水田は本来調査区のほぼ全域に拡がっていたものと考えるが、後世の開削や水田の作り替えの影響で、検出された範囲は部分的なものでしかなかった。水田土層には弥生土器が包含されており、水田覆土からは古墳時代須恵器が出土している。水田覆土から出土した数点の須恵器の完形品は周辺に古墳の存在を想起させるものであるが、確認はできていない。後世に耕地を拡大するための水田造成を行った際に古墳を破壊し、古墳に伴う須恵器が埋没したのとも考えられなくは無い。

水田土層を掘削すると、第3トレンチ西半と第4トレンチ、第7トレンチ以外の全域で弥生時代、古墳時代の遺構が検出された。住居が発見されてないため、集落と考えるには材料不足であるが、同時期の居住空間の存在を否定できない。今後周辺の調査で住居の発見される可能性は高く、今回の水谷遺跡の調査は、当遺跡および周辺遺跡をも含めた集落変遷の空白期を埋める貴重な発見となった。また、第9・10トレンチの調査で、埋没した古墳が発見されたことは、古墳群の存在の可能性が高まり、同時に当地域での古墳群を形成した集団がクローズアップされよう。なお、調査は平成8年度に継続されるものである。

## 49. <sup>ふたつや</sup>ニツ屋遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

ニツ屋遺跡は明石川の支流である樋谷川の下流域右岸に位置する。

平成3～5年度の区画整理事業に伴う調査で、弥生時代終末～鎌倉時代の遺構・遺物が確認され、特に、平安時代末期の建物群は、地方支配者層の邸宅跡である可能性が高い。

今回の調査地は、平成3～5年度調査地に隣接する西側丘陵斜面に位置し、試掘調査で弥生時代～中世の遺物が確認され、ニツ屋遺跡の範囲が丘陵斜面・上部にまで及ぶことが明らかになった。

調査の成果としては、中世の遺構、弥生時代後期～近世の遺物が確認された。

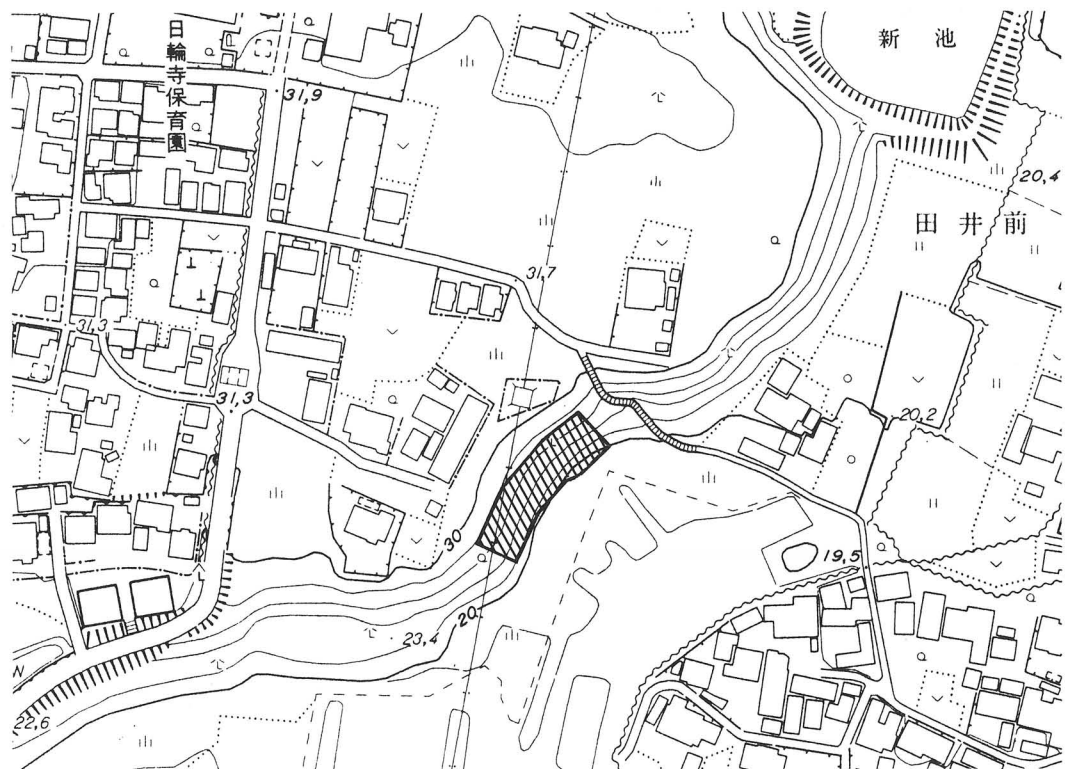


fig. 322  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査は造成予定地内の建物建築部分を対象に行い、6条の溝状遺構が検出された。

#### 基本層序

調査区中央から北端部にかけて、一部で表土と流土との間に近世以降の盛土が存在するが、概ね上層より表土、流土、地山となっている。

流土は複雑な堆積で層数も多いが、大きく上層・中層・下層に区分することができる。上層は中世～近世、中・下層は弥生時代～中世の遺物をそれぞれ包含する。

また、中・下層流土中に弥生時代後期の遺物のみを包含する層が挟み入るかたちで確認されているが、これは、丘陵上部に存在する弥生時代後期の包含層が流出して、斜面に堆積したものと考えられる。

#### SD01・02・04

調査区を南北に横切る溝状遺構で、その形状から水路と考えられる遺構である。調査区内で2か所後世の水道により寸断されるかたちでそれぞれSD01・02・04と区分しているが、これらは一連の遺構と考えられる。遺構の規模は検出箇所により若干の差異があるが、平均して幅約1m、深さ約50cmである。

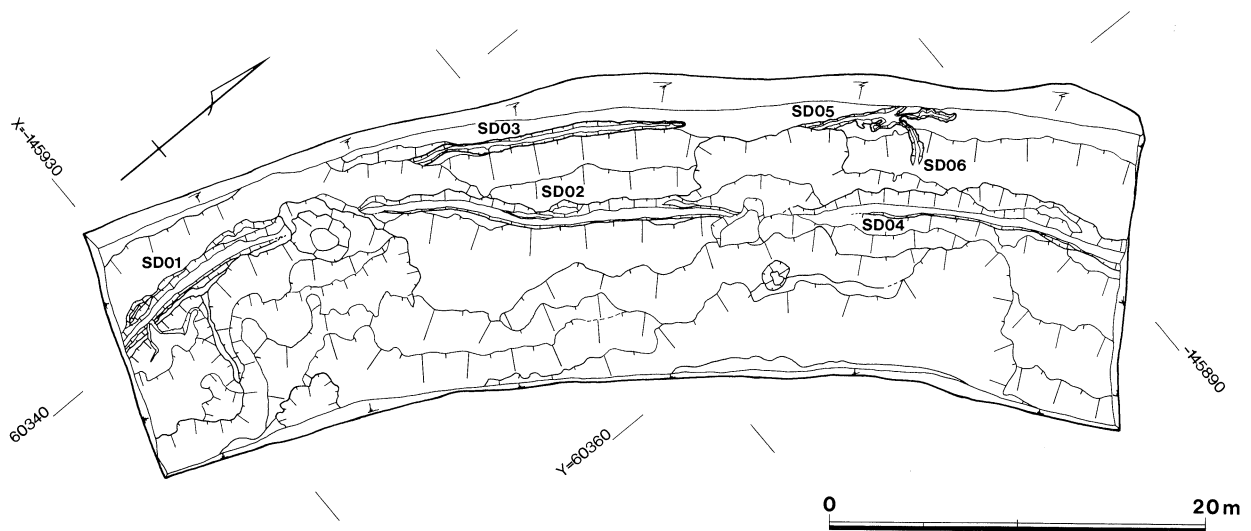


fig. 323 遺構平面図

SD03 調査区中央の斜面上部で検出された幅約60cm、深さ約10cmを測る溝状遺構である。

SD05 調査区北端近くの斜面上部で検出された溝状遺構で、幅約40cm、深さ約10cmの小規模なものである。

SD06 調査区北端近くで検出されたSD05とSD04をつなぐ溝状遺構である。規模は幅約50cm、深さ約20cmを測る。

#### 遺物

大半は流土からの出土で、弥生時代後期～近世のものであるが、その中で多いのが、弥生時代後期と平安時代末期～鎌倉時代初期のもので、特に、平安時代末期～鎌倉時代初期のものの中には、瓦片が多く含まれている。その他、特筆すべき遺物としては甕形の韓式系土器片で、1点のみの出土であるが、古墳時代中期のものと考えられる。

### 3. まとめ

今回の調査では、遺構として6条の溝状遺構が検出されたにとどまったが、中でもSD01・02・04は水路と考えられ、集落の施設である可能性が高い。但し、その時期については不明瞭で、水路の斜面下側肩部が流出してしまっており、流土との切り合い関係も不明確であるので、現時点では中世頃の所産であるとしか言明できない。また、SD03・05・06も同様である。以下、調査の成果について記す。

(1)弥生時代後期の遺物が流土中より多く出土し、丘陵上部に同時期の集落が存在するのはほぼ間違いないものと思われる。

(2)古墳時代中期の韓式系土器片が出土し、これは樫谷川流域では初めてで、その意義は大きい。

(3)平安時代末期～鎌倉時代初期の遺物のうち、瓦片の割合が高く、近接地で瓦葺きの建物が数棟存在した可能性が高い。当時のものとするれば、一般的な民家による集落とは考えにくく、集落の特殊性がうかがえる。

(4)水路状遺構（SD01・02・04）は、中世集落の一端と考えられるもので、当時の生活圏が丘陵斜面地にまで及んでいたことがうかがえる。

さらに、平成3～5年度の区画整理事業に伴う調査で確認された平安時代末期の建物群との有機的関連が今後の検討課題の一つである。

## 50. 日輪寺遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

日輪寺遺跡は神戸市西区玉津町小山に所在する弥生時代と中世の集落遺跡である。明石川と榎谷川に挟まれた標高30m付近の台地の先端部に位置する。今回の調査は震災復興に伴う宅地供給事業のための発掘調査で、工事により影響のある埋設管設置部分と擁壁部分の調査を行った。現在の天台宗日輪寺の東側に隣接し、現在は荒蕪地、畑地である。調査は耕土・表土、盛土を重機により除去、以下人力により遺構確認、掘削調査を行った。

日輪寺遺跡ではこれまでに2度の調査が行われており、弥生時代の土坑、溝、平安時代の建物、中世の遺構が確認されている。特に平成5年度、日輪寺遺跡調査団が行った調査(第1次調査)では円礫を敷いた土坑の中に鉄鋌、鋤先、銅銭を埋納した祭祀土坑が検出されており、平安京にて確認されている類例と合わせて興味深い資料である。



fig. 324  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査地の基本層序は、耕土、盛土以下、濁灰色粘質土(旧耕土)、淡褐色粘質土、黄褐色粘性砂質土の地山層である。淡褐色粘質土に中世、弥生時代の遺物が含まれる。遺構は淡褐色粘質土面および地山面で確認できた。調査区は便宜上道路部分をⅠ区、中央の埋設管部分をⅡ区、南側の擁壁部分をⅢ区とした。

#### Ⅰ 区

Ⅰ区は幅約1m、長さ約40mのトレンチである。溝3条、土坑3基、築地状遺構2基、遺物溜まり(落ち込み)2基が検出された。

SD01 幅約0.8m、深さ約0.3mの溝である。中から近世の巴文軒丸瓦が数点出土した。

SK04 幅2.2m、深さ0.15mを測る。弥生土器片が数点出土した。

SK05 幅3m、深さ0.2mを測る。弥生土器小片が数点出土した。

SK07 径約0.6m、深さ約0.2mを測る。中から弥生土器がわずかに出土した。

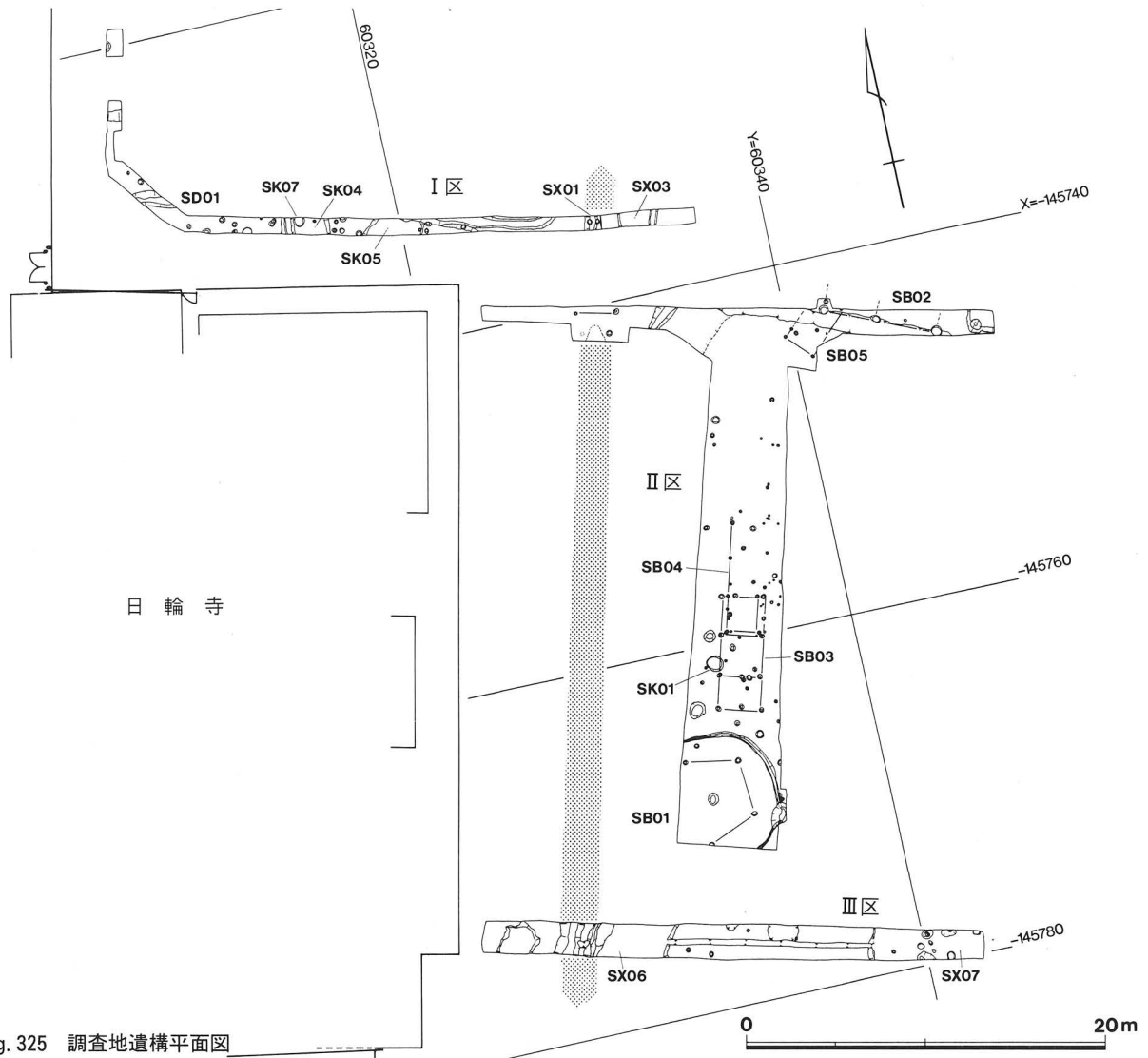


fig. 325 調査地遺構平面図

SX01 下辺幅約 2 m、上辺幅約 1.2 m、高さ 0.2 m を測り、黄褐色粘質土を積み上げる。断面形は台形を呈する。西辺には中段が設けられ、この上面で柱穴が 1 基確認された。柱穴の下部には礫を詰めて根固めを行っている。柱穴内から遺物の出土はなく、時期や築地状遺構に明らかに伴うものかは不明である。

SX03 SX01 の東側にある落ち込みで、幅 1.7 m、深さは約 0.3 m を測る。中から近世陶磁器、瓦、中世の須恵器片、土師器片、瓦が礫に混じって出土している。



fig. 326 SX01・03

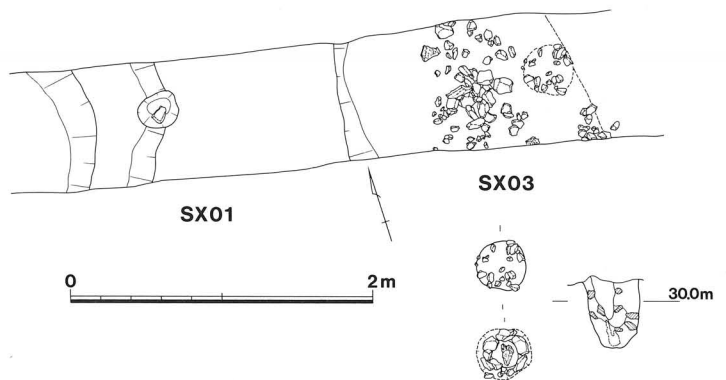


fig. 327 SX01・03 平面図、ピット断面図

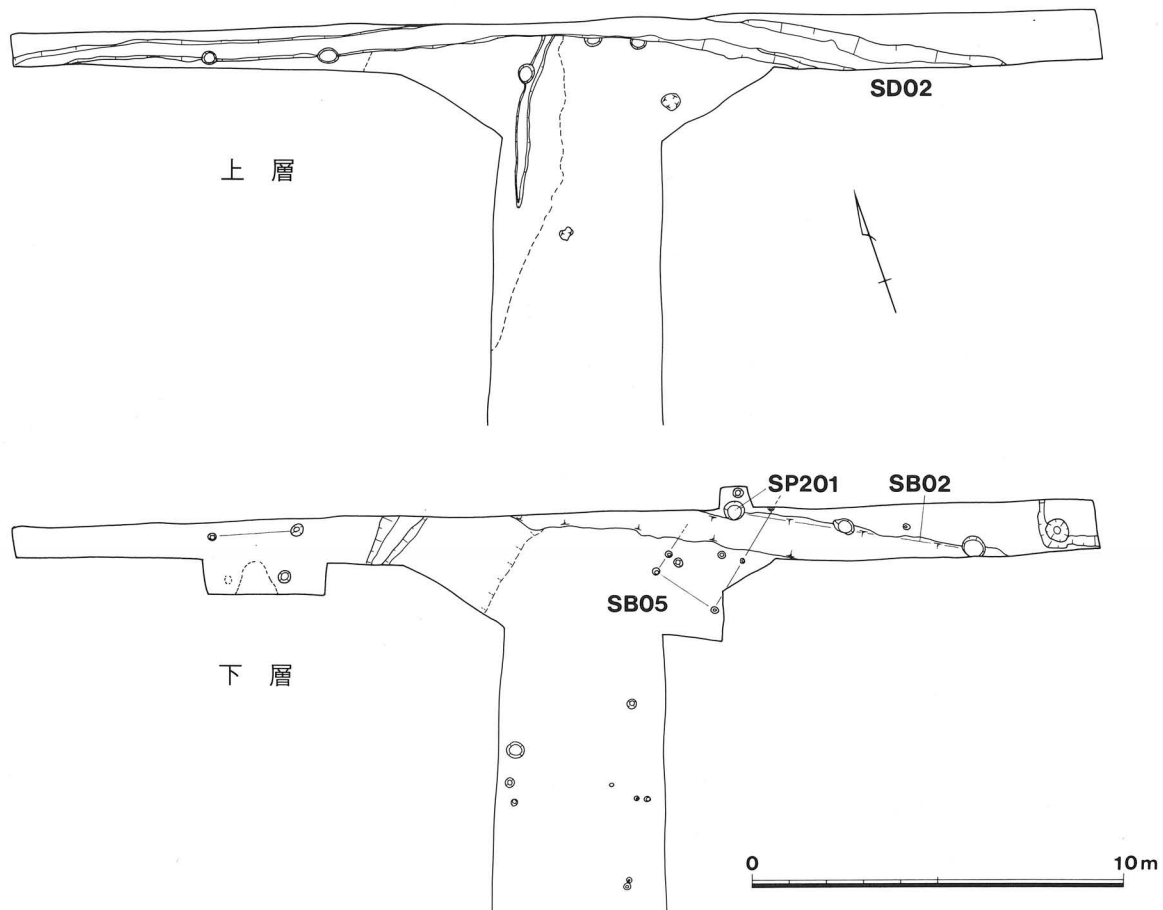


fig. 328 II区北遺構平面図



fig. 329 II区北 (SD02)



fig. 330 II区南

## II 区

II区はT字形の調査区で東西約30m、幅1mのトレンチ部分と幅6m、長さ約30mの南北の調査区からなる。掘立柱建物4棟、竪穴住居1棟、土坑4基、落ち込み1基が検出された。

SD02 調査区北の東西トレンチ部分で検出された。幅1m、深さ0.2mを測る。溝は直線ではなくやや南東にカーブを描く。近世の陶磁器、軒丸瓦が出土した。

SK01 径約1m、深さ約1.7mの土坑である。断面の形状は底より1/3の部分で最大径を測り袋状を呈する。中から須恵器の甕口縁片、土師器の羽釜片が出土している。



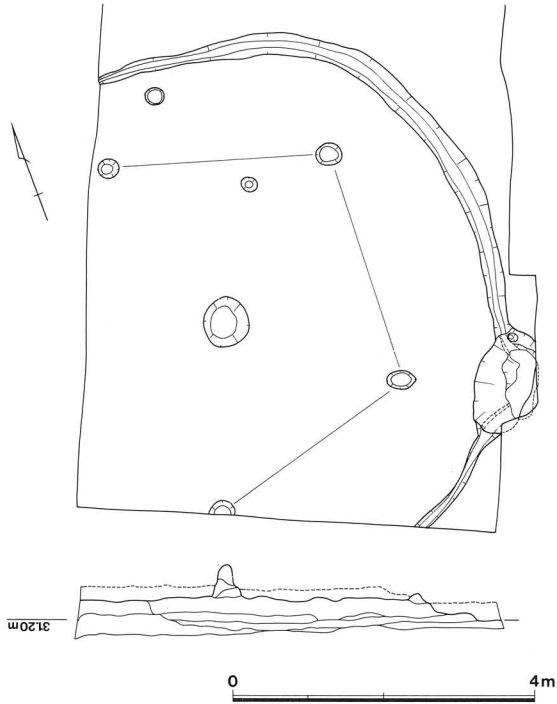


fig. 331 SB01 平面・断面図

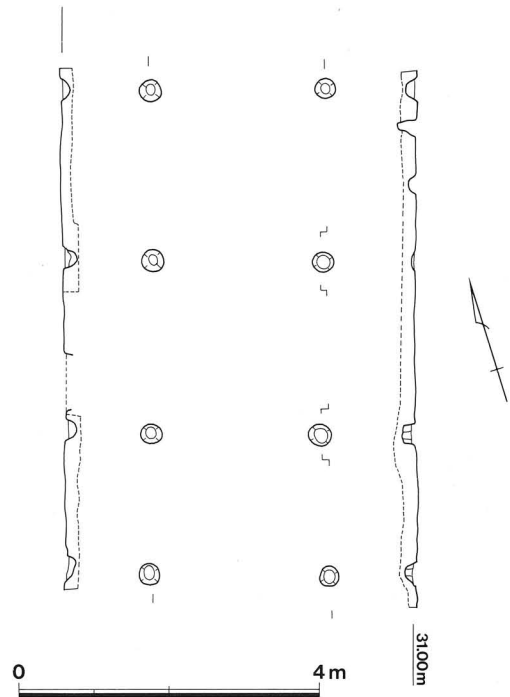


fig. 332 SB03 平面・断面図



fig. 333 SB01



fig. 334 SP201 (SB02) 遺物出土状況

SB01 調査区南端で検出された径約8 mの竪穴住居である。現表土直下で検出されたが、削平、攪乱がひどく住居址内の埋土には二次堆積の様相がみられた。遺物は出土しているものの、正位置を保つものはわずかである。中央に径0.7 m、深さ0.3 mの中央土坑があり、調査区内では柱穴は4本確認されたが、本来は5本柱に復元できるものと把握している。壁体は遺存のよい部分で深さ0.2 mである。周壁溝は幅0.1～0.3 mを測る。時期は弥生時代後期（第V様式）である。また東の壁際に長径1.2 m、短径1 m、深さ0.4 mの土坑がある。この土坑の壁面にも周壁溝が続くことから一連の施設と考えられる。土坑の断面形は袋状を呈する。

SB02 東西方向に2間分、柱穴が3本確認された。いずれも径約0.5 m、深さ0.4 mを測る。西端の柱穴（SP201）には土器が投棄されており、甕を柱穴内に置いたのち、拳大の石を叩きつけて割ったものと思われる。時期は弥生時代後期（第V様式）である。



fig. 335 SB03



fig. 336 SB04

SB03 南北3間×東西1間以上の掘立柱建物である。柱間は2.2mを測る。須恵質の壺の下半が出土しており、室町時代前半と考えられる。

SB04 南北4間×東西1間以上の掘立柱建物であるが、東側の柱列は明確でなく、柵列になる可能性もある。遺物は土師器の小片が確認できただけで、詳細な時期は不明であるが中世と考えられる。

SB05 南北2間以上×東西1間以上の掘立柱建物で、柱穴径は約0.3mである。土師器片が出土している。

Ⅲ 区 幅2m、長さ28mの東西トレンチである。築地状遺構1基、溝1条、落ち込み2基が検出された。

SX05 I区の築地状遺構と同様の施設である。下辺幅1.3m、上辺幅0.4m、高さ0.4mを測る。黄褐色粘質土を積み上げてあり、断面は台形である。盛土からは遺物は出土していない。検出状況では寺側の面は緩やかに、反対の面は比較的急な勾配となっている。

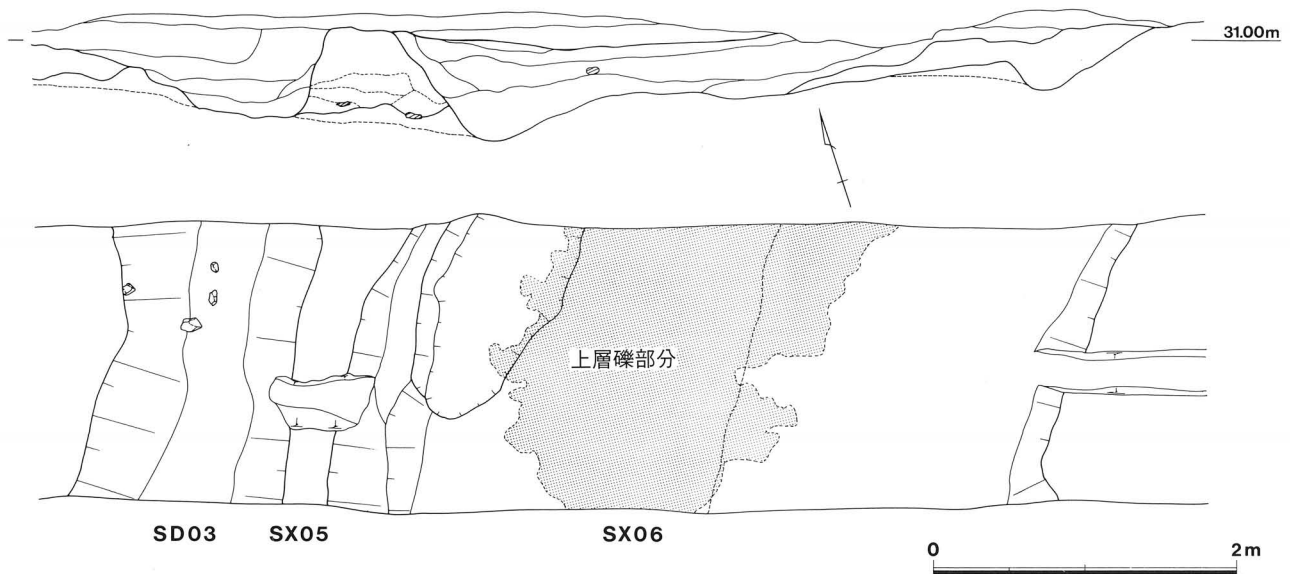


fig. 337 SX05・06, SD03 平面・断面図

fig. 338  
SX05 (築地状遺構) と  
SX06



SX06 SX05の東にある落ち込みで幅4 m、深さ0.5 mを測る。落ち込み中央部に拳大の礫が敷かれており、その中に混じって陶磁器、須恵器、土師器、瓦が出土している。雨落ち溝の可能性もあるが、平面での石の輪郭は長楕円形になるため溝にそって敷かれているかは現在のところ不明である。

SX07 東端で確認された落ち込みである。検出長6 m、深さ0.5 mを測る。中から弥生時代後期の土器が比較的多く出土しているが、二次堆積によるものである。断面の観察よりベッド状遺構を伴う住居址の可能性もあるが、判然としない。

### 3. まとめ

今回の調査では、弥生時代の竪穴住居、掘立柱建物が検出され、台地の上に集落が展開することが確認された。住居址は現表土直下で検出される所もあり、既に削平や地形の改変を受けており、二次堆積などによる良好な遺存状況とはいえないものの、出土遺物量は比較的多く、集落の様相や規模などを考える上では重要である。

また、中世以降の遺構ではI区 SX01、III区 SX05 とした一連の築地状遺構が注目される。この遺構は日輪寺に伴う区画と考えられ、時期は築地状遺構に伴う SX03、06 の両落ち込みの出土遺物から15～16世紀代が下限と考えられる。中世末～近世初頭段階の寺域、あるいは寺内の区画といったものが想定できる。II区の西北端ではこの築地状遺構が確認されておらず、推定ライン上で門の存在を示す柱穴が検出された。現在も寺の通用門が東側にあり、位置的にこの築地状遺構のきれる部分に該当することは、非常に興味深いものである。

日輪寺は戦国期に三好氏による焼打ちをうけたとされており、当該期に一带を土塁や堀で囲み城郭化したことが今までの調査から判っている。このような区画が、寺の中のどの部分をしめるのか今後の調査が期待される。

## 51. 小山遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

小山遺跡の調査は、神戸市西区玉津町小山地区の土地区画整理事業計画に伴うもので、平成5年度から全面発掘調査を実施している。これまでの調査では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居や多くの溝などの遺構が見つかり、この遺跡が明石川左岸の河岸段丘上に営まれた集落遺跡であることが判明し、良好な遺跡の残存状況が明らかとなった。今年度の調査は、そうした調査を継続して行うもので、昨年度と同様に、遺跡の推定範囲内についての事業計画道路部分の全面発掘調査を実施した。

調査は事業計画範囲の南側から順に行い、トレンチ番号は平成5年度から調査が継続して行われていることから、調査着手順にこれまでの調査に続く番号を付した。

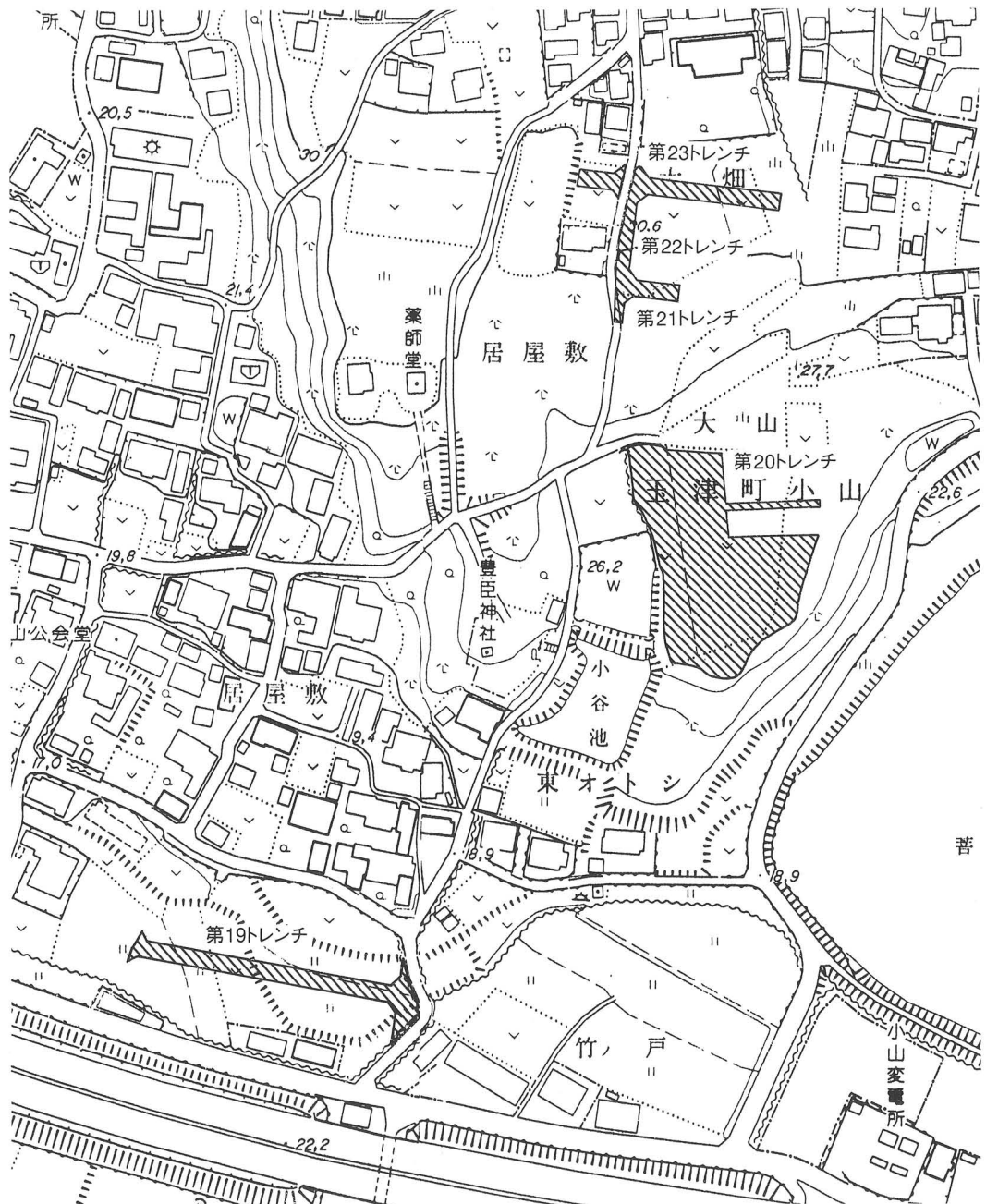


fig. 339  
調査地位置図  
1 : 2,500

2. 調査の概要 第19トレンチは昨年度に調査を行った第18トレンチから東側に続く調査区で、北側の丘陵が南に向かって緩やかに下りた地点に位置する。

遺構の残存状況は良好で、円形竪穴住居1棟、方形竪穴住居4棟、掘立柱建物4棟、土坑17基、溝11条、ピット多数を検出した。遺物包含層は調査区中央より西側で、耕土、床土直下に約20cm前後の厚さで残存していた。

SB01 一辺6.0m、深さ20cmの方形の竪穴住居である。主柱穴は4本柱で、柱穴の掘形は直径40~50cm。周壁溝は幅20~30cm、深さ10~15cmで巡る。北辺部中央には竈を有している。出土遺物は完形の須恵器蓋坏のほか、須恵器高坏、甃、土師器甕が南辺部から出土している。

SB02 一辺6.8m、深さ16cmの方形の竪穴住居で、西側は後世の削平により消滅している。周壁溝は東辺部にのみ残存している。北辺部中央に竈を有する。主柱穴は4本柱で、柱穴の掘形は50~60cmである。出土遺物は竈およびその周辺から土師器、フイゴの羽口?が出土しており、その他に須恵器、土師器の小片が出土している。

SB03 一辺6.3m、深さ10cmの方形の竪穴住居で、南側半分は削平を受けていたが、主柱穴は残存しており、主柱穴は4本柱であることが確認できた。周壁溝は北辺の一部にのみ残存している。北辺部中央に竈を有している。柱穴の掘形は直径30~50cmで、出土遺物は竈から土師器が出土しているほか、須恵器、土師器の小片が出土している。

SB04 直径8.0m、深さ32cmの円形の竪穴住居で、周壁溝は東側にのみ残存している。主柱穴は5本柱で、柱穴の掘形は40~50cmである。床面には幅1.0m、高さ5~15cmのベッド状遺構を有し、住居中央部には直径90cm、深さ32cmの中央土坑SK15が存在する。出土遺物は弥生時代後期の広口壺形土器の口縁部などが出土している。

SB05 一辺5.1m、深さ14cmの方形の竪穴住居で、周壁溝は存在しない。北辺部中央に竈を有する。主柱穴は4本柱で、柱穴の掘形は30~50cmである。出土遺物は竈から須恵器坏蓋、高坏、土師器の壺または甕が出土している。

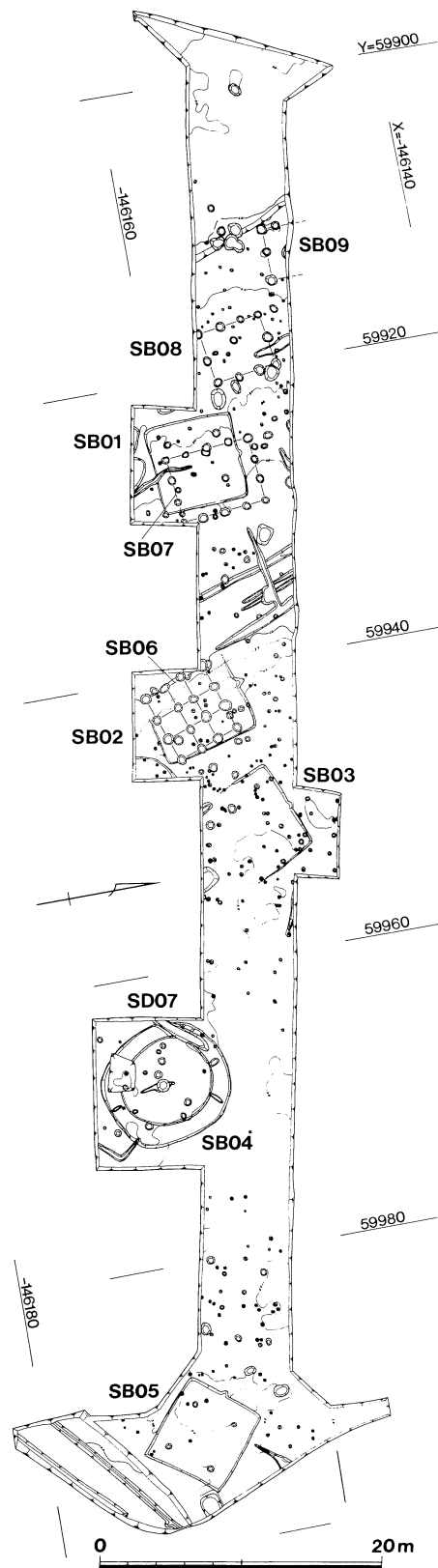


fig. 340 第19トレンチ遺構平面図





fig. 341 第19トレンチ全景

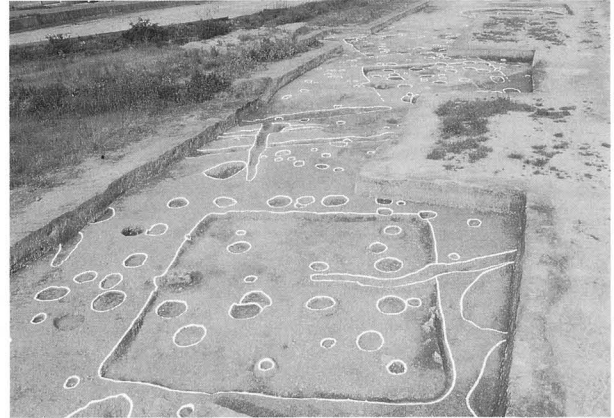


fig. 342 第19トレンチ中央部

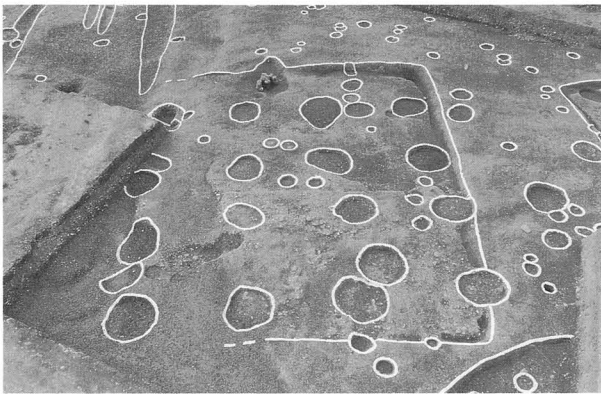


fig. 343 SB02・06

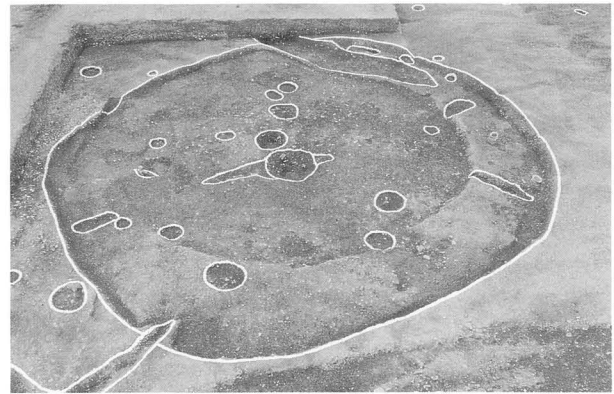


fig. 344 SB04

これら竪穴住居の内、円形の竪穴住居は出土土器から弥生時代後期と考えられ、方形の竪穴住居についてはSB05がやや小型である以外は、ほぼ同一の規模で、北辺部中央に竈を有する点で共通している。出土土器から6世紀後半の時期が考えられる。

SB06 SB02と重なるように検出された桁行3間、梁行3間の掘立柱建物で、SB02と方向を同一にする。柱間は1.5m、柱穴の掘形は直径60~70cmである。SP36、SP40ではピットの底に根巻石状に握り拳大の石が遺存していた。遺物は土師器の小片が出土している。

SB07 SB01と重なるように検出された桁行3間、梁行4間の南北棟の掘立柱建物で、SB01と方向を同一にする。柱間は1.5mで、柱穴の掘形は直径40~60cmである。遺物は土師器の小片が出土している。

SB08 桁行2間(柱間1.8m)、梁行3間(柱間1.6m)の南北棟の掘立柱建物で、柱穴の掘形は直径40~60cmである。遺物は土師器の小片が出土している。

SB09 南北棟と推定される掘立柱建物で、桁行2間分が検出されたが、梁行については調査区外へ続くため不明である。柱穴の掘形は直径60~80cmである。遺物は土師器の小片が出土している。

これら掘立柱建物は、埋土の状況から同一の時期のものであると考えられるが、出土土器が小片であるため、時期の確定はできない。

SD07 SB04に切り込む幅88cm、深さ11cmの溝で、長さ4.6mを検出したが、西側は調査区外へとのびるため、全体の規模は不明である。遺物は須恵器甕、甕のほか、須恵器、土師器の小片が出土している。出土土器から6世紀と考えられる。



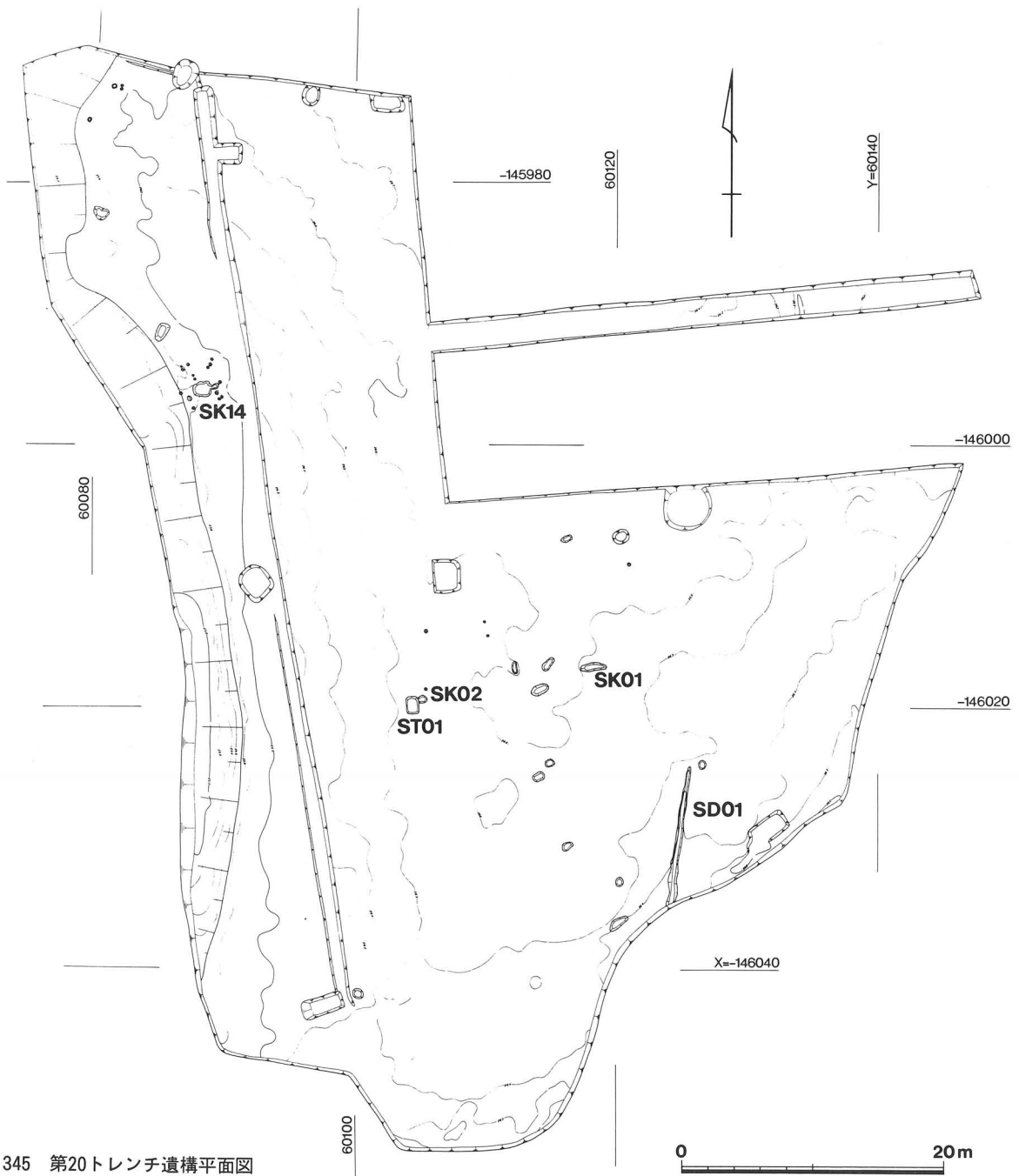


fig. 345 第20トレンチ遺構平面図

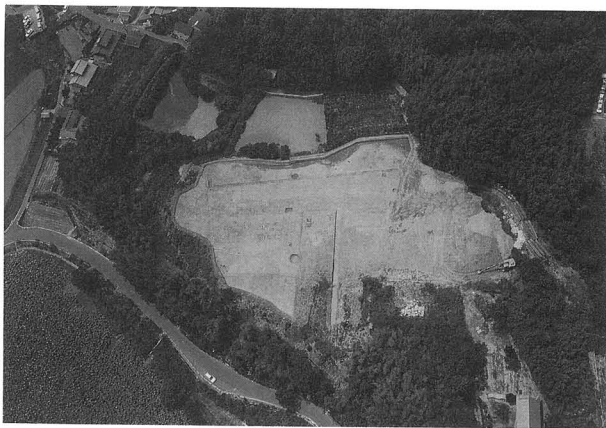


fig. 346 第20トレンチ全景 (航空写真)

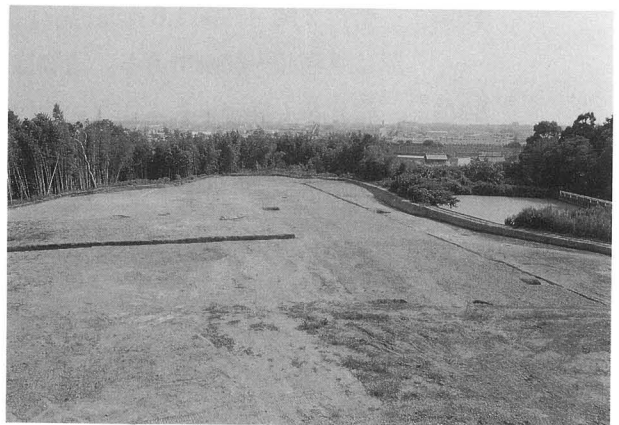


fig. 347 第20トレンチ全景

- 第20トレンチ** 第20トレンチは第19トレンチの北東側の丘陵上に位置する調査区で、土墳墓1基、土坑14基、溝1条、ピット十数基を検出した。
- ST01** 長径1.4 m、短径1.0 m、深さ21cmの土墳墓で、須恵器、羽釜、土師器の壺、鉄釘4点が出土した。出土遺物から13世紀の土墳墓と考えられる。
- SK01** 長径2.0 m、短径54cm、深さ25cmの土坑で縄文時代と考えられる土器片数点が出土している。
- SK02** 西側をST01によって切られており、現存部分で長径66cm、短径55cm、深さ25cmの土坑で、完形の土師器小皿1点のほか、瓦片が出土した。出土土器から12世紀と考えられる。
- SK14** 西側の谷に向かう傾斜の変換点付近に位置する長径2.2 m、短径1.2 m、深さ20cmの不定形の土坑で、完形の須恵器小皿のほか、須恵器、土師器の小片が出土した。出土土器から12世紀代の時期が考えられる。
- SD01** 調査区南西側に位置する幅44cm、深さ24cmの南北方向の溝で、南側の調査区外へとのびている。中世の瓦片が1点出土している。
- ピット** 十数基のピットを検出したがいずれも建物を構成するものでは無かった。SP01から完形の土師器小皿1点が出土している。
- 第21トレンチ** 第21トレンチは第20トレンチの北側の小高い丘陵上に位置する。調査区は東南側に向かって落ちていく地形で、遺構、遺物とも全く確認することができなかった。
- 第22トレンチ** 第22トレンチは第21トレンチの北側に続く南北方向の調査区で、土坑8基、溝1条、ピット約40基を検出した。ピットはいずれも建物を構成するものとして捉えることはできなかった。

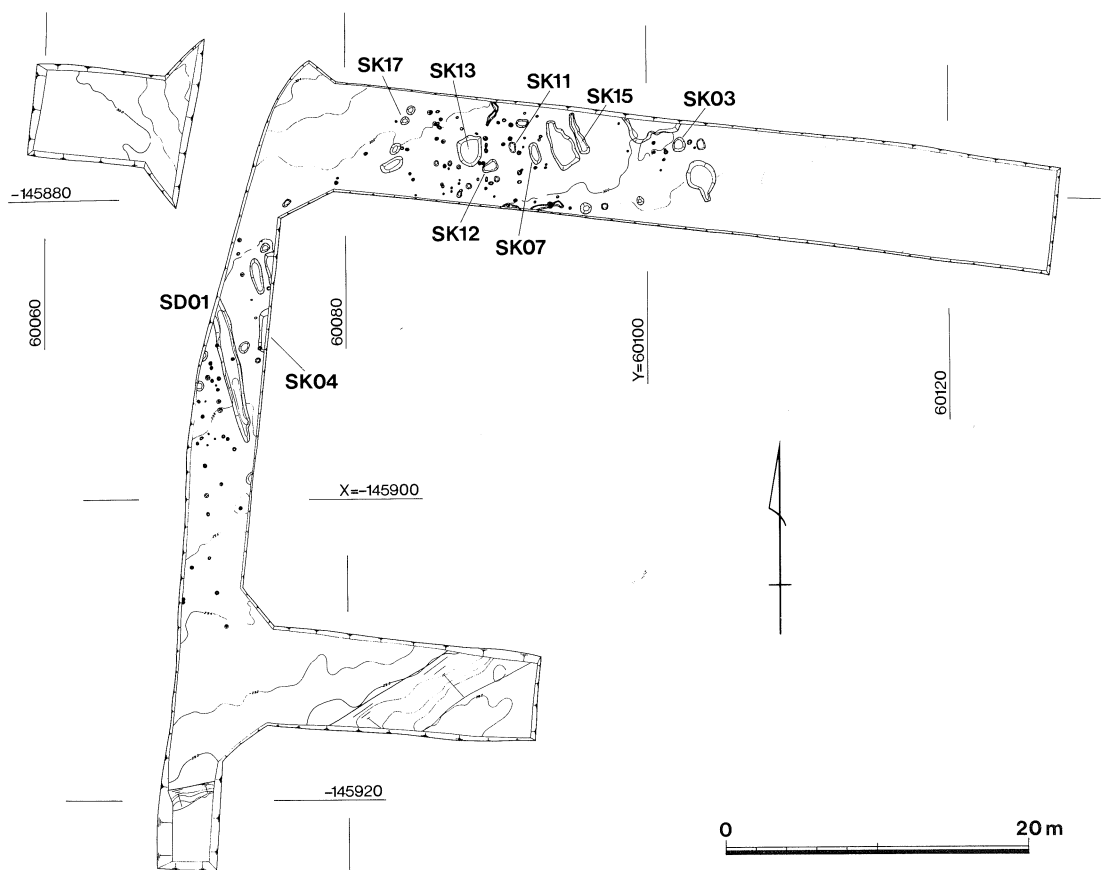


fig. 348 第21～23トレンチ平面図

SK04 幅3.2 m、深さ44cmの土坑であるが、調査区外へと広がるため、全体の規模は不明である。ほぼ完形の須恵器坏身3点を含む須恵器、土師器の小片が出土している。出土土器から8世紀と考えられる。

SD01 北西から南東方向の最大幅1.2 m、深さ24cmの溝で、北西側は調査区外へのびている。完形の須恵器坏身のほか、須恵器鉢、土師器甕を含む多量の須恵器、土師器の小片が出土した。出土土器から8世紀の溝と考えられる。

第23トレンチ 第23トレンチは第22トレンチの北側に続く東西方向のトレンチで道路を挟んで2か所に分かれる。東側の調査区から土坑18基、溝2条、ピット数十基を検出した。遺構はトレンチ西側にのみ集中しており、東側では遺構、遺物を確認することができなかった。道路を挟んだ西側の調査区でも遺構、遺物を全く確認することはできなかった。

SK03 長径95cm、短径85cm、深さ18cmの土坑で完形の須恵器壺1点のほか、須恵器、土師器の小片が出土した。出土土器から12世紀の時期が考えられる。

SK06 長径3.4 m、短径1.5 m、深さ24cmの不定形な土坑で、瓦、須恵器壺、甕を含む須恵器、土師器の小片が出土した。出土土器から12世紀の時期が考えられる。SK03とは埋土の状況はやや異なる。

SK13 長径2.0 m、短径1.6 m、深さ28cmの不定形な土坑で、須恵器、土師器が出土した。出土土器から8世紀の時期が考えられる。

土坑 SK07、11、12、15、17は暗褐色砂質シルトを基本とする埋土で、他はほぼ暗茶褐色シルトの埋土であった。SK17から瓦片が出土しているほか、各遺構から須恵器、土師器が出土しているがいずれも詳細な時期の確定はできない。

ピット 数十基を検出したが、いずれも建物を構成するものと捉えることはできなかった。埋土は暗茶褐色砂質シルトを基本とし、須恵器、土師器、白磁、黒色土器の破片が出土した。

3. まとめ 今年度調査した小山遺跡からは、円形竪穴住居1棟、方形竪穴住居4棟、掘立柱建物4棟の検出をはじめ、丘陵上からは縄文時代の遺構や奈良～鎌倉時代の遺構も確認されるなど、その成果は非常に大きなものであった。

第19トレンチで検出された方形竪穴住居は、共通したその規模、竈の位置から、古墳時代の集落構成を考える上で貴重な資料であり、時期の違う竪穴住居と掘立柱建物との立地がほぼ重なって検出されたことは、それが開発的なものであるのか、或いは占地に関する規則的なものがあったのか、地形的に左右されたものであったのか今後の類例を待ちたい。

第20トレンチからは縄文時代の遺構が確認されたが、当遺跡での確認は初めてのものであり、当遺跡が縄文時代まで遡る可能性があることが判明した。第22トレンチで検出されたSK04、SD01等の奈良時代の遺構は、これまでの調査での空白時期を埋めるものであり、第23トレンチの鎌倉時代の遺構からの瓦の出土は付近に瓦葺き建物の存在を示唆するものと考えられ、今後の調査に期待が持たれる。

今年度の調査では、これまでの調査で明らかになっていた低地部の調査に加え、丘陵部についても遺構の存在密度は高いことを確認することができた。特に古墳時代後期の一括資料は、当遺跡の明石川水系における複合大集落遺跡としての性格を改めて裏付けるものとなった。

## 52. 出合遺跡 第34次調査

### 1. はじめに

出合遺跡は明石川右岸の下流域の沖積地と台地上に位置している。いままでの調査において、弥生時代中期から鎌倉時代までの遺構が検出され、特に、古墳時代中頃から後半の竪穴住居、帆立貝式古墳、中世の集落址などが確認されている。

今回の調査は、住宅建設に伴い、擁壁と地下埋設管により工事に影響される部分約 260 m<sup>2</sup>について調査を実施した。今回行った調査地は、平成3年度の第28次調査の北側に位置する。調査区は、西側から、南北トレンチを第1トレンチ、これに直交する東西トレンチを第2トレンチ、東側の南北トレンチを第3トレンチ、南側の桁形の調査区を第4トレンチと呼称する。

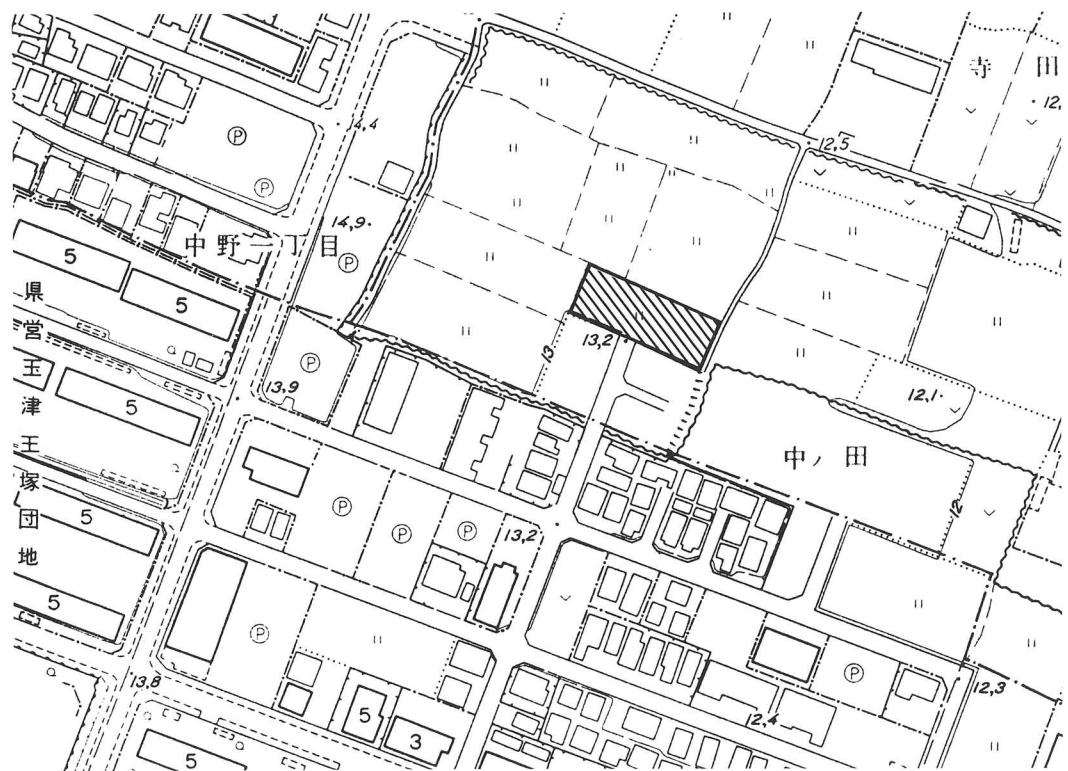


fig. 349  
調査地位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

基本層序は、耕土、床土、旧耕土層、暗灰色シルト層、灰褐色シルト層、遺物包含層の褐灰色砂質シルト層となるが、この層は第1・4トレンチ、第2トレンチの西側にしか存在しない。その下層は、灰色砂質シルト層、灰青色粘質土層、灰色粘質シルト層である。

#### 第1トレンチ

長さ約16m、幅0.8mのトレンチで、遺物包含層からは古墳時代中期頃の土師器が多く出土したが、わずかに弥生土器も含まれている。この面での遺構は確認されなかったが、下層については工事影響深度の関係もあって調査を行っていない。

#### 第2トレンチ

長さ約46m、幅約1.7mのトレンチである。遺物包含層からは、中世の須恵器・土師器と混じって古墳時代の須恵器も出土した。出土量はあまり多くなく小片が多い。第1トレンチで検出された遺物包含層はこのトレンチの西側にしか存在していなかった。

遺構は、溝4条、土坑1基などを検出した。その下層の灰色粘質土層からも古墳時代の須恵器・土師器とが少量出土したが、遺構は確認できなかった。

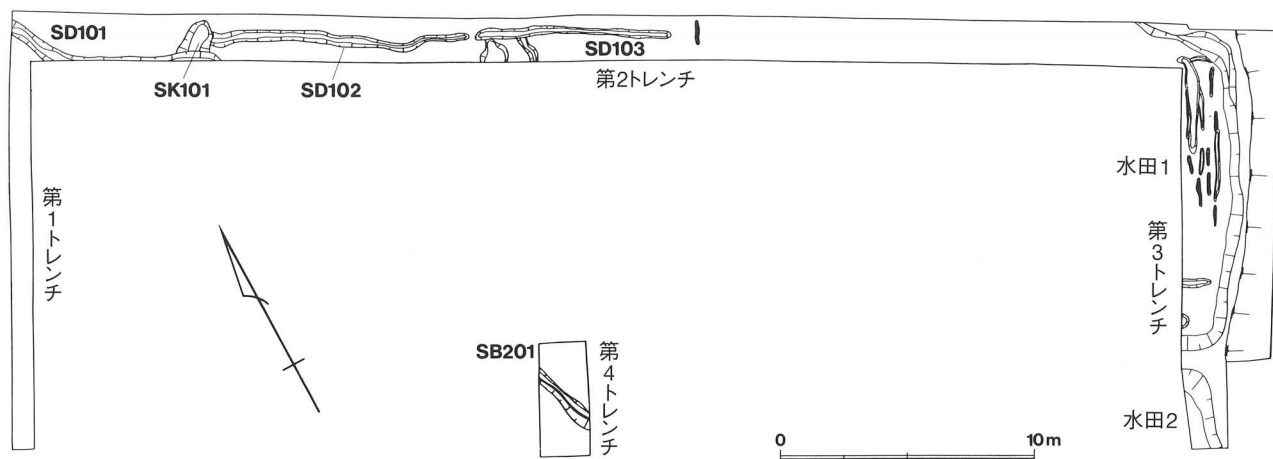


fig. 350 遺構平面図

SD101 最大幅60cm、深さ30cmを測る南北方向の溝で調査区外にのびるため規模については判らない。古墳時代の土師器が出土している。

SD102 幅約40cm、深さ8cmの比較的浅い東西方向の溝である。溝内からは、須恵器・土師器が僅かに出土した。時期については判らないが、SD101よりは時期的に新しそうである。

SD103 SD102から続く東西方向の溝で、幅約30cm、深さ5cmを測る。

SK101 短辺1m、長辺1.25m、深さ20cmの土坑である。埋土の灰色粘質土層からは古墳時代後期頃の須恵器が出土している。

第3トレンチ 長さ17m、幅1.5～3.7mのトレンチである。遺物包含層からは、中世の須恵器・土師器・陶器が出土した。その下層の灰青色粘質土層からは、わずかであるが古墳時代の須恵器が出土している。

第2トレンチ東端から第3トレンチにかけて、水田遺構を2面検出した。水田埋土からは中世の須恵器が出土し、水田面からは十数本の鋤溝痕を検出した。これに伴う水田畦畔内からは、中世の須恵器・土師器と古墳時代の須恵器が出土している。

第4トレンチ 長さ4.5m、幅1.8mの狭小なトレンチである。灰褐色シルト層の遺構で幅50cm、深さ15cmを測る南北方向の溝を検出した。遺物は、淡灰褐色シルト層の溝埋土から鎌倉時代頃の土師器が出土したのみである。その下層では、幅35cm、深さ約10cmの周壁溝を伴い、検出面からの深さ20cmの竪穴住居らしき遺構（SB201）を検出した。埋土の褐灰色シルト層からは古墳時代中期頃の土師器が出土した。

### 3. まとめ

今回の調査では、溝・土坑・竪穴住居・水田遺構など各時代の遺構を検出した。また、弥生時代後期から鎌倉時代、近世の遺物が出土し、連綿とこの地域に遺跡が続いていることを窺わせた。

調査区の東側で中世の水田遺構を検出したが、西側では中世遺構と判るのは確認できなかった。しかし、遺物が出土することから後世に削平されたと考えられる。第2遺構面で検出された溝・土坑は古墳時代後期に属するものと考えられる。第4トレンチ下層の遺構は、調査範囲が狭いため、住居址の可能性が高い。時期から見て、この面は第3遺構面とも考えられる。今後、この地区での調査が進むことにより遺跡の全容が判明するものと思われる。

## 53. 丸塚遺跡

まるづか

### 1. はじめに

丸塚遺跡は、明石川と櫛谷川の合流点から北へ約 600 m のところに位置する。明石川と櫛谷川に挟まれた丘陵の南端、標高約 13~15 m の沖積地にあり、現在の丸塚集落の西側にあたる。遺跡の北西には当地域の代表的な弥生時代集落である玉津田中遺跡が所在し、北側丘陵には居住・小山遺跡、二ツ屋遺跡などがある。このように周辺には明石川流域の沖積低地や段丘上に弥生から中世にわたる人々の生活跡が数多くみうけられる。

当地区は、区画整理事業の計画によって平成 5 年に神戸市教育委員会が実施した事前の試掘調査によって、遺跡の埋存が予想されていた。そこで今回は遺跡の範囲を確認する目的で、事業内の路線予定地内において調査を実施することとなった。1 月 30 日に現地立会をし、2 月 5 日から調査を開始した。

今回の調査は、路線予定地内で 27 か所において、2 m × 10 m のトレンチ (T1 ~ T27) を設定し、重機掘削後、人力による精査をし、遺構等が発見された場合は随時トレンチを拡張して、範囲確認を行った。発見した遺構は輪郭を検出するにつとめ、最小限の掘り込みにとどめた。各トレンチは掘り込み終了後、土層断面と平面の記録をとり、トレンチを埋め戻して 3 月 12 日に調査を完了した。

### 2. 調査の概要 基本層序

基本層序は、I 層. 現耕土、II 層. 耕土下の黄褐色極細砂 (中世土器を包含する)、III 層. 細砂混じり褐色系粘質土でわずかに弥生土器を包含する層、IV 層. 微高地における基盤層である黄灰色系細砂~粘質土、V 層. 櫛谷川の氾濫や自然流路、後背湿地などによる砂礫層、シルト層の堆積の 5 つに大別される。

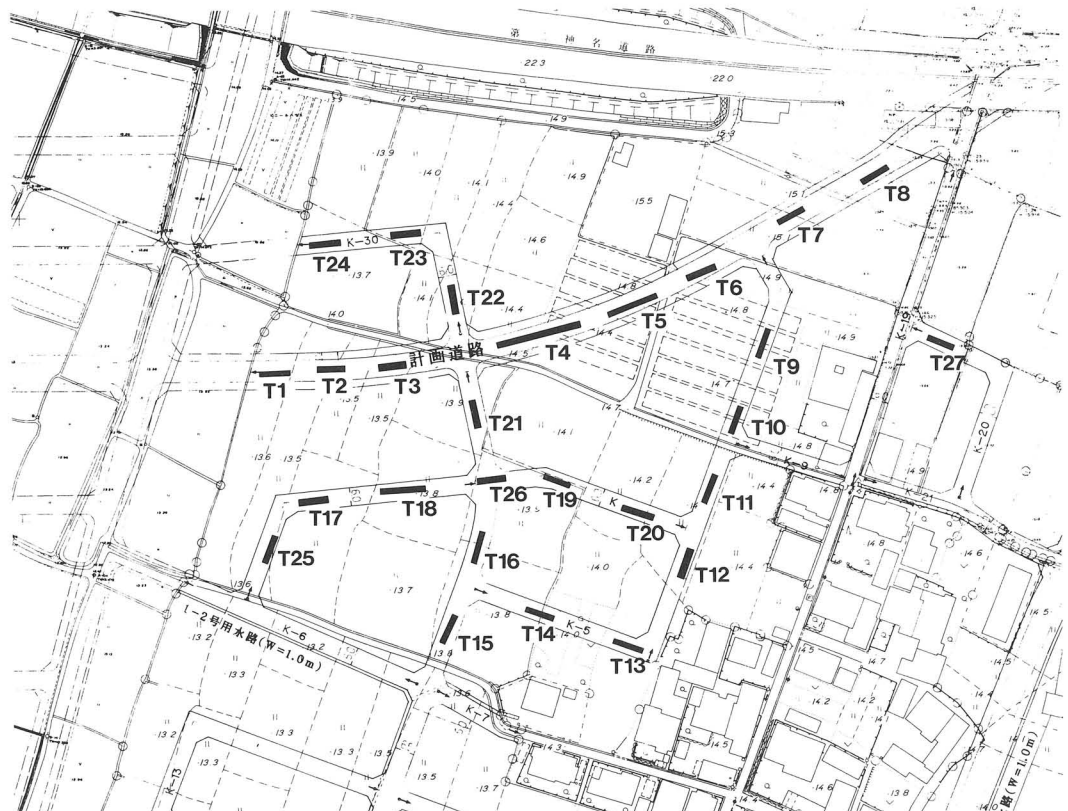


fig. 351  
調査地位置図  
1 : 2,500



各トレンチの概要 路線敷地内に27か所のトレンチを設定し、このうち6か所のトレンチで遺構が確認された。ここでは特徴的な11か所のトレンチについて調査内容をのべる。

T 3 3層（暗褐色粘質土）上面でピットを検出。なお、トレンチ西壁の土層観察によれば、2-2層から掘り込まれているピットがあり、トレンチ底面で検出したピットは2-2層が遺構面となる可能性がある。検出したピットは掘り込みを行ったが、いずれも浅く遺物は無い。おそらく中世の遺構とみられる。埋土は灰色砂質土。

T 6 3層上面で東西に流れる溝状遺構を検出。幅約70cm、深さ約20cm、埋土明灰色細砂粘質土。なお同様な溝状遺構がT 5でも検出されたが、同一の遺構であるかは不明。

T 24 調査区の最も西側のトレンチ。2-2層上面から中世とみられる土坑、ピットが掘り込まれる。遺構の埋土は灰褐色土。調査区内で遺跡の広がり西端を示す。

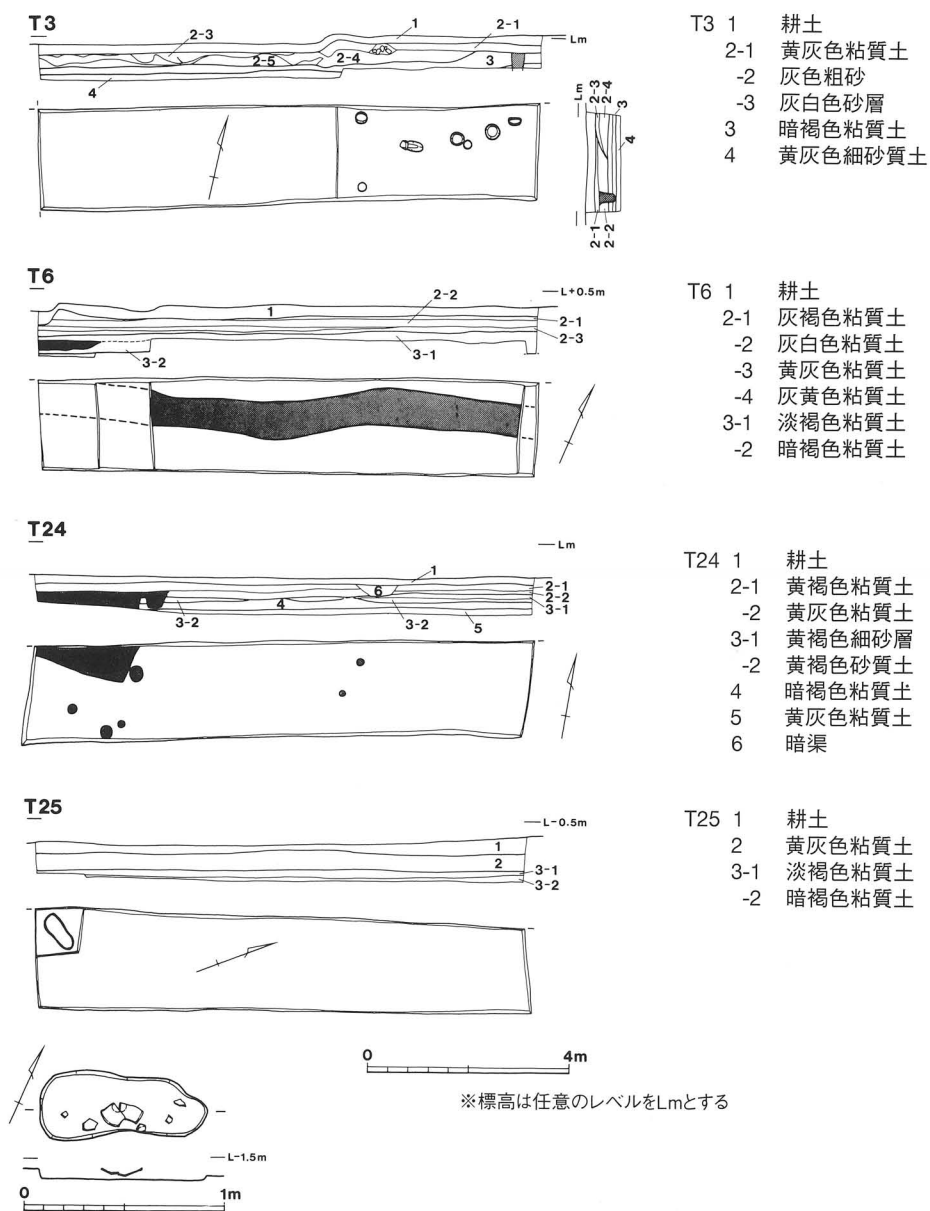


fig. 352 T 3・6・24・25 土層図・平面図

T 25 トレンチ南端で長軸84cm、短軸26cm、深さ10cmの長円形の浅い小土坑を検出。土坑内からは13世紀とみられる中世須恵器の鉢、碗片などが出土した。この土坑は、3-1層上面から掘りこまれたとみられる。他に遺構は検出されなかったが、中世須恵器・土師器が、2層~3層間から多く出土した。

T 5 中世と弥生~古墳時代の2つの遺構面を確認。まず3層上面でT 6と同規模の溝状遺構を検出。さらに下層の4層で竪穴住居または土坑の一部とみられる遺構を検出。埋土は灰黒色粘質土。

T 4 3-1層上面で中世とみられる土坑、ピット（埋土は灰色粘質土）と、弥生~古墳時代とみられる竪穴住居とその周溝とみられる溝状遺構（埋土は暗褐色粘質土）などを同一面で検出。ここでは周辺のトレンチにみられた水田土壌（褐色系粘質土）が堆積しておらず、床土下にしっかりした黄褐色粘質土（3層）の基盤層がある。地形的に微高地と考えられ、遺構の分布がもっとも高い。検出した遺構のうち、中世と考えられる不整形な土坑を部分的に掘り込むが、遺物は無く、明確な時期は不明である。土坑の断面形は皿状で、深さ10~15cmを測る。

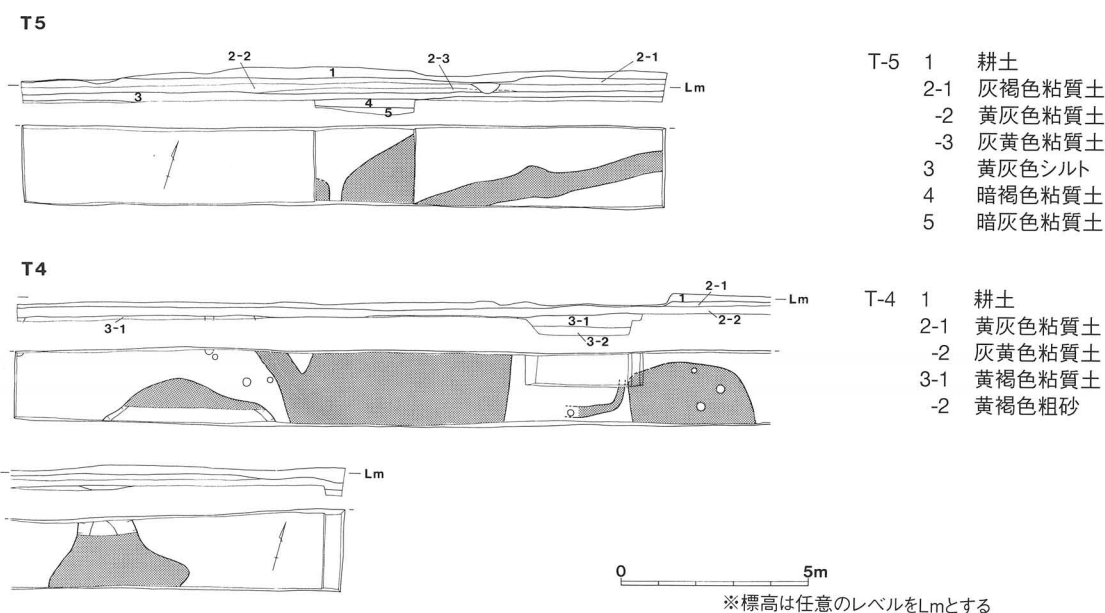


fig. 353 T 5・4 土層図・平面図

T 16 旧水田土壌層下に薄く洪水砂とみられる黄褐色粗砂層が堆積し、その下は暗灰褐色粘土である。洪水砂からは流れ込みとみられる磨滅した弥生時代後期末の土器片が出土している。

T 15 トレンチ下層では砂礫層、シルト層、粘土層が薄く相互に堆積し、河川の氾濫や湿地のよどみのような土砂堆積が認められた。T16と同じく砂層内から弥生土器小片が出土している。

T 12 現在の丸塚集落に最も近く、現地形が微高地であるため遺構の埋存が予想されたが、粗砂層が厚く堆積し、遺構は検出されなかった。T11・13も同様な堆積状況である。

T 1 よくしまった黄灰色細砂層が基盤層であるが、遺構は検出されなかった。T 2 もほぼ同様な堆積を示す。